
鶴巻和哉×貞本義行
太田出版
フリクリノイズ


鶴巻和哉 × 貞本義行
フリクリックノイズ
太田出版


Y.S

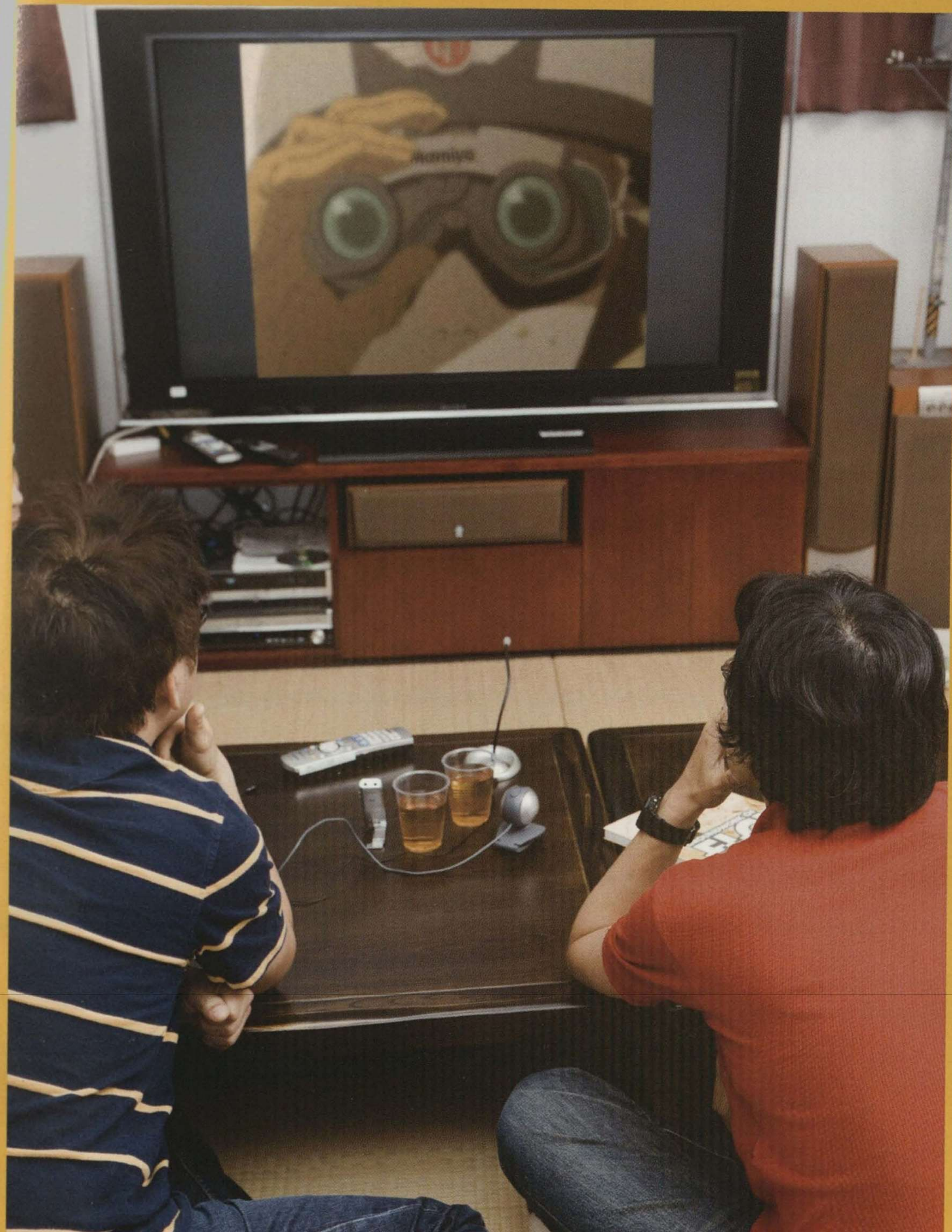

Y.S






F L C L





FLICK NOISE

太田出版

フリップフラップ
フリクリノイズ

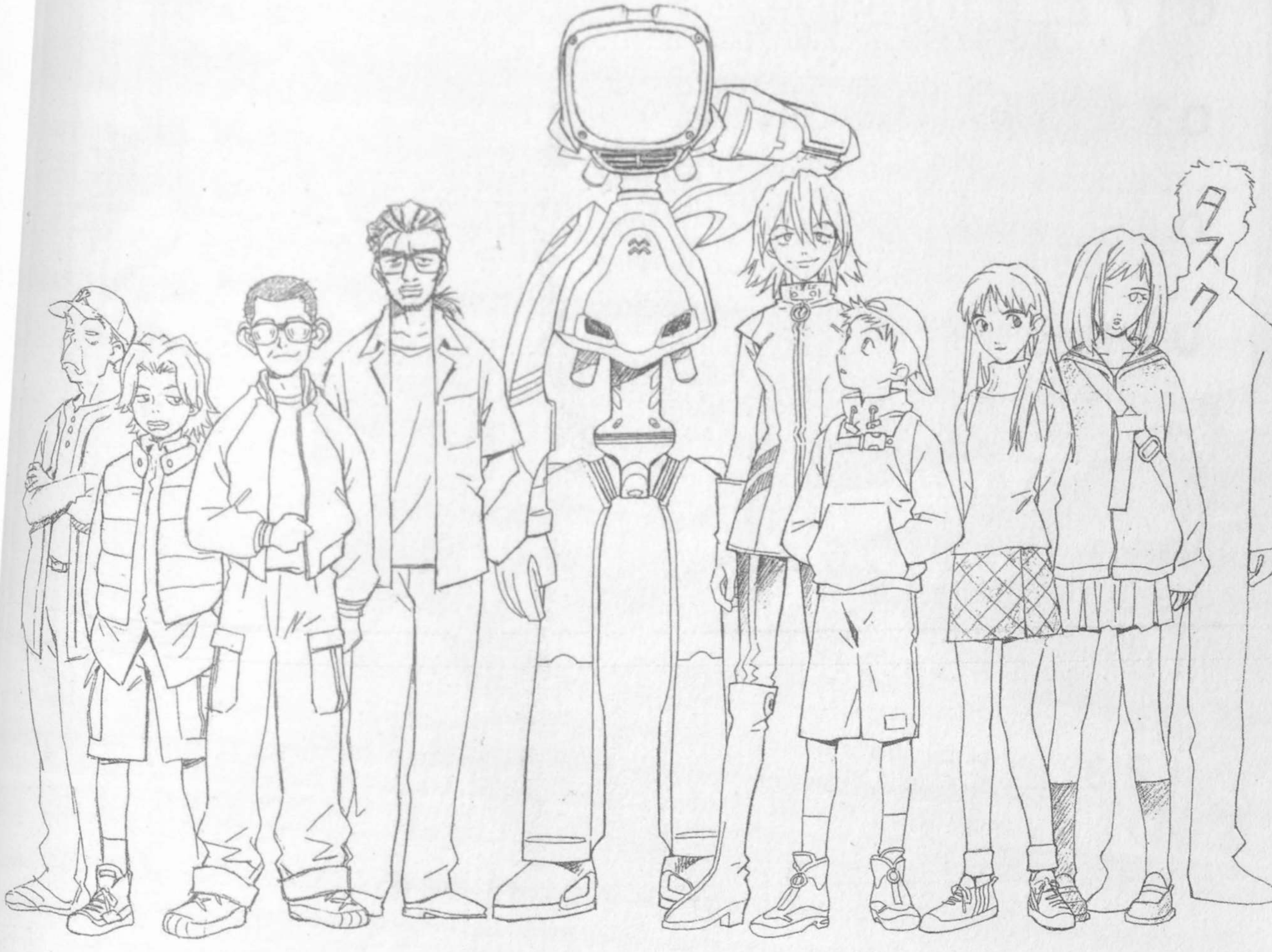
鶴巻和哉
×
貞本義行



CONTENTS

※ 本書に掲載したカットナンバーは『フリクリ画コンテ集』（ガイナックス刊）を参照しました。

※ 本書に掲載したタイムコードは編集部調べです。



INTRODUCTION

A YOUNG PERSON'S GUIDE TO FLCL

WHAT'S ABOUT FLCL

文：宮昌太朗

まず最初に、基本的なデータから押さえておこう。『フリクリ』は2000年から翌2001年にかけて、ガイナックスとプロダクションI.Gが共同で制作を行った、オリジナル・ビデオ・アニメーション（OVA）だ。

監督を務めたのは鶴巻和哉。『新世紀エヴァンゲリオン』で副監督という役職にあった彼の、初めての本格的な監督第一作でもある。そして、キャラクターデザインを務めたのは貞本義行。『エヴァ』はもちろん、『ふしぎの海のナディア』など、アニメ的なケレン味を押さえながらも、リアルに着地してみせるデザイナーとしての冴えた手腕は、改めて指摘してみせるまでもないだろう。

そしてこの作品には、現在、ガイナックスの主力となっているスタッフが数多く参加している。のちに『天元突破グレンラガン』の監督を務めることになる今石洋之。叙情的なシーンから細やかなアクションまで、幅広いアニメートで楽しませてくれる平松禎史。作画監督（一部、コンテも）を務めたこの2人を中心に、すしお、吉成曜、芳垣祐介など。スタッフの陣容を見ると、ある意味、『エヴァ』以前と『エヴァ』以降を繋ぐ、架け橋的なポジションにある作品だと言える。

と同時に『フリクリ』は、日本のセルアニメーションの制作現場に、デジタル技術が導入され始めた、端境期に作られた作品でもある。CGが用いられているカットがある一方で（例えば『マトリックス』をパロディにしたシーン）、薄黄色の空を基調にした全体の色合いは、どこか80年代のアニメーションを思わせる、懐かしさを湛えている。デジタル技術の導入という嵐の只中――その中の試行錯誤から生まれた作品だともいえるのだ。

※

これまで『フリクリ』は、いわゆる「サブカルチックなアニメ」と見られるケースがままあった。ヒロイン・ハル子の乗るベスパ、舞台俳優を積極的に起用したキャスティング、ザ・ピロウズによる劇伴、『サウスパーク』から携帯ゲームまで、無節操にも思える引用の数々。確かに『フリクリ』は、従来のいわゆる「商業アニメーション」の枠から、大きく逸脱しているように見える。

……だが、本当にそうだったのか？

『フリクリ』の中心ともいえる2人――監督の鶴巻和哉とキャラクターデザインの貞本義行が、約5時間以上に渡って、全6話を見直しつつ話し合った今回の対談のテーマは、まさにそこにあった。彼らはいったい何を考え、そして何をやろうとしていたのか。

20世紀から21世紀へと移り変わろうとしていたそのとき――「萌え」も「セカイ系」も「ゼロ年代」も、今ほどはっきりと見えていなかった状況で、彼らはいったい何を試みようとしていたのか？

『フリクリ』は"可能性の中心"である。そうならなかった"21世紀のアニメ"の未来でもあるし、そうなってしまった"21世紀のアニメ"の源流でもある。

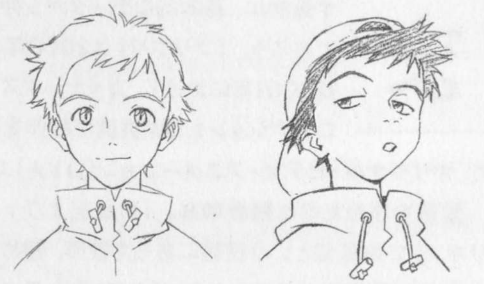
是非あなたも、あなた自身の目で、その"可能性"を見出してみてほしい。本書がその導き手となってくれることを願っている。

[STAFF]
企画・原作：GAINAX ／ 原案・監督：鶴巻和哉 ／ 脚本：榎戸洋司 ／ キャラクターデザイン・ビジュアルコンセプト：貞本義行
作画監督：平松禎史、今石洋之、小倉陳利 ／ 美術監督：小倉宏昌 ／ 色彩設計：高星晴美
編集：浅野真樹子 ／ 音楽：光宗信吉、the pillows ／ 主題歌：the pillows『Ride on shooting star』
プロデューサー：佐藤雅信、西沢正智、佐藤裕紀 ／ 制作：Production I.G、GAINAX
製作：フリクリ製作委員会 ／ 発売・販売元：キングレコード

[CAST]
ナンダバ・ナオ太：水樹 洵 ／ ハルハラ・ハル子：新谷真弓 ／ サメジマ・マミ美：笠木 泉 ／ ナンダバ・カモン：松尾スズキ
ナンダバ・シゲクニ：糸 博 ／ ニナモリ・エリ：伊藤実華 ／ マナベ・ガク：宮島 章 ／ マサムネ・マサシ：鈴木和人
ミユミユ：？ ／ アマラオ：大倉孝二 ／ キツルバミ：千葉千恵巳 ／ ミヤジ・ジュンコ：福井裕佳梨

CHARACTERS





ナンダバ・ナオ太

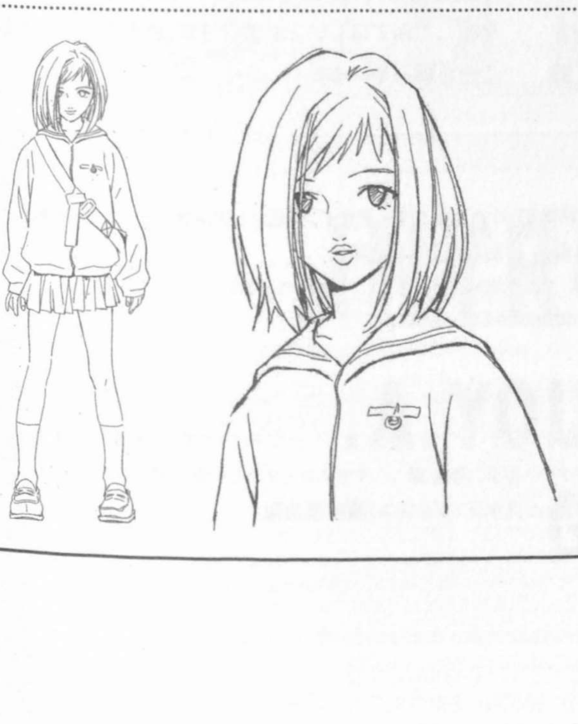
地方都市のひとつ、疎瀬市に住む小学6年生。周囲の大人たちをどこか馬鹿にしている大人ぶった少年だが、押しかけ家政婦であるハル子との出会いを通して、次第に変わり始める。

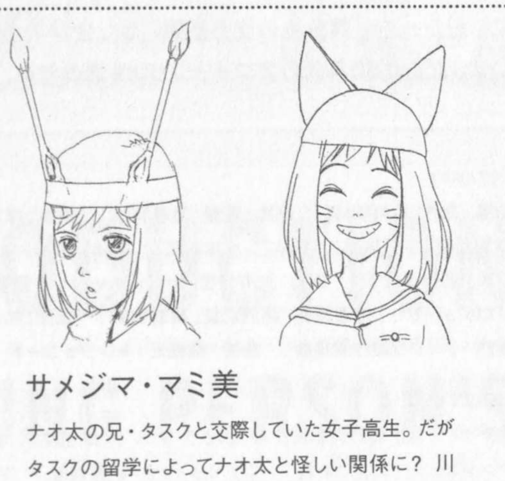




ハルハラ・ハル子

ナオ太の前に現れたエキセントリックな"ベスパ女"。傍若無人で、何を考えているのかよくわからないが、その正体は……?





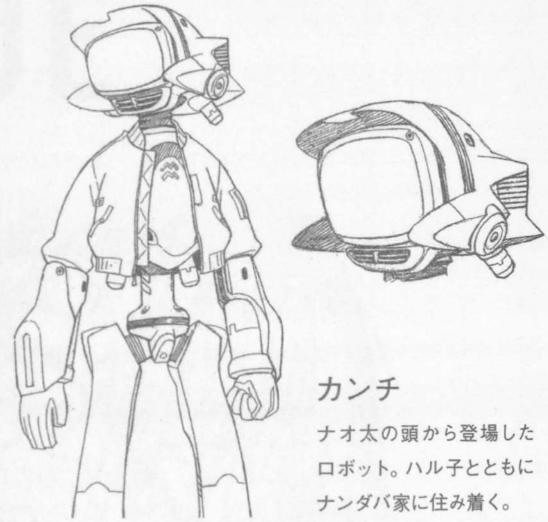
サメジマ・マミ美

ナオ太の兄・タスクと交際していた女子高生。だがタスクの留学によってナオ太と怪しい関係に? 川のほとりで煙草をくゆらせる。



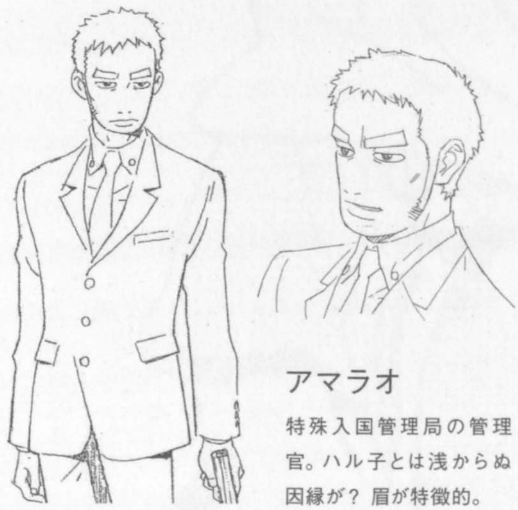
ナンダバ・カモン

ナオ太の父。編集者くずれで、現在も市長を批判するミニコミを発行。



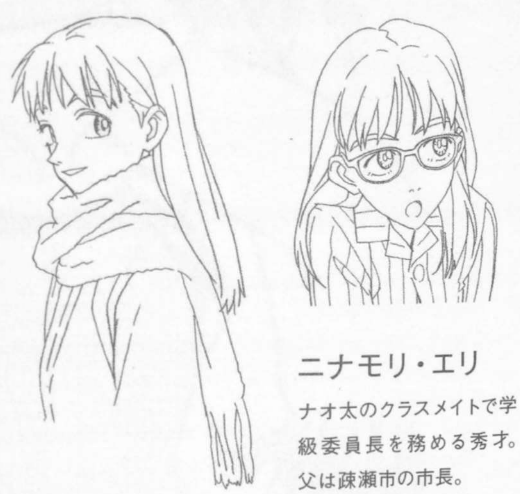
カンチ

ナオ太の頭から登場したロボット。ハル子とともにナンダバ家に住み着く。



アマラオ

特殊入国管理局の管理官。ハル子とは浅からぬ因縁が？ 眉が特徴的。



ニナモリ・エリ

ナオ太のクラスメイトで学級委員長を務める秀才。父は疎瀬市の市長。



ナンダバ・シゲクニ

ナオ太の祖父。草野球チームの監督でもある。



ミヤジ・ジュンコ

ナオ太の通っている小学校の担当教諭。



キツルバミ

アマラオの部下で、特殊入国管理局のメンバー。



アトムスク

メディカルメカニカとハル子が激しい争奪戦を繰り広げる謎の存在。

PROLOGUE



――これから『フリクリ』全6話を、鶴巻監督とキャラクターデザインの貞本さんと一緒に観ながら、いろいろとお話をうかがおうと思ってるんですけども、まずは鶴巻監督。今回、ブルーレイ化の作業で、久々にご覧になったということなんですが……。

鶴巻 久しぶりに全編観たんですけど、「ぶっ飛ばしてるなぁ」と思いました（笑）。これで「わかってくれ」っていうのは、無茶だよねぇと。でも一方で、今観ても古くは見えないとも思いました。10年経った今でも、追いつかれていない「ドキッ！」とするような表現がいっぱいある。

貞本 追いつかれてないというより、誰もやろうとしてない（笑）。

鶴巻 いやいや（笑）。トリッキーな部分のことだけを言ってるのではなくて、もっと真似されてもいいところがあるのになって。まあ、僕がいいと思ってるだけなのかもしれないけど（笑）。

貞本 例えば？

鶴巻 画面全体の色とか。

貞本 色はすっごくこだわってるよね。ちょっと淡い感じとか。

鶴巻 いいと思うんだけど、こっちの方向には誰も行かなかったんだなって。『フリクリ』の美術ってなんというか、クラシックな美術なんです。おそらく、この直後に新海誠さん【※1】が颯爽と現れて、彼の撮影技術も含めた美術がアニメの最先端になっていくんだけれども。

――密度の持ち方だったりとか……。

鶴巻 密度のこともあるし、もっとわかりやすいのは光の描き方でしょう。光まで美術に描き込んでしまうようなやり方は、（美術スタジオの）美峰さん【※2】なんかは、以前からちょっと始めてたことなんですけど、例えば、テレビの『エヴァンゲリオン』の第1話でも、多重露光を使って、光学撮影上で似たようなことを始めていたんですけど、デジタル撮影が主流になって、そういうことがやりやすくなった。

今の『エヴァンゲリヲン新劇場版』【※3】も、どちらかといえばそっちの系統なんですけど、『フリクリ』の美術は、それよりももっとクラシックなんですよ。密度を上げる方向ではなくて、フォルムも色もむしろ単純化することで、この雰囲気を出してる。こういうことは、かえって今のほうが、できなくなってるのかもしれません。

貞本 すごく小倉（宏昌）さん【※4】の本来の味、みたいなものを感じるよね。小倉さんが以前、スタジオ風雅にいた頃、水谷（利春）さんっていう美術監督と2人でや

ってたんですけど、僕が好きだった『新・ど根性ガエル』【※5】とか『おねがい！サミアどん』【※6】あたりの感じが、すごく出てるんですよ。

鶴巻 そうそう。小倉さんっていうと、『王立宇宙軍 オネアミスの翼』【※7】をやって、その後『（機動警察）パトレイバー』【※8】に参加するんで、どちらかというとリアルな方向の美術を描く……。

貞本 ……って、思いがちなんだけどね。

鶴巻 くすんだ色合いを使ってリアルで緻密な美術を要求するアニメの美術監督として有名なんだけれど、『フリクリ』をやるときに最初にお願いしたのは「『おねがい！サミアどん』で」と（笑）。ちょっとギャグっぽい感じもあって、キレイな色で面白いフォルムの美術にしてほしかった。その美術の色味によって、セルの色味も調整していくわけで、『フリクリ』全体の色のトーンというか、雰囲気みたいなものは、小倉さんの美術が作ってるんだと思います。

貞本 全体の、この白茶けた感じも、当時の東京ムービー【※9】っぽいというか、『ど根性ガエル』【※10】っぽい感じがする。初代の『ルパン（三世）』【※11】とか。全体に白っぽい、というか。

鶴巻 なんというか、まだマンガとアニメが分離していなかった時代の雰囲気といえばいいのかもしれないけど。例えば『ルパン』の頃、作っていた人たちがどう考えていたのかはわからないんだけれども、受け取る側としてはマンガとアニメに差がなかったというか、一種、同じものとして観ていたときがあって、線やフォルムの処理の仕方とか影のつけ方、色のコントラストも含めて、まだ、マンガとアニメが分かれきっていない雰囲気があるんですよ。

『フリクリ』でも、背景にスピード感のあるタッチみたいな表現を使ってるんですけど、これなんかはもう明らかに、マンガっぽいビジュアルを使いたい、という意図があってやってることで。普通だったら鉛筆で描いちゃうところを、わざわざGペン【※12】で描いてもらって、それをデジタル上に取り込んでる。通常のアニメで使われる流線、集中線とは違って、もっとコミックっぽいグラフィックなんですよね。

――貞本さんは久しぶりに観ることになるわけですけども……。

貞本 いや、この間、『ヱヴァンゲリヲン新劇場版』のDVDを観たばっかりなんで、それに目が慣れちゃってるせいか（笑）、いやあ、こういう簡素な奴も好きなんですよ。やっぱり線がすごくよく見える。線の面白さだったり、

コミカルな動きっていうのは、きっと細田（守）さん【※13】も悔しがるんじゃないかな、っていうくらい、いい出来だなと思います。

動きに関しては参加してないんですけど、今観ても、やっぱり素晴らしいですよね。さっき第1話をちらっと観たんだけど、中ナシのパカパカっとした動きと、平松（禎史）さん【※14】のネバっこい、リアルな動きが共存してるのがスゴいな、と。

鶴巻　『フリクリ』を始めるときに考えてたのは、平松さんと今石（洋之）くん【※15】を武器に使う、ということでしたね。

貞本　普通は共存できないんですよ。

鶴巻　平松さんはこの後、『Re：キューティハニー』や『（天元突破）グレンラガン』【※16】にも参加するし、もちろんうまいから今石くん的なトリッキーなアクションもできちゃうんですけどね。でも、平松さんの本来の良さっていうのは、もっと繊細な、世界名作劇場的な、日本アニメーション【※17】的な良さなんですよね。で、今石くんは東京ムービーっぽいというか、Aプロ【※18】っぽいというか。

貞本　スタジオZ5【※19】的な（笑）。

鶴巻　今石くんは、金田（伊功）さん【※20】のフォロワーとして有名ですけど、東映の劇場作品で見せていたしなやかな作風ではなく——Aプロ、亜細亜堂【※21】方向の、パカパカっとした動き、中ナシで極端に飛んだ動きを描いて、それでテンポやアクションを作るようなタイプなんです。日本アニメーションとAプロって考えると、それほど遠いわけじゃない気もするんだけれど。

貞本　大丈夫ですかね？　日本アニメーションとかAプロとか、普通に喋っちゃってますけど（笑）。

——大丈夫です、補足します（笑）。

貞本　今の人は全然わかんないだろうなあ。

鶴巻　その、両極端な2人を、キャラとメカで使い分けるんではなく、両方のテイストを持ってる作品に出来ないかな、って。

貞本　第1話の冒頭でいえば、バットを持ってるところのパカパカっていう動きと、マミ美がナオ太にこう、グーッとのしかかってくるときのリアルなタイミング。頭の立体をやたらと強調したようなゆっくりとした動きが共存してる。それが、すごく気持ちいい。それって、ひとつのセンスじゃできないわけで。今回はリアルで行こうとか、ギャグっぽく行こう、って指示を出しちゃうと、絶対に共存しない。そういう複数のセンスが混ざり合ってるのがいいなって。

【＊1】73年、長野県生まれ。ゲーム開発会社に勤務するかたわら、個人で制作を行った短編『ほしのこえ』を02年に発表。宇宙と地上に引き裂かれた少年と少女の物語を、叙情たっぷりに描き、大きな反響を呼ぶ。その後も長編作品『雲のむこう、約束の場所』（04年）、連作短編『秒速5センチメートル』（07年）といった意欲作を発表。

【＊2】93年に設立された背景美術スタジオ。ガイナックス作品では『エヴァンゲリオン』シリーズを代表として『彼氏彼女の事情』（98年）、『アベノ橋魔法☆商店街』（02年）、『これが私の御主人様』（05年）、『天元突破グレンラガン』（07年）などで美術を担当している。

【＊3】庵野秀明が総監督を務める劇場作品（鶴巻は監督として、また貞本はキャラクターデザインとして参加）。全4部作として構想されており、第1作にあたる『ヱヴァンゲリヲン新劇場版：序』が07年に、続く第2作の『破』が09年に公開され、どちらも大ヒットとなった。テレビシリーズ版『新世紀エヴァンゲリオン』（95年）の設定とキャラクターを踏襲しながら、まったく新たなストーリーを構築したリビルド（再構築）版。

【＊4】『フリクリ』の美術監督。対談中でも触れられている通り、もともとはスタジオ風雅のメインメンバーとして活躍していたが、独立して自らが主宰する美術スタジオ・小倉工房を設立。数多くの作品で手腕を振るっている。初美術監督作は、ガイナックス初の長編劇場作でもある『王立宇宙軍 オネアミスの翼』（87年）。

【＊5】81年から82年にかけて放映された。制作は東京ムービー新社。

【＊6】85年から86年にかけてNHKで放映されたテレビアニメ。イーディス・ネズビットの『砂の妖精』を原作に、1日に一度だけ願い事を叶えてくれる砂の妖精・サミアどんと、彼が巻き起こす騒動を描く。チーフディレクターを小林治が、またキャラクターデザインを芝山努が務め、各話演出として望月智充や本郷満（現・みつる）、片渕須直といった面々が参加している。東京ムービーが制作。

【＊7】87年に公開された、山賀博之監督による劇場作品（ガイナックスは、この映画を制作するために設立された）。落第部隊と揶揄されるオネアミス王立宇宙軍の士官・シロツグを中心に、人類初の有人人工衛星の打ち上げに挑む若者たちの姿を描く。貞本は、キャラクターデザイナー・作画監督として参加し、また小倉宏昌の初美術監督作品でもある。

【＊8】ゆうきまさみや出渕裕、押井守らによる制作集団「ヘッドギア」が原案を担当した、近未来ロボットシリーズの総称。OVA、劇場作品、テレビシリーズ、コミックスなど、様々なメディアで展開され、人気を博した。小倉は、89年に公開された劇場版第1作と93年の劇場版第2作で、それぞれ美術監督を担当。舞台となる東京の街を、リアリティあふれる筆致で見事に描き出している。

【＊9】64年に設立されたアニメ制作プロダクション。『巨人の星』や『パーマン』『怪物くん』など、数多くのテレビアニメを手がけた老舗スタジオのひとつ。中でも『ルパン三世』は、現在に至るまで新作が作り続けられる人気シリーズとなった。

【＊10】72年と81年の2回にかけて放映された、テレビアニメ番組（制作は東京ムービー）。原作は、吉沢やすみによる同名マンガ。作画監督として参加した、小林治・芝山努の代表作のひとつでもあり、また美術監督の小林七郎、チーフディレクターとして途中から参加した長浜忠夫など、（現在の目から見ても）錚々たるスタッフが集まった名作。

【＊11】71年に放映開始されたテレビアニメシリーズ（原作はモンキーパンチ）。当初は大隅正秋監督のもと、大人向けアニメーションとして企画・制作されたが、視聴率低迷に従い打ち切りに（第1期）。だが再放送によって再評価され、第2シリーズおよび劇場版が制作されるなど、人気シリーズとなる。制作は東京ムービー。

【＊12】つけペンの一種で、ペン先が柔らかいため、迫力のある線が描けることが特徴。コミックス、特に劇画の作画に使われることが多い。セルアニメーションの現場では、原画の作画に鉛筆を使う場合が多いため、鶴巻の発言はその違いが念頭にある。

【＊13】67年、富山県生まれ。映画監督・演出家。金沢美術工芸大学を

卒業後、東映動画に入社し、アニメーター・演出家として活動。劇場作『デジモンアドベンチャー ぼくらのウォーゲーム！』（00年）で高い評価を得る。貞本は、彼の監督作品『時をかける少女』（06年）、『サマーウォーズ』（09年）で、それぞれキャラクターデザインを担当。

【＊14】63年、愛知県生まれ。アニメーター・演出家。『ふしぎの海のナディア』（90年）で初めて作画監督を務め、『彼氏彼女の事情』ではキャラクターデザインを担当。ガイナックスの中核スタッフのひとりとして、スタジオの屋台骨を支え続けている。また『フリクリ』では、第1話と第3話、第6話の作画監督を担当したほか、第6話では絵コンテも担当している（鶴巻監督との連名。担当シーンについては本書の「第6話」を参照のこと）。

【＊15】71年、東京都生まれ。アニメーター・演出家。多摩美術大学を卒業後、ガイナックスに入社。『新世紀エヴァンゲリオン』に動画として参加し、その後も『彼氏彼女の事情』などで主要スタッフとして活躍。『フリクリ』では、第2話と第5話の作画監督（第5話は絵コンテも）を担当した。その後、初監督となる劇場作『DEAD LEAVES』（04年）を経て、『天元突破グレンラガン』を監督。現在は、新作『Panty & Stocking with Garterbelt』を準備中。

【＊16】07年に放映開始された、今石洋之監督によるテレビアニメシリーズ（制作はガイナックス）。荒涼たる未来世界を舞台に、ガンメンと呼ばれるロボットに乗り込んだ少年たちの戦いを描く、ロボットSFアクション。鶴巻は第17話の絵コンテを担当したほか、アニメーターとしても参加。貞本も、最終話（第27話）に原画で参加している。

【＊17】75年に設立されたアニメ制作プロダクション。同社の設立とともに放映がスタートした『フランダースの犬』（75年）から始まる、世界名作劇場で知られる。そのほか『未来少年コナン』（78年）や『ちびまる子ちゃん』（90年）、『南国少年パプワくん』（92年）など、ヒットシリーズも多い。

【＊18】65年に設立されたアニメ制作プロダクション。正式名称はエイプロダクション。東京ムービーとの業務提携のもと、その制作部門として『ルパン三世』や『ど根性ガエル』『元祖天才バカボン』など、数多くの作品に関わっていた。

【＊19】後述する金田伊功が所属したスタジオZから独立した、平山智、亀垣一らによって設立された作画スタジオ。

【＊20】52年、奈良県生まれ。東映動画にてアニメーターとしてのキャリアをスタートさせ、その後、スタジオZやスタジオＮｏ．1といった作画スタジオで活動。極端に中割りを省いたアクション、また「金田びかり」と呼ばれる独特の光の表現など、ユニークなスタイルで注目を集める。また80年代中盤からは、スタジオジブリ作品の中核スタッフとして活躍し、後年はスクウェア・エニックスに所属して、ゲームのムービーパートの制作などに従事。09年、惜しまれつつ他界した。

【＊21】78年、芝山努や小林治らが中心となり、シンエイ動画から独立する形で設立されたアニメ制作プロダクション。シンエイ動画や東京ムービー、スタジオぴえろの下請けとして、数多くの作品に関わる。

#1 フリクリ



STORY 「すごいことなんてない。ただ当たり前のことしか起こらない」。そううそぶく小学6年生の少年、ナンダバ・ナオ太。だが、彼の“当たり前”はある日突然、崩れ去る。黄色いベスパに乗った謎の女――ハルハラ・ハル子は、いきなりナオ太の頭を強打。そして数日後、殴られてできた巨大なコブから2体のロボットが出現。起こらないはずの“すごいこと”に巻き込まれてしまった、ナオ太の運命やいかに？

――まずは、第1話「フリクリ」から観ていきたいと思うんですが、改めて観てもやっぱりトバしてますよね（笑）。ほとんど説明せずに、どんどん状況が展開していく。しかもマミ美の語りから始まるっていう構成ですよね。

鶴巻　なんでこうなったんですかね（笑）。よくわかんない。自分でも、どれくらい確信犯的だったのか、もうわからない。

貞本　しかも冒頭のカメラって、要するに、ハル子が双眼鏡を覗いてるっていうカメラワークなんだけど「説明されなきゃ、わかんねーよ！」っていう（笑）。まあ、後から説明はされるんだけど。

――ああ、そうか、これはハル子の視点なんですね。

貞本　普通の、双眼鏡みたいなフレームが描かれてれば、まだ理解できるんだろうけど。

鶴巻　もちろん「これがいい！」と思ってやってるわけだけど。OVAだったから、1回観ただけでわかっちゃうようなのは、せっかく購入してもらった人に失礼じゃないか？とは、思ってたかな。わからなくたって、何度も観返せば、いつかわかるって。

――あははは（笑）。で、冒頭は、この後、何回も繰り返し出てくる河川敷が舞台なんですけども、さっそくナオ太がマミ美に後ろから抱きしめられてますよね。

鶴巻　こういうのが好きなんです（笑）。当時の青年マンガ誌では、こういう雰囲気は、よく描かれてたんですよ。ただ、アニメではあまり見かけなかった、というのがあって。

貞本　わりと最初の頃のキーワードで〝ヤンマガ【※1】っぽい〟ものをやりたいね、っていうのはあったよね。

鶴巻　そうですね。ヤンキーじゃないほうの〝ヤンマガっぽさ〟。

――作者でいうと、望月峯太郎さん【※2】とか……。

鶴巻　他にも、安達哲さん【※3】とか古谷実さん【※4】とか。こういう空気をアニメでも

【＊1】正式名称は『週刊ヤングマガジン』。80年、講談社から青年向け週刊コミック誌として創刊。当初は月2回刊だったが、89年より週刊化。

【＊2】64年、神奈川県生まれ。マンガ家。85年に連載開始された『バタアシ金魚』で一躍注目を集め、その続編となる『お茶の間』、『鮫肌男と桃尻娘』といった作品で話題を集める。また、崩壊した世界を舞台に少年少女たちがサバイバルする様子を、圧倒的な筆致で描ききった『ドラゴンヘッド』は、97年に第21回講談社漫画賞の一般部門を受賞。

【＊3】68年、東京都生まれ。マンガ家。86年に『週刊ヤングマガジン』の新人賞でデビュー。高校生の日常とその裏に潜む闇を描いたカルト作『さくらの唄』や、テレビドラマ化もされた『お天気お姉さん』といった作品で人気を集める。99年から連載を続ける『バカ姉弟』で、文化庁メディア芸術祭の優秀賞を受賞。

やってみたい、と。そういうことは意識してましたね。
――もう少し具体的にいうと、その〝ヤンマガっぽさ〟というのは、どういうものなんでしょう?
鶴巻 簡単にいっちゃえば「青春モノ」ですけどね。『ジャンプ』的な健全すぎる青春モノでもないし、『サンデー』的なラブコメでもない。もっと屈折した、ネガティブな部分も積極的に描くような青春モノ、ということなんだろうと思うんだけど。必ずしもハッピーエンドばかりじゃない「青春モノ」、ということかな。
――少年マンガではなく、青年誌の雰囲気を狙いたい。ただそれを、主人公を小学生でやるという(笑)。
鶴巻 なんかね、〝青年誌っぽさ〟を狙うと、どうしてもセックスまで描かざるを得なくなる。でも、そこまで描きたくなかったっていうのもあると思います。主人公が小学生だったら、セックスを直接は描かずに、青年誌のメンタルな部分が描けるかもって。例えば『新世紀エヴァンゲリオン』にしても――これは『エヴァンゲリオン』の後の作品ですけど――テレビの終盤や劇場版では、セックスを描きかけるところまでいってる。でも、それが快感だとも思えなかったし、カッコいいとも思えなかった。アニメで直接描くのはやり過ぎなのかも? その抵抗感が残っていたというのはあります。
――ただ、その一方で『フリクリ』は、性的なメタファーがいっぱい出てくる作品なわけですよね。今まさに、童貞を喪失するシーン(最初にハル子に頭を殴られる場面)なわけですが(笑)。
鶴巻 直接、明け透けに描くことに抵抗感があるのであって、性的な快感や感覚を描きたくないわけじゃないんです。当時、テレビでもパンチラを描いちゃいけないとか、規制の動きが強くなってきた時期でもあったんですよ。それは『エヴァ』のせいでもあるわけで



【*4】72年、埼玉県生まれ。マンガ家。中学の卓球部を舞台にしたギャグマンガ『行け!稲中卓球部』で93年にデビュー。その後に手がけた『僕といっしょ』からは、次第にシリアス寄りに作風を変化させ、日常の中に潜む狂気や倦怠、焦燥感といったものを、執拗に描くように。主な作品に『ヒミズ』『シガテラ』『ヒメアノ~ル』など。

すけど。いずれ、近いうちにテレビでは、相当婉曲な表現であっても描けなくなるんだろうと。

――ああ、なるほどなるほど。

鶴巻　例えば、庵野（秀明）さん【※5】は「直接」が好きなんです（笑）。だから『トップをねらえ！』【※6】で――実際には見えてないけど、原画ではちゃんと陰毛が描いてあったりとか、生理に関する会話がされたり、庵野さんにとってはそれがリアルだし、表現としてカッコいいということなんだと思います。こういうことがたとえ規制されたとしても、直接的じゃない方法で、性的なことは描けるって。そういうことは考えてましたね。あと、榎戸（洋司）さん【※7】も、メタファーを使って性的なことを描くのが好きだっていうのもあったし。

貞本　メタファーを使うことによって、遊びになる――遊び心になるってこと？

鶴巻　それもあるけど、なんていうか――パンツとかおっぱいとか、即物的ではない領域まで表現可能なんじゃないか？って、チャレンジ精神も、あることはある（笑）。

――ハル子、マミ美、ナオ太と主要なキャラクターが、バババっと登場するわけですけど、貞本さんから見て、ハル子のキャラクターというのは難しくなかったですか？

貞本　いやもう、全然わかんなかったですね。ハル子だけは、ずっとわかんなかった。ほかのキャラクターはすべてわかったんですけど、ハル子だけはわかんなかったですね。まず最初に、マッキーから「キレイなお姉さん」っていう注文があったんですけど、制作を始めて早々に、新谷（真弓）さん【※8】に声をお願いするっていう話を聞いて。キレイなお姉さんっていうと、例えばメーテルだったりとか、いろんなキャラクターがいるわけじゃないですか。でも、新谷さんのあの声――わりとハスキーな声ですよね。あの声を聞くと、どうしてもなんか、意地悪そうな顔になってしまう。で、結果として、こういう顔に

【＊5】60年、山口県生まれ。大阪芸術大学に在籍時から自主制作活動に携わり、山賀博之らとともに「DAICON FILM」の制作に参加。上京後は『風の谷のナウシカ』『超時空要塞マクロス 愛・おぼえていますか』などで、アニメーターとして手腕を振るう。また『王立宇宙軍 オネアミスの翼』制作のため、設立されたガイナックスに参加し、以降、主要スタッフとして活躍。現在は、自ら主宰するスタジオ、カラーにて『ヱヴァンゲリヲン新劇場版』の制作に携わっている。

【＊6】88年に発表された、庵野秀明監督によるOVA（全6作。制作はガイナックス）。宇宙に進出を果たした人類とその前に立ちはだかる宇宙怪獣の戦いを描くSFアクション。映画『トップガン』と『エースをねらえ』を合体させたタイトルからもわかる通り、パロディに満ちたディテールとしっかりと考証されたSF設定、そして熱血モノのセオリーを踏み越えていくストーリー展開など、圧倒的なクオリティを誇る作品。鶴巻は、この作品を観てガイナックスへの参加を決意したという。「陰毛を描いてあったり」というのは、第2話

なっちゃったわけだけど（笑）。そんな彼女が、小学生のナオ太から見て、魅力的な「お姉さん」に描けるんだろうか、っていう。そこはもう脚本だったり、監督に任せるしかないよな、と思ってましたね。どうやったって、可愛くはならないだろう、と思ってたんですけど。

――いやいや、結構カワイイと思いますよ（笑）。

貞本　まあ、よくわかんないです（笑）。

鶴巻　あははは（笑）。お姉さんキャラといえば、メーテルやミサト【※9】がいるわけですけど、ああいうセックスアピールのあるお姉さんとして、ハル子を描いてもよかったのにね。本来は、そういう部分も含めて、魅力的に描きたいと思ってたんだけど、いざ表現をしていく上で、抜け落ちてしまったのかもしれない。テーマ的な部分での魅力を描ききろうとするあまり、性的な、女性としてのハル子の魅力を描く余裕がなくなってしまった気がします。

――そもそも貞本さんからは『ロボット8ちゃん』【※10】的な、明朗なテイストをやりたい、という話を鶴巻さんにされてたわけですよね。

貞本　なんというか〝浦沢劇場〟的な【※11】――みんなが長屋に住んでいて、そこにお手伝いさんがやってきて少年の家族に紛れ込んで……みたいなものを想定していたんで、わりとそういう「キレイなお手伝いさん」みたいなイメージで、ハル子は考えてたんですよ。

――『ロボコン』【※12】におけるロビンちゃん的な（笑）。

貞本　まあ、そういう部分はベスパに乗ってるところとかに反映されてるのかもしれないと思うんだけど。

鶴巻　ときどき思い出したように「キレイなお姉さんですよ」ってやるんだけど、普段は変な顔ばっかりしてる（笑）。僕はそういう女性も好きなんだけど。

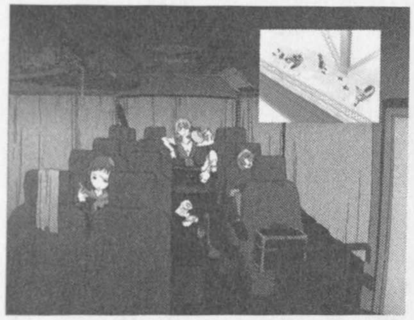
の風呂場のシーンを指しているものと思われる。

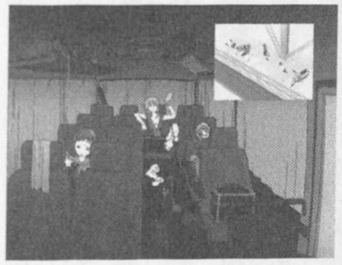
【＊7】63年、滋賀県生まれ。脚本家。『美少女戦士セーラームーンS』（94年）に脚本家として参加、続く『SuperS』ではシリーズ構成を担当し、一躍注目を集める。ガイナックス作品では『新世紀エヴァンゲリオン』に各話脚本として参加、また『フリクリ』『トップをねらえ2!』と、鶴巻監督作品をストーリー面から支えるパートナーでもある。

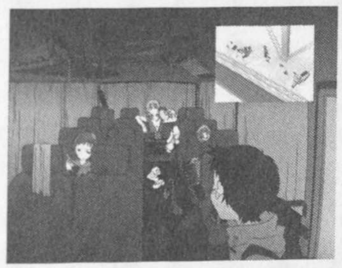
【＊8】ハルハラ・ハル子を演じた女優・声優。75年、広島県生まれ。ケラリーノ・サンドロヴィッチが主宰する劇団「ナイロン100℃」の劇団員として数多くの舞台に参加。『彼氏彼女の事情』の芝姫つばさ役として初めて声優を経験し、その後もいくつかのアニメ作品に参加する。また近年では、テレビや映画などでも活躍中。

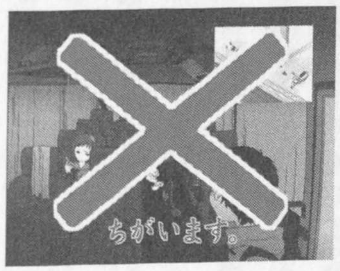
【＊9】「メーテル」は『銀河鉄道999』のヒロイン、メーテルのこと。また「ミサト」は『新世紀エヴァンゲリオン』で、主人公・碇シンジの指導にあたる葛城ミサトのこと。

貞本　だからハル子は、ギターを背負ってるとかベスパに乗ってるとか、カッコいい方向にシフトしていって。女性らしさについては演出に任せようって、諦めちゃいましたね（笑）。


#1-C098　05:15


C098　05:17


C098　05:24



C098　05:27

鶴巻　ここ、今にしてみると「入れなくてもよかった」って思いますね（笑）。

――あははは、入れなくてよかったんですか（笑）。

鶴巻　「このアニメはガチャガチャしていて、何でもあり」っていうアピールをしたかったということではあるんだけど。表現として縛るのはやめて、いわゆる「アニメ」であればいいなっていう。

貞本　あの、カメラが回り込むのってなんていうんだっけ？

――マシンガン撮影（ブリットタイム）？

鶴巻　そうそう、『マトリックス』【※13】のヤツですね。

貞本　これを作ってるとき、ちょうど『マトリックス』の直後くらいだったんだけど

【＊10】81年から放映開始されたテレビ特撮番組。ドジなロボットの8ちゃんと周囲の人々が巻き起こす騒動を描く。石ノ森章太郎が原作を手がける、東映不思議コメディシリーズの第1作であり、そのほのぼのとしたテイストとときにシュールな展開は、大きな人気を集めた。

【＊11】スラップスティックな展開が特徴的な脚本家、浦沢義雄の脚本作品を指して、ファンは〝浦沢劇場〟と呼ぶことも。『ロボット8ちゃん』には各話脚本としての参加だったが（シリーズ構成は大和屋竺）、続く東映不思議コメディシリーズの第2作『バッテンロボ丸』からはメインライターを担当。また浦沢は『とっても!ラッキーマン』や『おろしたてミュージカル練馬大根ブラザーズ』など、数多くのアニメ作品にも関わっている。

【＊12】74年から放映された子供向け特撮番組のこと。正式名称は『がんばれ!!ロボコン』（原作は石ノ森章太郎）。「ロビンちゃん」は、主人公ロボコンたちの憧れの的である、少女型ロボットのこと。

……。

鶴巻　まあ、それをギャグにしてるっていう（笑）。

貞本　わざわざアニメでマシンガン撮影をやって、ギャグにしたいっていう。それだけのネタですよね。

鶴巻　どれだけリアリティを感じさせられるか、現実の世界にどれだけ近いか、そういう部分を一生懸命追求していることが、よりよいアニメーションである、みたいな風潮がありますよね。でも、アニメってそれだけじゃないでしょ、と。『ど根性ガエル』だったり、シンちゃん（樋口真嗣）【※14】が好きなアレ、なんていいましたっけ？

貞本　『ピュンピュン丸』【※15】？

鶴巻　それです。ああいう、ナンセンスなものは「色物」であって「よいアニメ」とは見てもらえない感じがあって。ガイナックスでいえば『王立宇宙軍』もそうだし、押井（守）さんの作品なんかもそうだと思うんだけど、よりリアルに、どれだけ現実に近い世界を描けるか。それがアニメーションの目指すべき方向なんだ、みたいな感覚があった。

貞本　アニメって、そもそもがウソなわけじゃないですか。すべてがウソなわけだから、その中でできるだけリアルな空気感だったり、時間と動きのタイミング、あとは感覚を追求したほうがいい。そのほうが「よい」と思われがちだった。

鶴巻　頑張ってリアリティ、特に演出面でのリアリティを追求しないといけない。そうじゃないと、アニメは結局、全部ウソになっちゃう。そういう感じが、アニメ業界にはありましたね。

貞本　それが窮屈だ、と。

鶴巻　……いや、それでも別にいいんだけど。ただ、僕自身は『うる星やつら』【※16】も『さすがの猿飛』も大好きだったわけで、リアルじゃなくても全然いいんじゃないか、と思っ

【＊13】99年に公開された、ジョエル・シルヴァー製作、ウォシャウスキー兄弟監督による劇場用映画。荒廃した近未来と仮想世界を舞台に、人工知能と人類の壮絶な戦いが、鮮烈なビジュアルとともに描き出される。対談中に話題になっている「マシンガン撮影」とは、ストップモーションのまま、カメラが登場人物の周囲を移動する撮影技法のこと（「ブリットタイム」とも呼ばれる）。

【＊14】65年、東京都生まれ。映画監督。『ローレライ』（05年）や『日本沈没』（06年）などの監督として知られる樋口だが、ガイナックスとの縁も深く、『ふしぎの海のナディア』では一部監督を、また『ヱヴァンゲリヲン新劇場版：序』『破』では、絵コンテなどで参加。日本のアニメ・特撮界のキーパーソンのひとり。

【＊15】67年から放映開始されたテレビアニメ番組。原作は、つのだじろうの『忍者あわて丸』。制作は東映動画。

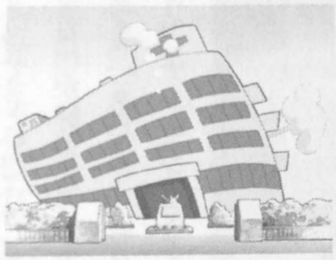
てた。嘘っぱちな荒唐無稽アクションと、リアルな空気は共存して行けると思ってたし、共存することによって、どちらかがマイナスになるってことは、ないんじゃないかな、って。『フリクリ』がフィクションだって、感じながら観てもらって構わない。リアルでしょ、と嘘をつく必要なんてないでしょう。

貞本　フィクションであることを前提に、楽しんでほしい？

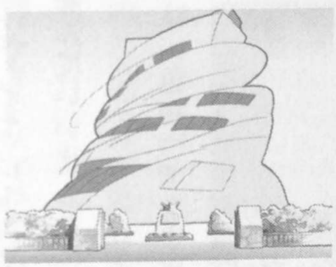
鶴巻　たとえ、フィクションだとわかっていたって、観ている人はナオ太に感情を乗せて観ることができるでしょう？って思ったんですね。



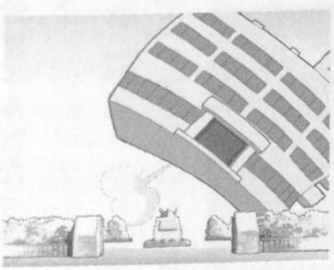
#1-C171　09:38



C171　09:39



C171　09:41



C171　09:44

【*16】81年から86年にかけて放映された、テレビアニメ番組（制作はスタジオぴえろ、ディーン）。高橋留美子の人気マンガを原作に、能天気な主人公・諸星あたると彼の家に押しかけてきた宇宙人のラム、そして周囲の人々が巻き起こす騒動を描く。チーフディレクターとして途中まで参加した押井守の名前を、一躍有名にした作品である。

――たぶん、さっきから問題になってるのは、まさにこういうことで（笑）。病院の中で大騒ぎ、っていうデフォルメ表現なんですけど、これがなぜ、さっきのシリアスなシーンと同じ作品の中に入ってるんだろう？っていう（笑）。

貞本　そう、そこは不思議なんですよ。

――まあ、今、改めて観ると、これは一種の宣言だったんだな、と。

鶴巻　もちろん、僕がひとりでそう思っていたとしても、一緒にやってくれるスタッフにはは抵抗感があるだろうな、とは思ってて。それで助けられたというのはありますね。ただ、そこらへんの感覚を、平松さんとはなんとなく共有できてた。

──デフォルメ表現をどこまで許容できるのか、っていう。

鶴巻　例えば、ほかの仕事で一緒になったアニメーターの中には、そこがわからない人って、結構いるわけで。マジメに、一種のリアリティだったり、アニメーションらしさっていうものを追究しているわけで、そういう人から見ると、ここまでドタバタなのはダメでしょう、と。『フリクリ』の話じゃないんですけど、こっちが演出家で、向こうがアニメーターだったりする場合には、そこで苦労することはありますね。

──……といいながら、さっきから貞本さんが苦い顔をしてるんですけども（笑）。貞本さんはこのギャグの方向は、もしかして苦手なんじゃないですか？

貞本　うん、今だからぶっちゃけるけど（笑）。

鶴巻　あははは！（笑）

貞本　というか、しっとり目の方向で1本、ちゃんとしたヤツを観たいなって思っちゃう。ギャグは入れなくてもいいいんじゃない？っていう。

──ちょっとさっきの話に戻るんですけど、『ロボット8ちゃん』的なテイストをやりたいって持ちかけたのは、貞本さんなんですよね？

貞本　うん、というかこの企画──まだ『フリクリ』って名前になる前の段階なんですけど、鶴巻が監督で次をやろう、という話になったときに、やっぱりあの『エヴァ』の後じゃない？　もっと気楽なヤツにしたかったんだよね。人が死なないような（笑）。だからギャグっぽいという意味では、ギャグっぽいんだけど……。

──ただ、ここまでドタバタしたものをイメージしてなかった。



#1　11:02



11:07



12:08



12:26

貞本　中ナシのパカパカした動きがギャグっぽいかっていうと、そこはちょっと違うんですよ。リアルなんだけどギャグっぽい――例えば古谷実さんとか、望月峯太郎さんの登場人物って、僕の中ではすごくリアルなタイミングで動いてて（笑）。

鶴巻　このあたりは、今石くんのセンスを使いたかったんですね。アニメーターとしての僕自身も、ここまで作画でギャグに突き抜けるほうじゃないし。実際、作画的な好みでいえば、平松さん的な「しっとり＋ラブコメ」っていうほうが好きですしね。ただ、今石くんっていう武器を使おう、より強力な武器として使おうとすると、こういうふうになっていったというのはあります。

貞本　良い悪いというよりは趣味の問題なんですけど、「ちょっとそこがなあ」というのは思いましたね。

鶴巻　『エヴァ』の後で、ガイナックスの作画スタッフは大きく陣容が替わってしまって、リアルな動きをそつなくこなせる感じではなくなってしまったということもあります。

貞本　とはいえ第1話は、絶妙なバランスになってるな、と思うんですけどね。

貞本　このあたりの松尾（スズキ）さん【※17】とか、もう最高ですよね。どんどんノッってくる感じが（笑）。

――「クリクリトリス」とか（笑）。

鶴巻　こういう表現は『彼氏彼女の事情（以下、カレカノ）』【※18】のときもやってるんです。『カレカノ』のときに、コミックスの絵柄がアニメーションになると変わってしまう、というのにすごく抵抗感があったんですよ。これはキャラが似ているとか似ていないとかいう話ではなくて、例えば、学生服を描くときに、コミックスだと輪郭線と中の黒ベタは同じ黒インクで塗られる。でも、アニメーションの場合だと、主線の黒と、生地の黒は別の色になってしまう。実際はグレーで塗られちゃうわけです。そうすると結局、アニメーションの絵は、コミックスとは別のグラフィックになっちゃうじゃないかってことなんです。美術にしても、背景はほわっとした白でいいのに、何か必要のない窓枠だったりとか、壁のディテールとか木の枝とかを描いてしまうわけで、それはマンガ的な感覚でいえば不必要な情報なんです。何も描かれていない空間でいいはずなのに、理屈上あるはずの何かが描かれてしまう。

――アニメ的な文法を優先するがゆえに、コミックスの再現にはならないわけですね。

鶴巻　『カレカノ』のときに、そこをなんとかしたいなと思って、いろいろ試行錯誤してたんですけど、『フリクリ』はそこをもっと直接的に突破しようというか。実際にコミックのグラフィックを描いてしまって（笑）、そのことでコミックの魅力をそのままアニメーションにできないのかな、と。それは例えば、僕がGペンのタッチだったりスクリーントーン――そういうグラフィックが好きだっていうのがある。アニメのセル、アニメ的な絵の具で塗られてしまった瞬間に、それは失われちゃうんだよなあ、と。だったら、今石くんに直接Gペンで描いてもらって、スクリーントーンっぽい処理を施して……ってい

【＊17】62年、福岡県生まれ。俳優・演出家・コラムニスト。大学卒業後、サラリーマン生活を経て、自らの劇団「大人計画」を旗揚げ。ギャグを散りばめながら、人間の暗部をえぐる独特の作風で注目を集める。『フリクリ』ではナオ太のエキセントリックな父・カモンを怪演。キャラクターデザインも、松尾本人をモチーフにしたデザインになっている。

【＊18】98年から99年まで放映されたテレビアニメ（制作はJ.C.STAFFとガイナックスの連名）。原作は、津田雅美による同名のコミック。『新世紀エヴァンゲリオン』のヒット後、初めてとなる庵野秀明監督作品として注目を集める。鶴巻は、各話の絵コンテ・演出として数話に参加。

う。

――これは要するに、今石さんの全原画ということなんですか？　考え方としては。

鶴巻　そうですね。動画は入ってません。今石くんが全部描いてる。だから結局、部分的にしかできないんですけど。

――フレームの中央に来てる絵はもちろんですけど、端のコマも全部動いてますよね？これも描いてるってことですか？

鶴巻　えっと、なんていうのかな。実際には、コマごとに――ひとつのカットとして描いて、それを合成してるんですよ。

貞本　デジタル上で合成してる。

鶴巻　そうです。で、それを撮影で、カメラを移動（パン）して映してるって考え方ですね。普通だったらカットを切り替えて次のカットに移動するんですけど、ひとつ前のカットが、画面の端に残ってる。だから数カット分の情報量が、ひとつのカットの中に置かれてる。当時の撮影技術としては「大変です」っていわれたところなんですけど（笑）。

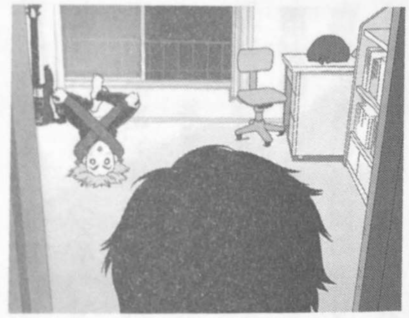
――第6話でも「もう二度とやらないでほしい」って怒られてますよね（笑）。

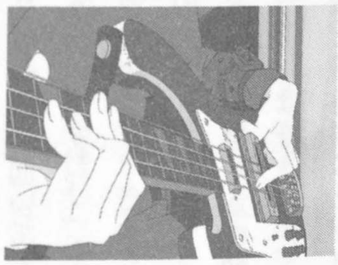
鶴巻　「もうできないです」みたいなことをいわれて（笑）。あのへんは『タイムボカン』【※19】でもあったじゃないですか。

――「全国の女子高生～」って（笑）。

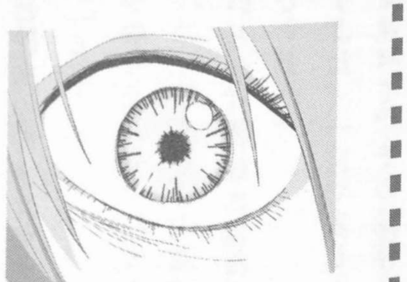
鶴巻　ああいうのが好きだったたから（笑）。

【＊19】75年から放映開始されたテレビアニメだが、ここでは、この第1作から始まる『タイムボカン』シリーズのことを指す（制作はタツノコプロ）。スラップスティックな語り口やコミカルなロボット、女ボスと2人の部下（通称「三悪」）といったフォーマットがシリーズを通じて引き継がれた。


#1-C191　13:48


C194　13:55


C196　14:02


C211　14:34

鶴巻　これはちょっと聞きたかったんですけども、目の処理の仕方は、貞本さん的にはどうだったんですか？

貞本　あの、ガシャガシャっとした。

鶴巻　当時、後藤圭二さん【※20】がキャラクターデザインをやられた『機動戦艦ナデシコ』【※21】みたいな、クリッとした目があったでしょう。あのへんの感覚からすると、目の内部をどうキレイに整理して描くかっていうのが課題だった気がするんだけど、『フリクリ』はそこはもうちょっと大雑把に、ザクザクっと描いてる。

貞本　それは当時、個人的に、安野モヨコさん【※22】の絵をフィーチャーしようというのがあったんですよ。

——ああ、コミック的な表現ってことですよね。

貞本　そうですね。線でガシャガシャっと描く。むしろ個人的には、こういうほうが好きですね。

——そういえば貞本さんは、キャラクターの服飾設定なんかもやられてるんですか？

【＊20】68年、東京都生まれ。アニメーター・演出家。80年代末からアニメーターとして活躍し、『爆れつハンター』（95年）で初めて、キャラクターデザインを担当。対談中でも触れられているように、透明感のあるクリッとした瞳のデザインが特徴的。また『キディ・グレイド』（02年）『うた∽かた』（04年）といった作品では監督を務めている。

【＊21】96年から放映開始された、佐藤竜雄監督によるテレビアニメ（制作はXEBEC）。アニメの〝お約束〟をパロディにして、ふんだんに盛り込みつつ、ラブコメディとSFドラマを両立させようと試みたヒット作。98年には直接の続編にあたる劇場用アニメ『機動戦艦ナデシコ -The prince of darkness-』が公開された。対談中でも触れられている通り、後藤圭二がキャラクターデザインを担当。

貞本　いや、わりと作画監督さんがやられてると思います。イメージボードに「こういう感じ」っていうのは描いてるんですけど。

鶴巻　でも、ここは貞本さんじゃないですか？

貞本　うーん、この場面の父ちゃんの服とかは僕ですけど、ここのナオ太の服は、たしか平松さんですね。この、胸のところに「90°」ってマークが入ってるじゃないですか。この意味がよくわかんなくて、平松さんに「これなんですか？」って聞いたら、「いや、ナオ太の、直角の直です」って（笑）。

――えっ、そうだったんですか！（笑）

貞本　で、ああなるほどって（笑）。

――とかいってるうちに、橋の上のマミ美の場面に来てるわけですけども……。

貞本　高校生がタバコ吸ってるのは、大丈夫なんですかね。

鶴巻　まあ、テレビ放送はできないですね（笑）。

――マミ美に関しては、貞本さんはすぐ理解できた感じだったんでしょうか？

貞本　マミ美については、わりと鶴巻にしつこく聞いてたし、エピソードについても――第1話に入る前から、第2話の話を聞いてたのかな。だから、わりと彼女のキャラクターについては、つかめてたと思いますね。「不思議ちゃんにしてほしい」と。

――ああ、不思議ちゃんってオーダーだったんですね。

貞本　そうですね。会話の感じとか。

――ナオ太に兄のことをどれくらい好きか聞かれて「黒板消しの匂いとか、朝起きてたら雨が降ってた日曜日とか」よりは好きだって答える。こういう感じですよね。

鶴巻　あの場面のセリフは、貞本さんのアイディアが入ってるんですよね。一言で表しきれない感情や人格を表現するときに、いろいろなモノや事柄を並列で並べて、その総体と

【＊22】71年、東京都生まれ。マンガ家。高校在学中の89年、『別冊少女フレンドDXジュリエット』からデビュー。その後連載した『ハッピー・マニア』（95年）がヒットとなり、一躍注目のマンガ家のひとりとなる。02年には、映画監督の庵野秀明と結婚。

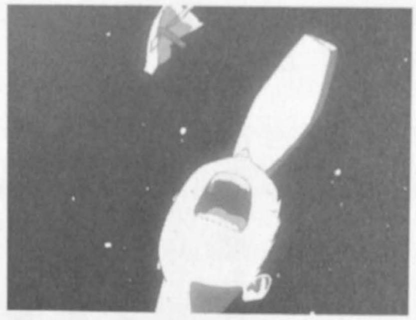


してなんとなくイメージさせるんだけど。今だとブログの自己紹介欄には、そういう感じがありますよね。

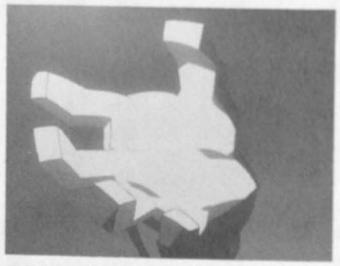
——猫とカレー、とかね。食うのかよ！っていう（笑）。

貞本　で、ナオ太が「何いってんの、この子は」と思ったところで、「それよりは好き」ってセリフが来て、ああ、間の文節が抜けてるんだ、と（笑）。実は、『フリクリ』の直前に描いたマンガで、女の子のセリフがちょうど似たような感じで。そのテクニックが上手くいったんで、そういう感じにしてほしいなって（笑）。

鶴巻　『トレインスポッティング』や『青の炎』のラストシーンでも使われていましたね。



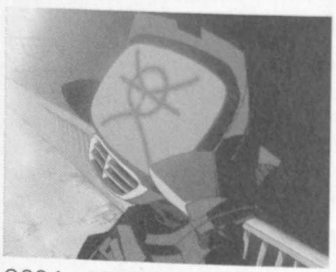
#1-C286　18:43



C291　18:57



C291　19:02



C294　19:11

——ここからは、怒涛のアクションシーンですね。

貞本　ここはうまいですね、さすがに。

鶴巻　これをやったのは吉成（曜）くん【※23】ですね。

貞本　吉成の仕事の中では、いまだにこれが一番好きかもしれない（笑）。

【＊23】71年、東京都生まれ。アニメーター。『暴走戦国史スペクター誕生』（91年）で初めて原画を担当して以降、数多くの作品に参加。『新世紀エヴァンゲリオン』では、全26話中10本に原画として参加し、新世代メカアニメーターとして注目を集めた。『天元突破グレンラガン』ではメカデザインを担当している。現在ガイナックス所属。

鶴巻　彼は、ものすごく能力があるんで、当然のようにできちゃうんですけど、ここは結構難しいことを要求してるシーンなんです。例えば『グレンラガン』を観ると、たしかにスゴい。スゴいんだけど、ロボットがカッコよくアクションするっていうのは、まあ、他のアニメでも観たことがある。で、それをよりうまく、よりカッコよくやるって方向になっちゃうと思うんですけど、このシーンでやってるのは、頭からロボットが出くる（笑）。「これは観たことないわ！」っていうね。

――しかも2体出てきますからね（笑）。

鶴巻　誰もやったことがないものを、やってみる。まあ、振られたほうは困るんだろうけど（笑）。

――例えば作画打ち合わせのときに、これはどういうことなのかって説明はしてるんですか？

鶴巻　全然してないですね。劇中で何が起こるのか、現象としては説明しますけど。ナオ太の頭のところが、ワープゲートみたくなってて、そこから巨大宇宙船がゴゴーッと出てくるかのごとく、ロボットが出てくるんです、と。一応説明はするんですけど、まあ、そこまでですよね。

――ナオ太の頭がメディカルメカニカの中と繋がってて……とか、そういう部分は……。

鶴巻　アニメーターには、そういうことにはあまり関係ない。というか、そこを説明されようが説明されまいが、わりとどうでもよくて、結局、絵で描けるか描けないか、どう絵で描くか、という問題だから、むしろ科学的な設定とか、解釈とかはそれほど必要としてませんよね。アニメーター個人の中でどう納得できるか、だけの話だから。

貞本　ここは、もし俺が振られたら、すっごい悩むなと思ってたところなんだよね。ナオ太の頭に生えてる角って、結局、指なわけですけど、これが外に出てくるんだ、と。しか

もほかの指も一緒に出てくる。うわあ、俺だったら、どうやって指を出すかですっごい悩んじゃうなあ、と。で、実際、吉成がやったのを観たら、ああやって生やすんだ、っていう（笑）。

鶴巻　この後に、橋の欄干の上で対峙してるカットがあるんですけど、ああいう絵が好きですね。なんで好きなんだろうって思ったら、『ロボット刑事K』【※24】か何かで、高架の上の電車のところで、Kと敵のロボットが戦ってて、それに高架下の街の人が気付いてないってシーンがあるんですよ。『ルパン三世』の最終話でも似たようなシチュエーションがあるんですけど、群衆がそれに気付いて、混乱が起きる。それが面白い方向。そうじゃなくて、『ロボット刑事K』のときは、すごい戦いが頭上で行われてるんだけど、ほかの人は誰も気付いてない――そこがすごくよくて。下に通ってる道路では、普通に人とか車が行き交ってる。そういう日常があるんだけど、一方、欄干の上は非日常の世界になってる、っていう。そういう感じがうまく出せたかな、と思いますね。

――このあたりは、コンテも吉成さんがやってるんですか？

鶴巻　そうですね、コンテを描いてもらったところですね。

貞本　あれは、全然つまんで（編集して）ないの？

鶴巻　いや、もちろんつまんでますし、コンテの段階でもいくつか指示を出してます。

貞本　でも、コマ単位で繋いだみたいな綺麗な感じだよね。

鶴巻　ああ、まあ上手いアニメーターは大抵そうですけど、原画を描きすぎちゃうタイプが多いので、カット単位で観れば壮絶にカッコいいんだけど、編集でうまく繋がないと、ちょっとくどいアクションになることがありますね。……ここのコードを引っ張ったりとか、手がガチャガチャって指で逃げそうとするあたりは、吉成くんのアイディアだと思います。



【＊24】正式なタイトルは『ロボット刑事』。73年に放映された特撮番組（原作は石ノ森章太郎）。警察に所属する犯罪捜査用ロボット「K」と犯罪組織の戦いを描く。

貞本　あの、光の中から黒塗りの奴が出てきて、途中でフッと色がつくところとか、すごいキレイだなって思っちゃうよね。

鶴巻　ああいうのは、吉成くんがやってみたかったんだろうなって思いますね。実はあれもアメコミなんかでは、よくある表現ですけどね。逆光の中だと、黒一色で塗られてたのが、次のコマでは普通の色になってる、みたいな。アニメーションの場合だと大抵、逆光の中にいるときから普通の色で塗られてしまって、そういう意味では、コミックの表現に達してないよなあ、と思っちゃう。だから、ああいうことができると、遠くにいるときは真っ黒のシルエットだけなんだけど、カメラの手前にくると、ちゃんとディテールが見える、みたいなことが表現できるなっていう。

貞本　デジタルになったことで簡単に……というとおかしいけど、そういうことがやりやすくなった、ということですかね。

――それにしても、これがどういうことなのか、1回観ただけでは理解できないですよね（笑）。

鶴巻　まったく理解できないです（笑）。

貞本　しかも、ラストも投げっぱなしだからね。これで第2話に行っちゃっていいのかな？（笑）

鶴巻　おそらく第1話のときは、作ってるこちら側もどういう話なのか、シンプルに説明できなかった感じが残ってるんだろうな、と思うんですよ。例えば、企画を説明するときに「これはロボットアニメです」というと、みんなが納得するイメージがありますよね。同様に「青春アニメです」といわれたら「ああ、そうか」ってわかる部分がある。じゃあ『フリクリ』は何アニメなのかと聞かれると……。

――「何アニメ」とはいえない、という。

鶴巻　そのすべてが入ってるってことなんだけど、その分かえって曖昧になってたというか。だから、企画書を見て、具体的にこういうアニメなんだってわかってた人は、たぶん僕しかいなかった（笑）。その僕でさえ、それを言葉で伝えようとすることは本当に難しかった。たぶんその感覚がまだ残っていて、フォーマット上は例えばボーイ・ミーツ・ガールがあって、主人公の葛藤があって、ロボットの戦闘があって――アニメによくある仕掛けを使いながら、そのどれにもなっていない。その状態のまま終わるわけで、今、改めて第1話を観ると「なんなんだろう、これ」って思っちゃう。

貞本　あははは（笑）。

――それ、監督が言いますか！（笑）

鶴巻　まあ、第2話からはそのあたりがもう少ししっかりしてくるんだけど、第1話のときはホントに、これが一体、どういうアニメなのかわからないというか、あらゆるアニメを全部入れてしまおう、と。そういう感覚が強く残ってる。もちろん当時の僕は、わかんないままでいいとは思ってたわけじゃないですよ。煙に巻いてやれ、とか思ってたわけでは全然ない。

貞本　ただまあ、ハル子がお兄ちゃんの彼女の写真を見ようとするところとか、説明不足だなと思うけどね（笑）。

――人はそれほど集中して、映像を観てるわけじゃないですし（笑）。

貞本　しかもそれが、次のマミ美のシーンに繋がってるじゃない。で、兄のことは聞きたくない、みたいな。

――マミ美がナオ太の兄のことが好きなんだっていうのは、あそこでしか触れられてないですよね？

鶴巻　あとは冒頭のシーンですね。とはいえ、冒頭のシーンでもはっきり描いてるわけじ



ゃないから、たしかにそうかも……くらいの感じで（笑）。

――加えて、なぜこのロボットたちが戦っていて、最後にハル子がギターで殴って解決するのかが、まるで理解できない（笑）。

鶴巻 戦いが終わった、というだけでしかないよね。

――いや、別に非難してるわけではないんですけど（笑）、あえて整理をすると、これはハル子がアトムスクを、メディカルメカニカから救い出そうとしてたってことなんですよね？

鶴巻 そうですね。メディカルメカニカに捕まっていたアトムスクを、ナオ太の頭を通路にして救い出そう、と。救い出すというか、取り戻そうとしてたってことです。でも、アトムスクは、ハル子の知ってるアトムスクではなくて、カンチというロボットの中に閉じ込められた状態で出てきてしまった。だから最初、ハル子は、カンチがアトムスクだってことに気付いてないんですよ。

貞本 これを作ってた当時さ、よく『フリクリ』が好きな人から「これは理屈のない面白さですよね！」っていわれたんですけど、俺から見たら、理屈だらけだよ、っていうね（笑）。少なくとも、監督は理屈で作ってるよ！って。

――『フリクリ』っていうと、ただ気持ちのいい絵が魅力の作品、みたいに思われてる節があるんですけど（笑）、いや、そんなことはないだろう、と思うんですよね。すごく考えて作られてるんだけど、ちゃんと言い切れてないだけなんじゃないだろうか、と。

貞本 言い切れてないか、わざと煙にまいてるのか。でも、鶴巻からすると、そういう煙にまいた感もほしいわけだよね（笑）。

鶴巻 うーん、というか見えてるところに全部が描かれていて、それがすべて理解できると面白いアニメ、という風にはしたくなかったんです。それよりも、ギャグやアクション

が面白いという人がいてもいいし、ピロウズ【※25】の音楽と戦闘シーンがぴったりあってカッコいい、という人もそれで全然いい。要するに、ピロウズのプロモーションビデオだよね、っていわれても、それで楽しんでもらえるんなら、それでいいですよ、と。でも、その表層に観ているアニメの1枚下には、もうちょっと複雑なSF設定がほのめかされてたり、さらにその下には、現代的なテーマみたいなものがあったりもします。そこまで突っ込んで楽しめるんなら、それでも全然、構わないですよっていう。

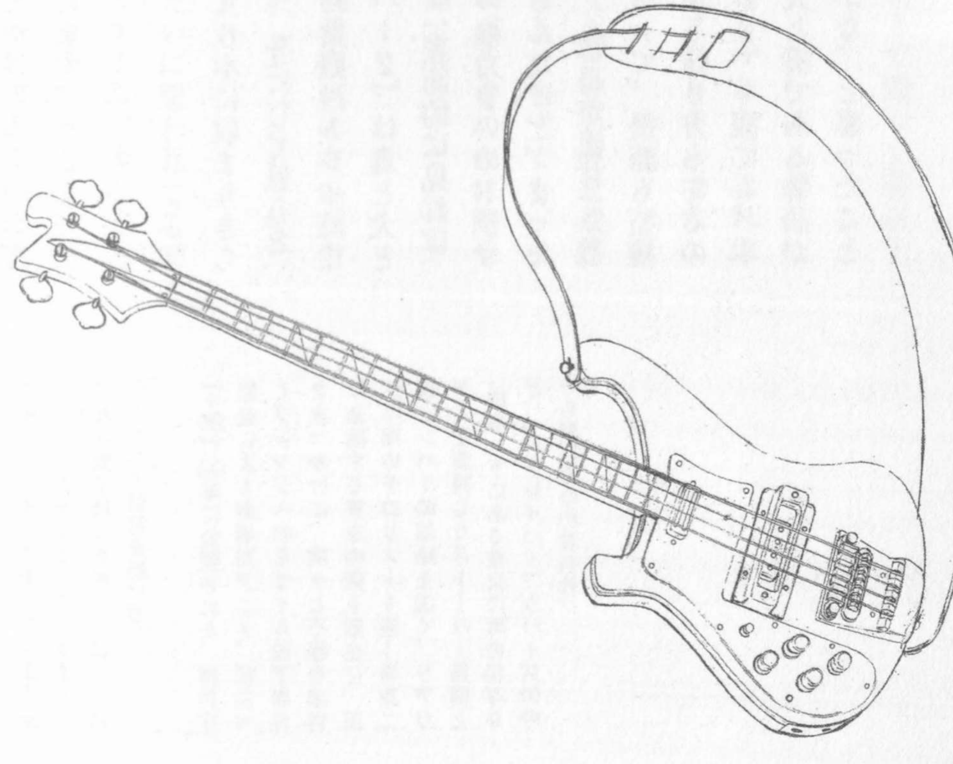
——何層も重なってる構造になってるわけですね。

鶴巻　表面に全部乗せようとすると、僕のやりたいことは、到底OVA6本に収まりきらない（笑）。だから、いくつかの階層として作ったというのはありますね。今にして思うと、それが押井さんの本心だったのかどうかわからないんですけど、『機動警察パトレイバー2 the Movie』【※26】のインタビューか何かで、「『パトレイバー2』は鳥と犬と橋の物語です」って話してて。要するに『パトレイバー2』というのは、表面的に見れば、例えば南雲と柘植と後藤の三角関係の物語でもあるだろうし、警察内の権力争いのドラマもある。クーデターをめぐる思想とか、そういう部分にも面白さはあるんだけど、まったく別の階層で、鳥と犬と橋——登場人物はこの3つだけで通用するような物語が流れてる。少なくとも、押井さんはそう思って作ってるのかな、と思ったことがあって。後藤も柘植も南雲も野明も篠原も、誰もいなくても通用する映画というか。そういう作り方もあるのかって、当時思ったことがあったんですよね。もちろん『パトレイバー2』を観ても、本当にそうなってるのかどうかはわからないですけど、登場人物が鳥と犬と橋である物語がひょっとしたらあるのかもしれない、って。そういうことが描けるのかな、と思ったことはありましたね。

貞本　それは買いかぶりかもね（笑）。

【※25】正しくは「the pillows」。89年、上田ケンジ、山中さわお、真鍋吉明、佐藤シンイチロウによって結成。91年にシングル『雨にうたえば』でメジャーデビュー。以降、リーダーであった上田の脱退などを挟みつつ、オルタナティブな感覚を持ったギターロックバンドとして活動を続ける。

【※26】93年に公開された、押井守監督による劇場用アニメ。横浜ベイブリッジへのミサイル投下事件をきっかけに、次々と不穏な事件が連続する東京の街を舞台に、正体不明のテロリストを追う特車二課メンバーの活躍を描く。リアリズムを重視したストーリー展開と"戦争"下にある東京の町の描写など、『パトレイバー』シリーズの中でも異色作中の異色作。


140

#2 ファイスタ



STORY お手伝いさんとして、ナンダバ家に押しかけてきたハル子。さらには、ナオ太の頭から出現したロボット、カンチも居候として一緒に住み込むことになる。環境の変化に、イライラを募らせるナオ太だったが、一方その頃、疎瀬市では放火事件が頻発。焼け落ちた学校の跡地でナオ太はサメジマ・マミ美を見つける。そのとき再び、ナオ太の頭に生えた2本の角が巨大化して……。

――第2話の「ファイスタ」は、一転して青春ものっぽい雰囲気が前に出てきますよね。

貞本　ちゃんとヒロインを描いていく、っていう。とはいえ、なかなかヒロインにならないんだけれども（笑）。

――このエピソードは、マミ美がメインフィーチャーされてますよね。

鶴巻　『フリクリ』はハル子、マミ美、ニナモリの3人がそれぞれヒロインなんですけど、それを順番に1本ずつ描いていくっていう構成で。この第2話は、そのマミ美回です。

――先ほど、マミ美のキャラクターについてはちらっとおうかがいしたんですけども、彼女はナオ太にとってどういう存在なんですかね。

貞本　まあ、兄貴の彼女なんで、よく考えたらすごいエッチな感じがする（笑）。

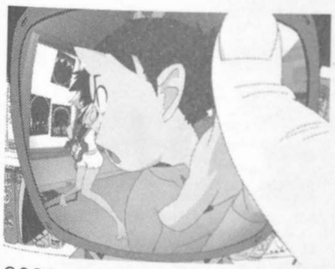
鶴巻　あははは（笑）。ナオ太から見れば年上の女の人なわけで、当然、性的な魅力はあるわけだけれども、精神的には自分よりも劣ってるように見えちゃう。そういう感覚はエッチですよね。



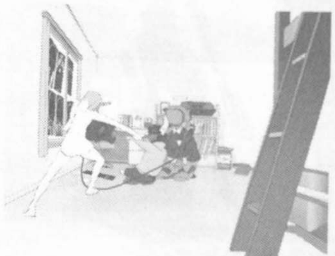
#2-C017　00:59



C023　01:30



C029　02:08



C032　02:24

貞本　このあたりの原画は誰なんですか？

鶴巻　これは芳垣祐介くん【※1】ですね。彼は巧いです。

貞本　前に観たときも「いいなあ」と思ってたけど、やっぱり巧いよね。（ナオ太がカンチのモニターを指差すシーンを見ながら）この、魚眼レンズっぽい感じは、あらかじめコンテで指示してるの？

鶴巻　うーん、コンテで指示してるわけじゃないかもしれないですね。ただ、カンチのモニターがこう、丸くなってるんで「ちょっと歪んで描いてください」って言って。たしか、魚眼っぽくなってる鏡を買ってきて、それを見ながら描いてたんじゃないかな。

貞本　この魚眼の感じとかはうまい。いいよねえ。



#2-C038　02:53


C039　02:55



C040　02:58



C043　03:14

貞本　ここのギャグがすごい好きなの。「少女A！」とか（笑）。

鶴巻　これは誰だったかなあ。榎戸さんかな。

貞本　これ笑ったなあ。「ロボット刑事、K！」ってやつ（笑）。

【＊1】73年、神奈川県生まれ。アニメーター。『彼氏彼女の事情』を筆頭に、ガイナックス作品を中心に活動。今石洋之の同期でもあり、しばらくアニメを離れていた時期を経て『天元突破グレンラガン』の第20話で復帰。ほぼひとりで原画をこなした（劇場版『グレンラガン』にも参加）。

──ああ、ここでさっき話してた『ロボット刑事K』につながる（笑）。

鶴巻　ちょうどこの頃って、『エヴァ』みたいな作品がクソマジメに語られてる時期だったからね。クソマジメに語ると、かえってバカみたいになっちゃうよっていうところもあるんだけど（笑）。でも、マミ美は結構、面白く描けてるかなと思いますね。今、見ても。

──何考えてるかはわかんないんだけど……。

鶴巻　わかっちゃうとダメかなあ、っていうのは……わかんないからこそ面白いというか……。なんていうのかな、わかった気になってるとやられるぞ！っていうことかな。第5話はまさしくそういう話で、ナオ太がマミ美のことを「わかった」と思っちゃった瞬間にやられちゃうっていう話なんだけれど。

──（カンチにカメラを向けるマミ美を見ながら）あ、そうか、マミ美ってカメラ少女なんですよね。

貞本　ラストシーンは、もうこの時点で考えてたの？

鶴巻　いや、なかったですね。

貞本　えーっ。前振りなのかと思ってたよ。えらい前から前振りするなあって（笑）。

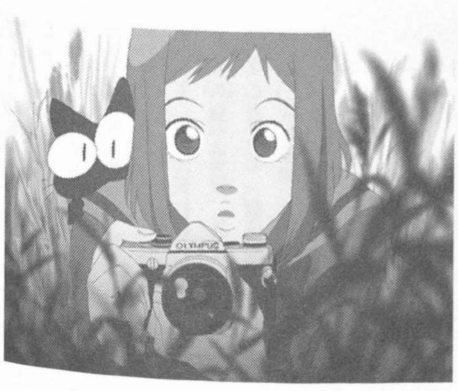
鶴巻　第1話のときから、パシャパシャ撮ってはいますけどね。

貞本　ここの美術は素晴らしいなあと思ってるんですよ、個人的にも。

鶴巻　おそらくマミ美が放火したであろう学校の跡地ですね。

──このシーンを筆頭に『フリクリ』って、全編に渡ってピロウズの歌がフィーチャーされてますよね。これはどういう意図があってのことなんでしょうか？

鶴巻　うん、これは何度もいってることなんですけど、『フリクリ』を始めるにあたって音響まわりに関しては、まったく自信がなかったんです。例えば、アフレコでセリフの指示をするくらいまでは、イメージができていたんです。原画を描いてるときにも、「こう



いう喋り方をしてほしい」というイメージがわかって描いてるわけです。あと、効果音についても、なんとなく原画を描きながら「ここは『ガイン』って音がいいな」とか。そこまではアニメーターをやりながらでも、理解できる範囲だったんですけど、音楽に関してはまったくイメージできたことがなかったんですよ。自分が原画を描いてるこのシーンで、どういう音楽がかかってるのか、まったくイメージできたことがなかった。だから、そこは本当に自信がなかったんですね。

――なるほど、なるほど。

鶴巻　僕の中では、カッコいい音楽とアニメーションの組み合わせって、DAICON【※2】だったりするので。映像があるときに、どういう音楽をかければいいかもわからないし、もっといえば、作曲家の人に「こういう音楽作ってください」って発注するやり方がよくわからなかったんです。庵野さんが劇伴発注メニュー表みたいなものを書いてたのは見たことがあるんだけど、どういうふうな割り振りになってるのか、というか、悲しいときにかけるための曲をどういうふうに発注すればいいのかとか、まったくわからなくて。でも例えばドラマを見てると、普通に盛り上がるところで主題歌がかかったりするわけじゃないですか。それこそ『東京ラブストーリー』【※3】とか、いざとなると小田和正の主題歌がかかる（笑）。そういうことならわかるなって、そういう感じに持っていきたかったのはありますね。で、ピロウズであれば、すでに発表されてる曲がいっぱいあって、その中からシーンに合った曲を選ぶことができる。だからもし万が一、ピロウズさんから「これまでの曲を一切使わずに、すべて新たに発注してください」っていわれたら、相当困ったんだろうな、って思います。

貞本　でも、新曲を使ってるところもあるよね。2〜3曲かな。

鶴巻　うん、でもあれも発注はしてないんです。ピロウズの新しいアルバムが出るので、

【＊2】正式名称は「DAICON FILM」。81年に大阪で開催された日本SF大会に向けて、岡田斗司夫や武田康廣らによって結成された自主制作集団で、のちのガイナックスの母体となった。ここで鶴巻が話しているのは、83年の日本SF大会で上映された、DAICON FILM制作のアニメーション「DAICONⅣオープニングアニメ」のこと。貞本は、この作品にアニメーターとして参加している。

【＊3】91年に放映されたテレビドラマのこと。原作は、紫門ふみによる同名コミック。最高視聴率は32.3%にものぼり（最終話）、主題歌となった小田和正の『ラブ・ストーリーは突然に』は、270万枚という大ヒットになった。

そこから自由に使ってもらっていいですよ、っていう。

貞本 ああ、別に発注したわけじゃないんだ。それはエンディングの『Ride on Shooting Star』も？

鶴巻 いや、エンディングについては最初、『One Life』っぽい曲で、ってお願いしてたんですよ。でもまあ彼らも、そんなに真に受けてくれる人たちじゃないので（笑）、全然違う曲が上がってきて。たしか2曲上がってきたんだけど、たしか1曲は『One Life』とは違うけどちょっとしっとりした曲で。そのときに貞本さんが「『Ride on Shooting Star』のほうが全然いい」と。それで決まったんです。

貞本 まあエンディングだから、パッと耳につくほうがいいだろう、って。やっぱり最初の、ギターのジャガジャーンっていうフレーズだよね。あそこを聴いてもらう、これがエンディングでいいや、っていう（笑）。

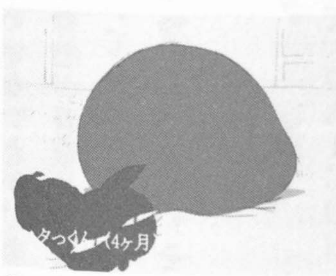
鶴巻 『One Life』は劇中で使えればいいか、って。


#2-C140　08:41



C143　08:48


C144　08:49



C150　09:13

貞本（コンビニで立ち読みしているカンチの場面で）デラべっぴん【※4】（笑）。ここは誰がやってるんだっけ？

鶴巻　ここは大平（晋也）さん【※5】ですね。

貞本　ああ、そうだ。ここは説明しとかないと、普通の人から見たら、何が起こったかわかんないよね。

鶴巻　まあ、大平さんというアニメーターがいてですね……（笑）。

――説明になってないです（笑）。大平さんというのは、非常にユニークな作画で知られるアニメーターですね。

貞本　第2話は、今石が作画監督をやった回なんだけど、彼らのような若い世代から見ると、大平さんというのは、スーパーアニメーターなわけですよ。ものすごくうまい。なので、畏れおおくて修正できなかった、という（笑）。

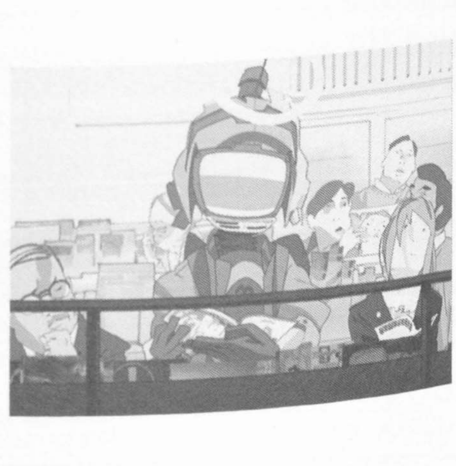
鶴巻　あははは（笑）。

貞本「このまま通します！」っていってて、当時は「ホントかよ」って思ったけど（笑）。

鶴巻　いや、詳しく解説すると（笑）、「通します」っていったわけじゃなくて、ずっと（原画）修正しないまま、棚に残ってたんですよ。で、どんどんスケジュールが迫ってきて、これは全部修正しきれないなっていう状態になりつつあった。しかも、このシーンに修正を入れようと思ったら、おそらく全修正か描き直しになっちゃうし、今石くんは今石くんで「直したくないなあ」という雰囲気を出してて（笑）。ただまあ、キャラが似てないのは似てないわけで、テロップを入れる。方言を喋ってる人の下にテロップが出てるような感じで、似てないことをネタにできるんなら、いいだろうって（笑）。

――あはははは（笑）。

貞本　じゃあ、テロップを入れるってことは大平くんの了承を得てないの？



【＊4】85年、英知出版（現・メディアックス）より創刊されたアダルト雑誌。クオリティの高いヌードグラビアなどで人気を誇った。96年には『新世紀エヴァンゲリオン』を特集したことでも知られる。

【＊5】66年、愛知県生まれ。アニメーター・演出家。高校卒業後、スタジオぴえろに入社。『BUBBLEGUM CRISIS』といった作品でメカアニメーターとして注目を集める一方、大胆に線を省略して、リアルな動きに重点を置いたユニークなアニメートで、独特の作風を確立。対談中で触れられている『フリクリ』の縁側のシーンは、その際たるものだろう。

鶴巻 ないです（笑）。

貞本 ひどいなあ、これギャグにしてんじゃん（笑）。

鶴巻 まあでも、大平さん自身も、似てないことをわかって描いてると思うんですよ。頑張ったけど似なかった、というのとは違いますよね。向こうも似せる気がなくて描いてるわけだから、お互いさまだろうって（笑）。それで、ギャグにさせていただきます、って感じではあったかな。

──大平さんにお願いしようというのは、どなたから？

鶴巻 プロダクションI.Gの社長（当時）だった石川（光久）さんですね。当時、大平さんはたしか、I.Gと契約をしてて、石川さんから「大平さんに『フリクリ』を頼んでもいいかな？」と。ただ最初は、第2話の後半にある、戦闘シーンをお願いしようと思ってたんですよ。あ、いや、戦闘シーンじゃなくて、カンチが空から降りてくるところだ。メカアクションというわけでもないんですけど、キャラのシーンではなくてエフェクト作画をやってほしいなと思って振ってみたんですけど、大平さんのほうから「こっちがやりたい」と（笑）。

──ああ、大平さんの希望だったんですね。

鶴巻 うん、猫のカットがあって、あのシーンなら好き勝手できるだろう、って判断したんだと思うんだけれども。

──たしかに猫の演技は可愛いですよね。

鶴巻 可愛いよね（笑）。

貞本 大平さんには『THE八犬伝〔新章〕』【※6】っていう作品があってですね（笑）。もう、まるでキャラは似てないんだけど、アニメーターからは「カッコいい！」って賞賛を集めた回を担当してて。まあ、キャラを振るとこうなるよねっていう（笑）。それはわ

【＊6】93年から95年にかけて発売された、岡本有樹郎監督によるOVA作品（全7話）。中でも第3話と第4話は、有名アニメーターが集結し、作画アニメとして人気が高い。大平晋也は第4話の演出を担当。湯浅政明が作画監督を務め、圧倒的なアニメートを展開している。

かっていたんだけど、まさかこのまま作監を通すとは思わなかったな。

――ああ、貞本さんは作監を入れると思ってたんですね（笑）。

貞本　ええ（笑）。

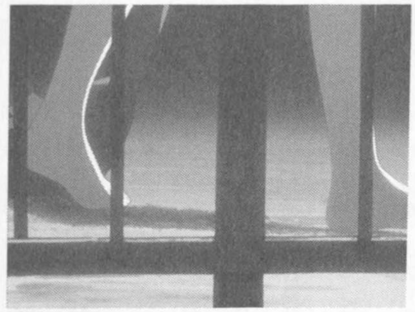
鶴巻　やっぱり『フリクリ』って作品自体――例えば、第1話と第2話で平松さんと今石くんっていう、まったく方向性の違うアニメーターを作画監督として起用してるわけですよ。だから、そういうところは許容しようと思っていたし、だいたい僕自身、『うる星やつら』みたいな作品が好きだったわけだから。それこそ、アニメーターが変わった途端に絵が変わる――絵柄はもちろん、タイミングからフォルムの取り方まで変わってしまう部分も含めて大好きだったわけで。とはいえ僕もさすがに、大平さんのシーンには、本来であれば作監修正を入れてほしかったんですけどね。でも、任せている作画監督が「直したくない」というのであれば、それはもう仕方ない（笑）。

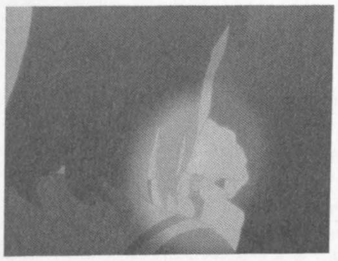
貞本　でも、大平さんは第4話もやってくれてるよね。

鶴巻　この後ずっとやっていただいてますね。第4話もそうだし、あとは第3話でもやってもらってて。

貞本　じゃあ、怒らなかったってことなのかな（笑）。

鶴巻　そうだといいんですけど（笑）。


#2-C211　12:01


C219　12:23


C226　12:31


C227　12:34

——このあたりからマミ美のキャラクターに、グッと入り込んだ展開になっていきますよね。彼女のイジメの話が出てきたりとか。

鶴巻　それこそ古谷実だったり安達哲みたいな、青春のイヤな部分、ネガな部分をちゃんと描く。当時、観ていて影響を受けていた演劇も、わりとそういうイヤな部分を描いていたものが多かったっていうのもありますね。

貞本　ちょっと岡崎京子【※7】っぽいよね。

鶴巻　そうですね。大人計画なんかも、こういうイヤな部分を描いていて、可愛い女の子がヒロインなのに、裏ではすごくネガティブな、もうほとんど犯罪みたいなことをやってる……って戯曲があって。そういうことも、ＯＶＡなら表現できる、っていうのはありましたね。そういうネガティブな部分も含めての女の子の魅力なんです。

貞本　キレイな部分だけを描かない、っていうね。

——ナオ太の独白シーンには、手描きの文字がバババッと流れてくるんですけど、これはもともとコンテに描かれてたんですか？

【＊7】63年、東京都生まれ。大学在学中に雑誌『漫画ブリッコ』にてデビュー。80年代から90年代初頭にかけて『ジオラマボーイ パノラマガール』『ｐｉｎｋ』『リバーズ・エッジ』など、鮮烈な印象を残す作品を次々と発表。96年に交通事故に遭った後は、引退状態にあるが、その作品群は今でも多くの愛読者を生み出し続けている。

鶴巻　ないですね。たしか描いてないです。

――（絵コンテを確認して）あ、ホントですね。

鶴巻　たぶん編集で作ったのかな。ここは、本来あった脚本上では、ゲームの説明シーンとナオ太が警官に職質されるシーンが、徐々にオーバーラップする……みたいな、ちょっとヘンなことをやろうとしてたんですよ。絵的にも、ヘンなことをやろうと思ってたんですけど、最終的にはこういう表現として落ち着いたんです。

貞本　マミ美に対する、ナオ太の疑心暗鬼みたいなものは、あんまり必要がなくなったってこと？　話を聞いてたときには、もうちょっとそれを前面に出すのかな、と思ってたんだけど。

鶴巻　う－ん、というか、まずナオ太はマミ美を放火犯なんじゃないかって疑ってるわけですよね。で、それが実際のセリフとしては、警官がナオ太を尋問してるって形で出てきて、ナオ太はそれを一生懸命に否定してる。で、本来はそれを現実のシーンとして描こうとしてたんですよ。ただ、全体の尺の事情もあって。最終的には、ナオ太のイメージシーンの中にそれを全部入れ込んで、ナオ太もマミ美に対する疑心暗鬼に気付いてるんだけど、それを意識しないようにしてる、というか、ナオ太自身も混乱してる。その混乱を、混沌としたイメージシーンとして描いているってことかな。

貞本　この学校に放火したのはマミ美なんだよね。でも、今、街で起こってる放火事件の犯人は、マミ美じゃないかもしれない。

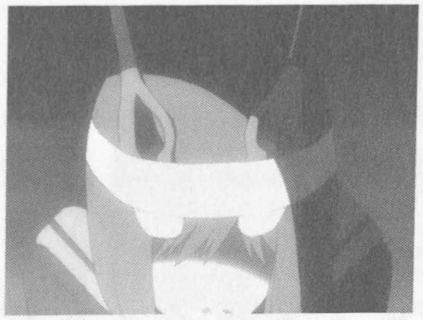
鶴巻　違うかもしれない。そのへんは誤魔化してますね。

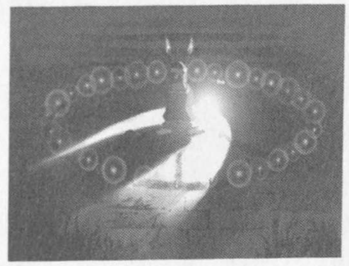
――そのあたりは、意外とバッサリ、カットしてますよね。

貞本　うん、だからもう少し、ナオ太がマミ美を疑ってるっていうのが前に出てくるのかなと思ってたんだけど、意外とそうでもないよなあ、って。



鶴巻 そういう葛藤としては、あまり前に出してないですね、たしかに。


#2-C244　14:43


C245　14:48


C252　15:16


C263　15:49

貞本 （ナオ太の回想シーンから現在のシーンに切り替わるときに、音楽がカセットの音に切り替わる）これは、良い音があったよね。このSE処理はカッコいいよ。

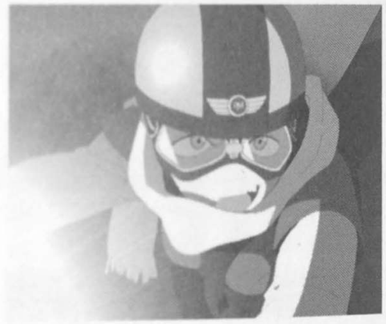
鶴巻 劇伴から突然、劇中で流れている音に変わってるっていう。

――で、突然、カンチが顔を出すっていう（笑）。これはたまたまこの場に居合わせたってことですよね。

鶴巻 今だったら、これはなんとかしなければ、と思いそうだよね（笑）。

――ものすごいご都合主義がここにはありますよね（笑）。

鶴巻 カンチはずっと自分の頭の破片を探してるから、どこにいても不思議じゃないんです（笑）。



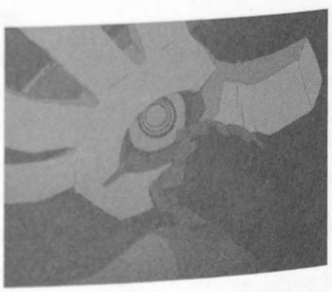
#2-C283　16:38



C286　16:44



C292　16:52



C297　17:03

鶴巻　これは西尾（鉄也）さん【※8】かな？　タイミングがリアルですよね。

貞本　いいなあ、シルエットじゃなくて塊で動いていく感じがいいよね。

——チラッチラッとパンチラが入りますね。

貞本　全然、色っぽくないんですけれどね（笑）。

鶴巻　これはコンテで指示してるわけじゃなくて、アニメーターが勝手に入れてる。

貞本　フェチズムで入れてるわけじゃないんですよね。このあたりのマミ美のスカートがなびいてるところとかも、すごくぞんざいで。「もう少し、なんとかなんないのか」って、今石にいったもんね。パンチラはロマンじゃないのかって（笑）。

鶴巻　いや、今石はね、そういう表現はよくやるんだけれど……。

貞本　露骨なものは割と好きなのに、いざとなると照れくさくなるのかな。

鶴巻　わかんないですね、単にサービスでやってるのかもしれないし、フェチな感覚があるのかもしれない（笑）。わかんないですね。

貞本　パンチラを描くとしても、その上のスカートのなびきをリアルに描かないと、パン

【＊8】68年、愛知県生まれ。アニメーター。専門学校を卒業後、アニメ・スポットに入社。『幽★遊★白書』『NINKU』などで活躍したのち、フリーとなり劇場用作品『人狼』（00年）で、キャラクターデザイン・作画監督を担当。骨太なアクションをたっぷりと見せる作風は人気も高い。またアニメ版『NARUTO－ナルト－』シリーズのキャラクターデザイナーとしても有名。

ツの存在感みたいなものが少なくなっちゃうんじゃないの？っていう。だから、このスカートの動きはないんじゃないって（笑）。色っぽくないよっていった覚えがあるなあ。

鶴巻　第5話でキツルバミの半裸シーンがあって、そこだと服が破れてて半裸状態になってる――それこそ片方のおっぱいが見えてたりするんですけど、「え、これだったら、おっぱい出さなくてもいいんじゃないの？」っていうような色気のない絵になってて（笑）。まあ、僕としてはサービスなのかって思うようにしています。

――例えば『一騎当千』【※9】的な。

鶴巻　うん、『一騎当千』のキャラクターデザインもやってた長谷川眞也さん【※10】には、明らかにおっぱいや太ももに対するフェチズムがあると思うんですよね。でも、今石くんはそのへんがどうなってるのか、よくわかんない。

貞本　すごくデジタル的だよね。「はい、パンツ！」みたいな（笑）。

鶴巻　パンツが見えてる女の子っていうフェチズムなのかな。パンツ自体には関心がないんだけど。まあ、第3話のほうが圧倒的に、フェチズムだけでできてる気がします（笑）。


#2-C386　20:10


C388　20:18


C390　20:26


C391　20:40

【＊9】03年に放映された、渡部高志監督によるテレビアニメ（制作はJ.C.STAFF）。原作は、塩崎雄二による同名コミック。『三国志演義』をモチーフに採り、女性同士の際どくも激しい格闘アクションが話題を呼ぶ。監督、キャラクターデザインなど、スタッフが一新され、続編も制作されている。

【＊10】68年、東京都生まれ。アニメーター。専門学校を卒業後、葦プロダクションを経て、東映動画に入社。『美少女戦士セーラームーン』シリーズの作画監督として活躍。その後、幾原邦彦とともに制作集団「ビーパパス」を立ち上げ、『少女革命ウテナ』（97年）に参加。『忘却の旋律』（04年）や『奥さまは魔法少女』（05年）など、現在ではJ.C.STAFFを中心に活動。

――第2話はマミ美のエピソードだったわけですけど、ナオ太にとって彼女は恋愛の対象なんですかね？

鶴巻　うん、そこは貞本さんにも結構ツッコまれたんですよね。ラストは「好きだ！」で終わって、ナオ太がマミ美のために頑張ろうと思う。そういう最後なんですけど、第3話以降には全然、そういう描写がないじゃないかって。

――マミ美はもともと、ナオ太には興味がないわけですよね。興味がないというか、恋愛対象としては見ていない。

鶴巻　まあ、それは後になってはっきりわかることですけどね。この第2話で描いているのは、恋愛対象としてじゃなくて、ちょっとペット的なというか、自分よりも弱いものに対する庇護の気持ちみたいなものを、ナオ太は持ってる。ここでナオ太が恋愛だと感じている気持ちは、隠された優越感なんだろうな、って思いますね。弱いものを庇護したいというのは、暖かい人間らしい、優しいこととしても表現できるんだけども、ある種の優越感の裏返しでもあって、それは相手をどこかでバカにしてる。だから、そうではなかったことが明らかになった瞬間に、その関係は壊れてしまう。

――まあ、そこが第5話で明らかになるわけですけど。

鶴巻　たぶん、マミ美をヒロインだと考えれば、そこはもっと恋愛として描いていいんじゃないか、っていうのが貞本さんの考え方なんだと思うんです。実際、そういう方法もあったかもって思いますし。

貞本　僕からすると、ナオ太の前に3人の女性がいて、それぞれに惹かれていく。でも結局、最終的にはそのどれも手に入らない――自分は全然子供だったんだな……っていうストーリーだと思ってたんですよ。だからもうちょっと突っ込んでマミ美のことも好きになるし、ニナモリのことも大切に考える。そのどっちつかずな感じっていうんですかね、そ

ういうものが、もう少し強調されるのかなって思ってたんですよね。ニナモリに関しては、まったく恋愛感情はない感じだよね。

鶴巻　はい。

貞本　わりと企画の最初の頃は、ニナモリに対して「あーっ、やられた!」って感じがあったと思ったんだけどね。お父さんとお母さんの間を取り持とうとして「ああ、やっぱり敵わない」って思う。そういうエピソードが、最初の頃のアイディアにはあった気がする。

鶴巻　ある段階で恋愛の対象はハル子に集中しなきゃダメだ、と。そう思ったんですよ。やっぱり全6話のOVAなわけで、テレビシリーズであれば、もうちょっと積んでいくこともできたのかなって思いますけど。あと、これは榎戸さんと僕の悪いクセで、恋愛モノなのに、毎回、もうひとつ別のテーマが乗ってくる。純粋に恋愛だけを描くんじゃなくて、その裏に別のテーマ性を乗せちゃうんですよ。で、そのテーマを前面で描こうとすると、恋愛が隠れてしまう(笑)。忘れてるわけではないけど、両方を描こうとするのは、欲張りなのかもしれません。

#3 マルラバ



STORY ナオ太のクラスの学級委員長、ニナモリ・エリ。彼女の指揮で、クラスは文化祭で披露する演劇『長靴をはいた猫』の準備で大わらわだが、ナオ太は「子供っぽい」と練習に参加しようとしない。さらには、ナオ太の父・カモンの書いた記事が原因で、疎瀬市長であるニナモリの父の横領事件がスキャンダルに。そして家に帰れなくなったニナモリは、ナオ太の家へとやって来るが……。

――第3話「マルラバ」ですけども、これはニナモリのエピソードですよね。いわゆる同級生委員長キャラなんですけど、あまりストレートに「良い子キャラ」という感じでもなくて。

鶴巻 うん、単に普通に良い子キャラだと、僕は萌えられないっていうことなんだけども（笑）。

貞本 この話は、実は第1話の制作に入る前に聞いてて、そのときはいい話だなあ、と思ってたんですよ。でも、それがコンテになって、できあがっていくにつれて「あれ、こんな話だったっけ⁉」って（笑）。

――ということは、最初のプロットと完成したものでは、結構印象が違う？

貞本 もうちょっと、ニナモリの家族――市長であるお父さんとお母さん、あとこの愛人の話が前面に出てたと思います。で、さっきもちらっと話したけど、ニナモリが父親と母親の仲を取り持とうとして必死になってる、みたいな。そういう話だったと思ってたんだけどねえ（笑）。

――それはたしかにいい話ですよね。

鶴巻 まあ、ナオ太が主人公の話にするためには、それじゃちょっとなあというのがあって。

貞本 そう、だから、最初に聞いたときには、わりとナオ太が不在の話だったんですよ。

――貞本さんから見て、ニナモリというのは魅力的なキャラクターだったんですか？

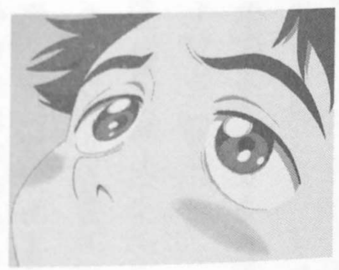
貞本 そうですね。子供の武器を使って、ウソをついてまで、なんとか親をくっつけようとする、みたいな。観客から見るとイヤらしいんだけど、でも賢い。そこの部分にナオ太がやられるっていう、そんな感じのエピソードなんだって思ってたから。



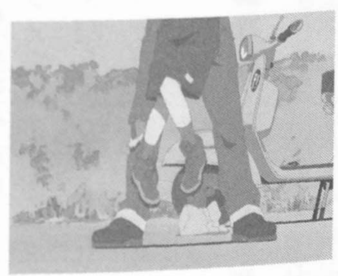
#3-C035　02:07



C038　02:27



C039　02:28



C040　02:30

貞本　（2人の会話を観ながら）なんでカレーだったの？

鶴巻　う〜ん、なんでだったっけな。「辛い」をキーワードにして繋げてく、みたいな話がまずあって、そこから下品な方向にどんどん進んでいく——カレーから連想して、どんどん下品な方向に行こう、みたいなことは考えてましたね。で、もう一方に「猫」の話があって、出てくるものは全部「猫」で縛ろう、と。

——ああ、それでナオ太が「ネコ耳」を生やしてる。

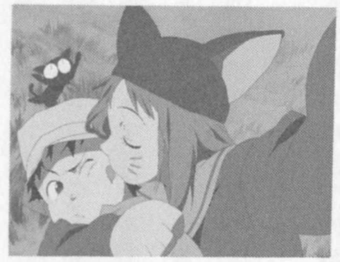
鶴巻　そうそう。全部「猫」縛りで行こう、みたいな。話を無理矢理そうやって、ひとつのモチーフで縛っていくというか、そういうのが演劇っぽいなっていう感覚が僕の中にあったんですよね。ひとつのモチーフを連想ゲーム的に展開させて、それで1本まとめちゃう、みたいな。

貞本　そうか、これは猫とカレーの話なのか（笑）。

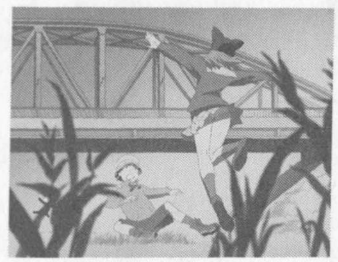
——猫とカレーとメガネの話ですね（笑）。



#3-C072 04:30



C072 04:36



C075 04:53



C075 04:56

——（マミ美のパンチラを見ながら）このパンチラはありですね（笑）。

貞本　このパンチラはいいですね。止めだけど。このスカートの描き方がいいです。

——あははは（笑）。さっきもちらっと話に出ましたけど、ナオ太の頭から生えてくるものが、ついにツノですらなくなりますよね。

鶴巻　頭から何か出てくればいいわけだけど、第3話には、あまりツノ自体にアイディアがなかったんだよね。もうちょっとアイディアをつけ加えなきゃダメだと思ってて、じゃあネコ耳で行こう、と（笑）。そこから劇も「猫」縛りにして……。

貞本　で、『長靴をはいた猫』【※1】になる。

——あと、ずっと気になってたことなんですけれども、お父さんの顔だけ、ちょっとデザインの方向性が違いますよね。

鶴巻　まあ、モデルがいるからですかね？（笑）

貞本　（声を演じている）松尾（スズキ）さんの顔を細長くしてっていう。個人的には、いい加減さみたいなのがデザインから出てて、気に入ってるキャラなんだけど……。方向



【＊1】もともとは、ヨーロッパ地方に伝わる民話のひとつ（シャルル・ペローによってまとめられたバージョンが有名）。ズル賢い猫が、その知恵を使って、次々と地位を手に入れていくというストーリー。東映動画により長編アニメ化もされており（69年公開）、また同社のマスコットキャラクターにもなっている。

性が違うかな？（笑）

――いや、なんていうか、ひとりだけ汚い顔だなあ、と。

貞本　あははは（笑）。

鶴巻　でも、髪の毛を下すと実は美形で、いい男にも見えるっていう。普段の表情とか仕草はカッコよく見えないんだけど、髪を下すと美形にしようって設定はありましたね。まあ、ほとんどそういうふうには描いてないんですけど（笑）。

貞本　もともと中央の、ジャーナリストというか編集者だったっていう設定なんで、メガネもなんとなくオシャレっぽいメガネをしてるんだけどね（笑）。


#3-C106　06:42


C107　06:43


C114　07:09


C115　07:11

貞本　あれは誰の顔が入ってるんだ？

鶴巻　高村（和宏）【※2】ですね。『カレカノ』からの縛りで（笑）。

貞本　そうか、『カレカノ』のときも本人の写真が貼り込まれてたけど、また高村なのか（笑）。

【＊2】72年、福井県生まれ。アニメーター・演出家。専門学校を卒業後、ガイナックスに入社。『彼氏彼女の事情』、『まほろまてぃっく』（01年）など、数多くの作品に参加。また、08年には初監督作『ストライクウィッチーズ』を発表し、大きな反響を集めた。

鶴巻　こういうのも、最近はほとんどやらない表現ですけどね。こう、もくもく土煙が立ってて、手とか顔とかがポコポコ出てくるっていう（笑）。30年くらい前のアニメの表現で。

貞本　それこそ『ピュンピュン丸』とか。

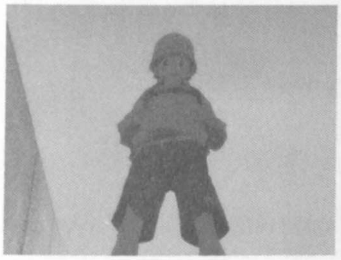
鶴巻　そうですね、そういうのをわざとやるっていうか。

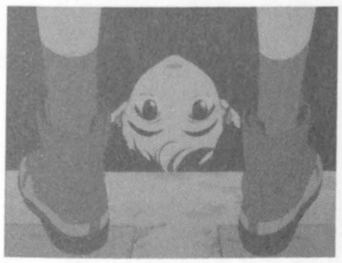
――逃げていく秘書も、そういうタッチになってますよね。

鶴巻　ここだけ、平松さんがコンテ描いてます。だから煙ポコポコもバイバイきんも平松さん。

貞本　あははは（笑）。


#3-C116　07:17


C118　07:31


C119　07:34


C122　07:43

貞本　ここの赤茶色の色は、小倉さんって感じがするよねえ。小倉クオリティの色ですよ。

――夕景は全体的にキレイですよね。この場面は、ちょっと三鷹【※3】のあたりを想像させますけど（笑）。

鶴巻　そういう感じがします？（笑）。ここのレイアウトは平松さんが描いてるんだけど、

【＊3】東京西部に位置し、JR総武線と地下鉄東西線の西の終点にあたる。『フリクリ』制作当時、ガイナックスがあった場所でもある。

たしか高田馬場にもガード下に入っていく脇に、道路がある場所があるんですよ。

貞本　電車ひとつとっても、パンタグラフの位置だったりとか、すごくこだわって描いてるよね。

――で、しっとりしたシーンなのかと思いきや……。

貞本　マシンガン撮影のシーンに。これはすごい（笑）。

――さっきとは全然違う話になってる、という（笑）。

鶴巻　ここは最初に、3Dでカメラワークを全部決めて、そのモデルに合わせて作画をしてるんです。

貞本　ワイヤーフレームを作ってるの？

鶴巻　そうですね。背景も動きも、全部3Dで作ってます。背景は、その段階ですべて3Dで作って、テクスチャーを貼り込んであるんですよ。で、キャラはワイヤーフレームっぽいガイドが置いてあって、それを1枚1枚出力したものに合わせて作画してる。

――第1話のときにもやってますけど……。

鶴巻　うん、もっとダイナミックにしてよかったなと思ってて。どうせやるんなら、半周じゃなくてもっとぐるぐる回してよかったなっていう（笑）。第1話でもやってるんだけど、頑張ったわりには地味なシーンになっちゃったなあ、と（笑）。もっとこう、グワッっていうシーンで使ったほうがいいな、と思ったんですよね。でも、このシーンは全体に好きですね。ニナモリも可愛いし。

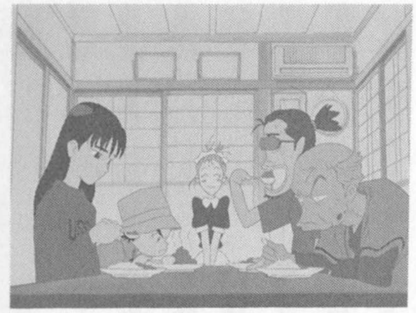
貞本　影の入れ方が独特で、線が綺麗に見えていいですよね。

――（ナオ太とニナモリがぶつかる場面を見ながら）ぶつかっちゃったから、ニナモリにナオ太のネコ耳が移っちゃった、っていうことなんですか？

鶴巻　そうですね。ぶつかったときに、ちょっと透過光【※4】の表現が入ってるんですけ

【＊4】光が抜ける場所以外にマスクを貼り、セルの後ろから直接、光を当てて撮影するアニメーションの撮影技法のひとつ（フィルムを通過した光をそのまま撮影することから、この名がついた）。ナオ太の頭の発光などは、この透過光技法を使って撮影されている。また、デジタル撮影が主流となった現在の制作現場では、コンピュータ上で擬似的にこの透過光を再現している。

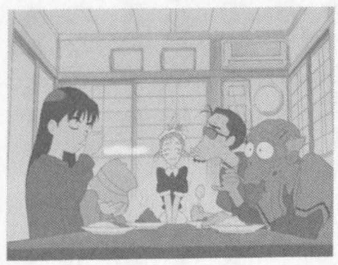
ど。後で見ると、ナオ太の頭から何かが出てくるのと、同じ透過光が入ってるんですよ。



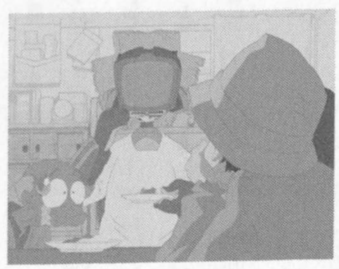
#3-C164　09:48



C165　09:58



C167　10:02



C168　10:08

貞本　ここは独特だよなあ。

――お茶の間のシーンなんだけど、明らかに何かが違いますよね、おじいちゃんはずっと止まったままだし（笑）。

鶴巻　ここのシーンは結構長いんですけど、一応、ニナモリがなぜ泊まらなければいけないのかっていうのを、延々と説明してるシーンで（笑）。ただ表現としては『バッファロー66』【※5】っていう映画に、こういう食卓のシーンがあるんですけど、3人の登場人物それぞれのカメラが置かれてて、その切り返しだけで構成されてるんですよね。そういう感じでやってみたい、っていってた結果なんですけど……。なんかもう、どこまでも下品になっていくわけです（笑）。

貞本　なんか、作画もゆるいよね（笑）。

鶴巻　ここは大塚（伸治）さん【※6】だと思うんだけど、大塚さんからすると『フリクリ』

【＊5】98年に公開された、ヴィンセント・ギャロ監督によるアメリカ映画。刑務所での刑期を終え、実家のあるバッファローに戻った男と彼の家族にまつわるドラマを、オフビートに描いた作品。監督のギャロは、主演のほか、脚本・音楽の4役をこなし、公開当時、その才能に注目が集まった。

【＊6】55年、兵庫県生まれ。映画『カムイの剣』の松前三人衆の場面を初め、スタジオジブリ作品など、数多くの作品に参加するベテランアニメーター。『フリクリ』ではほぼ全話に渡って参加。

はどこまでもやっていいぞ！」みたいに思ったみたいで、どんどん歯止めが効かなくなる（笑）。

――あははは（笑）。

鶴巻　第1話の冒頭の、マミ美がバットを振ってるところも大塚さんがやられてるんですけど、あそこはまだギリギリ許してるというか。あの場面でも、中ナシでカポッと動いたり、相当トリッキーなことをやってるんですよ。で「これが許されるのか」って思ったら、どんどん暴走が始まってて（笑）。

貞本　どんどんゆるくなっていく（笑）。大塚さんって、本来はすごく描き込む人なんですよ。

――顔がまるで違いますもんね、こうして改めて見てみると。

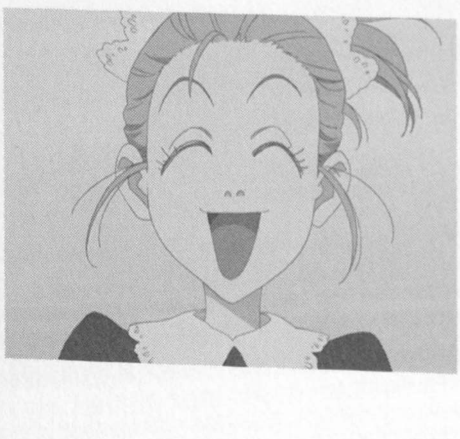
鶴巻　アップのニナモリだけが似てる（笑）。あそこだけ、たぶん平松さんが作監修正を入れてるんだけど、ほかはあんまり入れてないんじゃないかなあ。

貞本　ハル子とか「誰？」って感じだよね（笑）。

鶴巻　しかもハル子は、今回ここでしか出てこないメイド服なわけじゃないですか。だから、髪の毛の色と声でしかハル子だってわからない（笑）。髪型も違うしさ。

――やっぱり作品をやっていくにつれて、作画の許容範囲というのは、どんどん広がっていくもんなんでしょうか？

鶴巻　まあ、それはあるでしょうね。だんだん加速がついていくというか、前はあそこまでやったんだから、次はここまでやっても大丈夫、みたいのもあるだろうし。もっとすごいこと、作画でいえば、次の第5話とか、ものすごいことになってますからね。もっとすごいこと、もっとトリッキーなことを、っていう。まあ、普通の作品では、やってみたくてもなかなかできないわけだしね。特に大塚さんは当時、I.Gにいたわけで、I.Gではなかなかこ



ういうことはできなかっただろうと思いますし。で、ついにこの次のパジャマのシーンでシンプルな絵で（笑）。

貞本 パジャマの襟元からちょっと胸が見えるとかね、この絵でやってるんですよ。この……。

――あははは！（笑）

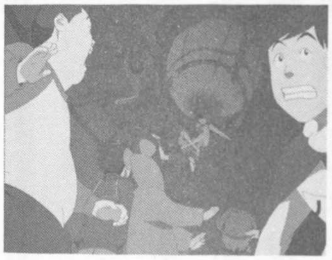
貞本 あのパジャマの表現にしても、普通は、女の子が男の子のパジャマを着て、ダブダブになってるのが萌えなわけじゃないですか。でも、ニナモリとナオ太の場合は、男のほうがちっちゃいから、ピチピチになっちゃう。「そこが萌える」って言われて「えーっ！」って（笑）。

――小学校だと、女の子のほうが発育が早いから（笑）。

貞本 「寸足らずのパジャマが萌えるんですよ！」って説明されて（笑）。マニアックだなあって。

鶴巻 そこは平松さんも共感してましたよ（笑）。


#3-C279 17:00


C282 17:07


C286 17:16

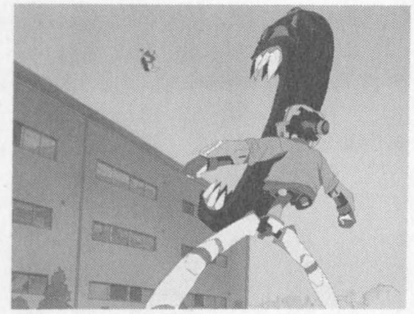

C288 17:27



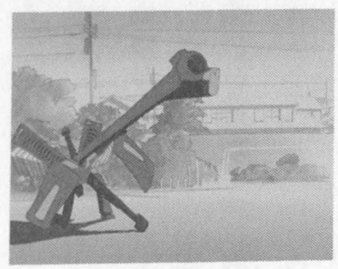
鶴巻　ここ西尾さんですね。うまいなあ。
貞本　このデザインは樋口さん？
鶴巻　樋口さんですね。でも、もともと貞本さんのラフがあったんじゃなかったかな。
貞本　そういえば、全体のフォルムは描いたかもしれない。
鶴巻　そう、四本足のメカメカしいロボットで、真ん中に女の子がプラ〜ンってブラ下がってる。最終的にデザインしたのは樋口さんですけど、蜘蛛みたいなヤツの真ん中に女の子がブラ下がってるっていうアイディアが、貞本さんにあったんですよ。
——貞本さんはなぜ、そんなものを描いてたんですか？（笑）
貞本　いや、取り込まれてるんだけど、見えてるっていうのがいいじゃないですか。なんか手が出せない、永井豪【※7】的な（笑）。
鶴巻　そうですね、永井豪の変形ですよね。
貞本　でもこの曲は全然、永井豪っぽくないけど（笑）。
鶴巻　あははは（笑）。ここは、平松さんが「この曲を使おう」と。まあ、小学校っぽいからいいかっていう。
貞本　（屋上の場面を観ながら）おお、ここはうまいね。
鶴巻　ここは吉成くんですね。うまいですねえ。
貞本　フォルムがメチャクチャうまい。
鶴巻　（ギターを持って飛び込んでくるハル子）で、ここからは摩砂雪さん【※8】ですね。
貞本　摩砂雪さんのほうが、ぐっとタメて、動くって感じが素直です。でも、うまいですね、やっぱり。

【＊7】45年、石川県生まれ。『デビルマン』や『キューティーハニー』など、数多くの名作で知られるマンガ家。セックスとバイオレンスを大胆に取り入れた作風で、多くのマンガ家に影響を与えた。また『マジンガーZ』を筆頭に、テレビアニメの企画者・原作者としても、多くの作品に携わっている。

【＊8】61年、長野県生まれ。アニメーター。専門学校卒業後、スタジオジャイアンツに入社。『さすがの猿飛』や『らんぽう』などに携わった後、『王立宇宙軍 オネアミスの翼』でガイナックスに参加。以降『新世紀エヴァンゲリオン』など、ガイナックス作品を中心に活動を続ける。現在は、鶴巻とともに『ヱヴァンゲリヲン新劇場版』の監督を務める。『フリクリ』では、第2話の絵コンテなどを担当。


#3-C339　19:27


C344　19:43

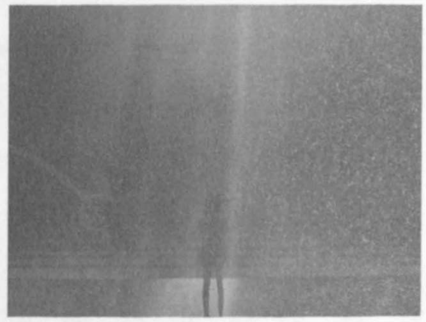

C347　19:50


C350　19:58

鶴巻　このあたりは大平さんかな。
貞本　大平さんですね。
鶴巻　もう、ワケわかんねえ！
貞本　ワケわかんないね（笑）。
鶴巻　なぜああいうフォルムなのか。
貞本　遊んでますよね。
鶴巻　作画が頑張りすぎてて意味がわかんない（笑）。ちょっと解説すると、あのロボットの弱点は頭の上にあるんですよ。で、教室だと、頭の上が天井でつかえちゃう。だから、屋上に誘い出せば、頭の上が……。
貞本　見える状態になるわけだよね。
鶴巻　だからハル子は、いつも上から攻撃してるわけなんだけど、今、カンチは校舎の下に飛び降りてて。で、ロボットが屋上から逃げてくるときに、身体がこう横向きに倒れて、頭の上が下を向くんです、だから攻撃できたっていう。そういう話なんだけど、作画が頑

張りすぎてるから、横倒しになったとかよりも先に、アクションやフォルムに目がいっちゃってしまいますね。

――なんとなく勢いで勝った感じがするという（笑）。



#3-C354　20:20



C355　20:26



C356　20:29



C357　20:34

――（伊達メガネであることを明かすニナモリを見て）これでオチっていう。これは頭から決めてたんですか？

鶴巻　いや、違います。

――えっ、違うんですか！（笑）

鶴巻　実はメガネをかけてるっていうのは、たしか決めてあって――要するに、ニナモリは、人前で隠してたことを、表現できるようになった、というのはあったんですけど、そこからもう1回ヒネって、それも実は伊達メガネでしたってオチに持っていったのは、土壇場ですね。

――メガネをかける設定はもともとあったわけですね。

鶴巻　あったと思います。準備稿まではメガネキャラだったんですよ。キャラクターの配置上、女の子のうちのひとりにメガネをかけさせて、差別化しようと考えていたんだと思います、貞本さんとしては。

貞本　まあ、委員長ですからね。

鶴巻　でも「メガネは俺たちの前でだけ、かけてほしいよね」っていって（笑）。貞本さんも最後には「わかったよ」っていいながら、消しゴムでメガネを消して。

貞本　もうね、メタとか伝わるのかなあ、と。『エヴァ』みたいな作品だったら、深読みしてくれるお膳立てがあるわけじゃないですか。「深読みしてくださいよ！」って、そういう作品になってる。でも、ここまで来ちゃうと、深読みするのも疲れるよ、っていう（笑）。

――要するに、メガネをかけてる姿を見せてるのはナオ太だけで、ナオ太は当然、それが本物だと思ってるっていう。

鶴巻　榎戸さんの脚本でも、本来のネガな部分を隠して、委員長キャラとして生きてきたニナモリが、ネガだと思ってた部分をみんなの前でも表現できるようになりました、っていうオチだったはずで。それをもう1回ヒネって、実はそれもウソでした、っていうふうにしたのは、僕ですね。

――そうだったんだ……（笑）。

鶴巻　まあ、女の子はいつも一筋縄ではいかないっていう、そういう世界観です。「わかったような気になるなよ」っていう世界観というか（笑）。見切ったと思った瞬間に負けちゃう。

貞本　もう一枚上手だっていう。

鶴巻　負けでいいでしょう。可愛い女の子にこういう負け方をするんなら、何度でもお願いしたい（笑）。

#4 フリキリ



STORY すっかりナンダバ家の一員になってしまったハル子。町内の草野球チームで大活躍したかと思えば、夜はカモンの自室でイチャイチャ。そんな彼女の態度に苛立ちを募らせるナオ太の前に、謎の男・アマラオが現れる。その頃、疎瀬市には落下した人工衛星が近付いていた。ハル子に連れ出されたナオ太は、街を睥睨するメディカルメカニカプラントの最上部で、人工衛星を迎え打つことになるのが……。

――そういえば、お聞きしてなかったですけど、キャラクターの名前を決めたのは鶴巻さんなんですか?

鶴巻　そうですね。ナンダバ・カモンだけは榎戸さんで、あとは僕が決めてると思います。

――ちょっとヘンなネーミングなんですけど、何かルールはあるんですか?

鶴巻　ルール……。というか、富野由悠季【※1】的なネーミングが好きなだけです。

貞本　やっぱりね(笑)。

鶴巻　音の繰り返しみたいなのが好きなんですよ。アマンダラ・カマンダラ、みたいな(笑)。

貞本　ハルハラ・ハル子はなんとなくそれっぽいよね。ナンダバはどこから来たんですか?

鶴巻　ナンダバはワンダバ【※2】に音が近くて、漢字で見ると「楠田波」と見慣れた印象なんだけど、音になった途端に「これどんな字なんだ?」と思うような――日本語の音と文字のイメージがズレてる、みたいのを狙ってます。松任谷由実の曲に「盛岡っていうその響きがロシア語みたいだわ」っていう詞があるんですけど。「盛岡」って普通に聞くと字も一緒にイメージしちゃうから何の違和感もないんだけど、音だけ取り出すとたしかにロシア語っぽい。そういうのが好きなんです。

――というわけで、第4話「フリキリ」に行こうと思うんですけども、このあたりから一歩、お話が踏み込んだ感じになりますよね。エピソード的にはハル子がメイン、なんですかね。

鶴巻　そうですね。あとはナオ太がちょっと成長して、ハル子の正体が明らかになりつつある、みたいな。

――このエピソードからアマラオとキツルバミが登場するわけですけど、彼らというのは……。

鶴巻　入国管理局というのは、このマバセの公安警察的な組織。まあ、他の星との外交の

【＊1】41年、神奈川県生まれ。アニメーション監督・演出家。日本大学芸術学部を卒業後、虫プロダクションに入社。日本初のテレビアニメーション『鉄腕アトム』に参加した後、フリーのコンテマンとして活動。72年には初の監督作『海のトリトン』を手がけて以降は、次々と作品を発表。何よりも『機動戦士ガンダム』(79年)の総監督として有名だろう。

【＊2】特撮番組などで、主人公の所属する組織の出動シーンなどに使われるBGMのこと(最初に使われたのは『帰ってきたウルトラマン』とされる)。転じて、怪獣の出現など、いかにもなシチュエーションを指して「ワンダバ」と呼ぶこともある。名称は、独特のスキャット(コーラス)から。

窓口になってる、っていう感じで。

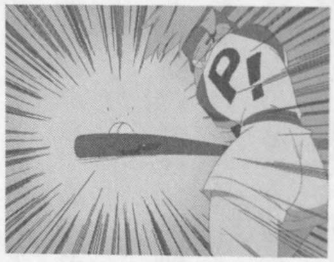
――さっきの続きで言うと、この2人のネーミングというのはどこから来てるんですか?

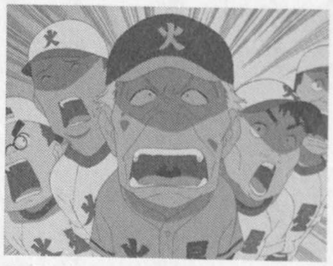
鶴巻　えーっと、アマラオはサッカー選手ですね。元FC東京で、今はもう引退してたしか社会人チームの指導者になってるはずです。ブラジル人で、名前は漢字でもなんでもないんだけど、「余る」に「尾」で「アマラオ」になるな、って思って。で、キツルバミはヘンな名前にしたいっていうのがあったんですけど、全然思いつかなかったんですよ。で、榎戸さんの家に日本語の色の名前の辞書があって、それをパラパラ見てたら、「黄橡(きつるばみ)色」っていうのを見付けて。

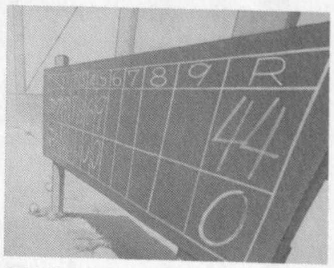
貞本　へーっ、何色なの?

鶴巻　黄色と鶯色の間みたいな色じゃないかなと思いますけど。黄緑色まではいかないいんだけれど、くすんだオレンジとくすんだ黄緑のちょうど中間あたりみたいな、微妙な色。


#4-C001　00:02


C002　00:04


C003　00:07


C006　00:17

鶴巻　野球の話はやりたかったんですよね。

貞本　あははは（笑）。

鶴巻　第3話がカレーと猫縛りだとしたら、今回は野球ネタだけで押し切る、っていう。だから、最後のオチまで一貫して、野球ネタ。

――（チームメイトたちを見ながら）このあたりのモブは、どなたがデザインされてるんですか？

鶴巻　この回の絵コンテ・作監の小倉（陳利）さんですね。

貞本　小倉さんの趣味ですね。

鶴巻　いやもう、この回は小倉さんのセンスですよ。独特の奇妙な感じの演出とか表情、ポーズのテイストは、やっぱり小倉さんらしいな、と。

――小倉さんにお願いすることになった経緯というのは？

鶴巻　小倉さんは『カレカノ』で、平松さんと並んで主力のひとりとして参加してもらったんですが、うまいし、独特のスタイルを持っていて、ぜひ1本お願いしたいな、と思ってたんですよね。で、やるならコンテ・作監でやりたいっていう話で、それじゃコンテからお願いします、と。しかも小倉さんは結構、下品な表現をするのが好きで（笑）、そういう部分は少女マンガ原作の『カレカノ』では使い切れないけど、『フリクリ』ならOK、と思ってお願いしたんです。

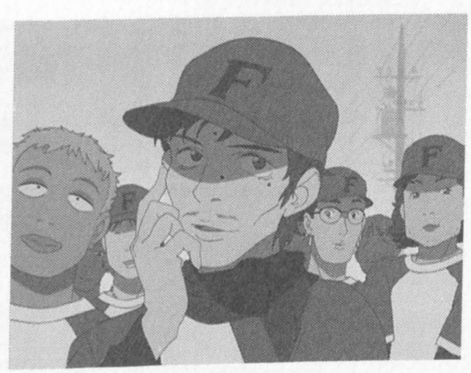
貞本　もともとこの爺ちゃん（ナンダバ・シゲクニ）って、デザインの元があれだよ、ヤクルトの元監督。

鶴巻　野村（克也）？

貞本　そうそう。

鶴巻　ああ、そうなのか（笑）。

貞本　これはリクエストされたんだっけ？



鶴巻　いや、してないと思います。ただ、ナオ太の兄貴が、野球で留学してて、それを一番喜んでいるはお爺ちゃんっていう設定があって。

貞本　ああ、それで野村にしたんだ。なんとなく似てるでしょ、野村さんに（笑）。

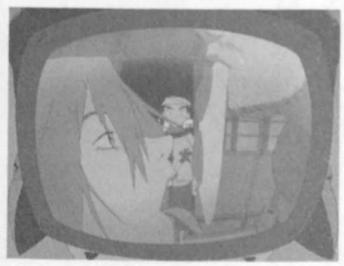
鶴巻　目つきの悪さとか。



#4-C053　03:04



C060　03:27



C070　03:53



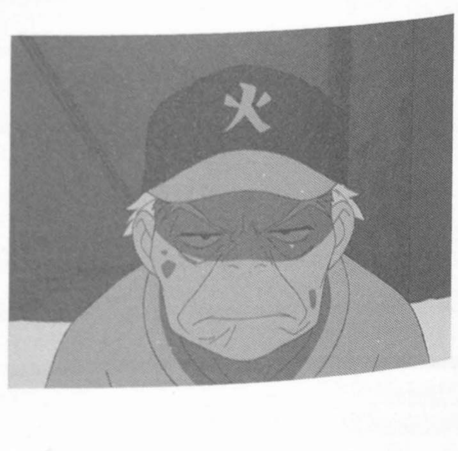
C070　03:56

――ああ、下品なところって、こういう場面ですね。

鶴巻　そうですね。このほかにももっと、小倉さんからは「こういうシーンを入れてくれ」みたいなリクエストがいくつかあって、その中には、とても表現できないような、下品なことがたくさん書かれたんですけど。

貞本　あははは（笑）。

鶴巻　和式便所でナオ太がウンコしてると、ハル子が後ろから座ってきてタンデムウンコで「混ぜっこ混ぜっこ！」っていってくるとか（笑）。すさまじく下品なことをリクエストされて「さすがにこれはできません！」って。



貞本　（目玉焼きをくわえっこするハル子とカモン）このへんとかもね、かなり。

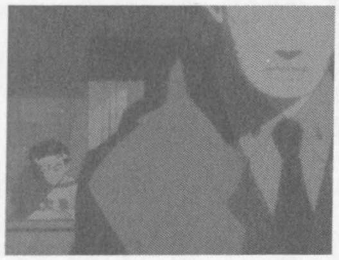
鶴巻　これは邦画にありましたよね。生卵のヤツ。

――ああ、伊丹十三【※3】の『タンポポ』かな。

鶴巻　ああいう感じをやりたいんだろうなって。



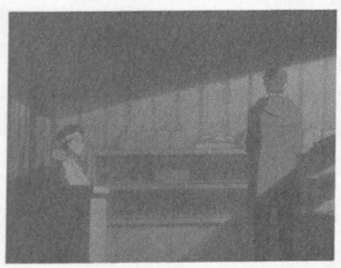
#4-C079　04:29



C084　04:40



C088　04:57



C094　05:16

貞本　いやあ、いい声だなあ。また何かで、絶対に声優やってほしいよね。いい声だわ。

鶴巻　大倉（孝二）さんはガチガチにカッコいいキャラもできるかもなって思いますよね。

――アマラオが乗ってるスクーターの、ナンバープレート（う－0303）には意味があるんですか？

鶴巻　横にすると「0」が顔で、「3」っていう字が耳みたいになってて、それでうさぎっぽいかなって。ラビットっていうスクーターなので（笑）。ハル子のスクーターも、ナンバープレートが「5656」なんですけど、あれは猫が喉を鳴らしてる「ゴロゴロ」ってのから来てます。



【＊3】33年、京都府生まれの映画監督・エッセイスト。60年、大映に入社し、俳優として活躍。大映を退社後も、ユニークな存在感を持つ俳優として、テレビドラマや映画に出演。84年には『お葬式』で映画監督としてデビューを果たし、その後も話題作を次々と手がける。『タンポポ』は、その伊丹による85年の作品。食にまつわる様々なエピソードを綴った喜劇タッチの作品で、生卵のエピソードもその劇中に登場する。

——あとアマラオといえば、このマユゲですけども……。

貞本　いや、もう発注の時点で海苔を貼っつけたような、って指示があったんですよ（笑）。

鶴巻　最初はアマラオのイメージって全然違ってましたね。『ツインピークス』【※4】のクーパーが、ずーっとテープレコーダーに喋ってるじゃないですか。果たしてそのテープレコーダーの先に、本当に聞いてる人がいるのかいないのかもわからない、みたいな。そういうちょっとヘンな感じがアマラオにはほしいな、と思ってて。で、何かないかって探していくうちに、テーマ的な部分で言うと、男らしさみたいなものを極端に表現したいと思っている男なんだ、と。そのときに、こういうぶっといマユゲみたいなことが男らしさの表現だとアマラオは思ってる。でも、端から見ると全然ヘンでしょう、っていう。そういうギャップのキャラクターとして、最終的には落ち着いたのかな。

貞本　あのマユゲがデザインじゃなくて、実際に海苔を貼っつけてるってなったのは、どの段階だったんだっけ？　最初はあれ、デザインだったよね？

鶴巻　そうです。

貞本　たしか途中で、パスケースみたいなのに海苔がいっぱい入ってて、「今日はどれにしようかな」って貼りつけるシーンを入れよう、みたいな話が出てきた（笑）。

鶴巻　しかもあのマユゲはオシャレというわけじゃなくて、ハル子に自分の能力を利用されないためのガードになってるっていう。いつ、それを思いついたのか、全然覚えてないですね（笑）。僕のラフの段階では普通の太いマユゲだったと思うんですよ。ラフでは、ラガーマン体型で坊主頭で、西郷隆盛みたいな濃い顔のゴッツイ体育会系の男だった。

貞本　僕自身、細眉のキャラばっかりなんで、たまには太いのをってことだと思うんだけれど（笑）。『トップをねらえ2！』【※5】のときにも、太眉の男がいるじゃないですか。

鶴巻　ニコラですね。

【＊4】90年から翌91年にかけて放映された、デイヴィッド・リンチ監督によるテレビドラマ。独特のビジュアル感覚と謎に満ちた展開が大きな反響を呼び、アメリカのみならず、日本でも大ヒットとなった。対談中で触れられている「テープレコーダー」とは、登場人物のひとりでFBI捜査官であるデイル・クーパーが、何かあるとメモを吹き込んでいるテープレコーダーのこと。

【＊5】04年から06年にかけて発売された、鶴巻和哉監督によるOVA作品（全6話）。庵野秀明監督による『トップをねらえ！』の続編。宇宙パイロットに憧れる少女・ノノと、バスターマシンを操る「トップレス」の少女・ラルクの絆を描く。貞本がキャラクターデザインを務め、榎戸洋司が脚本を担当、またガイナックスの主要メンバーがスタッフとして参加するなど、『フリクリ』の座組みがほぼそのまま引き継がれている点にも注目。

貞本　そうそう。ニコラをこういうマユゲにしてくれって言われたんだけど、太眉苦手なんだよなー、って（笑）。目がつぶらとかマユゲが太いとか、俺があんまり描かないキャラクターを要求してくるんだよね、鶴巻は。

鶴巻　あははは（笑）。今は普通にアニメのキャラとして、太眉のキャラっていないよなあとは思いますね。残念です。

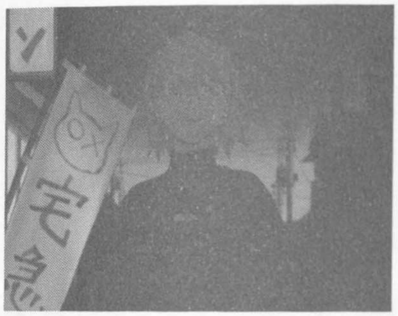
——一方、彼の部下のキツルバミは、金髪で肌が焼けたキャラクターですよね。

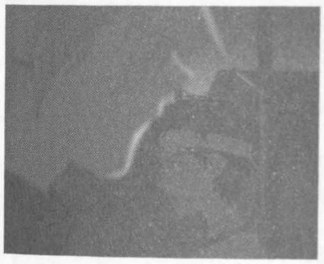
貞本　うん、あれはやっぱり（『ふしぎの海のナディア』【※6】の）エレクトラですかね、元は。エレクトラをデザインしたときに、黒人っぽい肌とちょっと白っぽい、金色の髪の組み合わせがすごくキレイに出たんで、じゃあこっちでもやってみよう、と。で、その後『トップ2!』のラルクでもやってるわけですけど。

鶴巻　当時、ゲームではすでに、髪が白くて肌が浅黒いってキャラは出始めてたんだけど、アニメではあまり出てなかった、っていうのはありましたね。

貞本　我ながら、いいキャラだなって思いますね。

【＊6】90年から91年に放映された、庵野秀明監督によるテレビアニメ。ジュール・ヴェルヌの『海底二万里』『神秘の島』を原案に、発明好きの少年・ジャンと不思議な少女・ナディアの冒険を描く。貞本は、キャラクターデザイナーとして参加。


#4-C101　05:54


C103　05:58


C106　06:08


C107　06:09

鶴巻　ここかもスゴイですね。エキセントリックな演出があって、この後カモンの首がドサッって落ちるカットがあるんだけど……。

貞本　これ、よくわかんねえよ！（笑）

——あははは（笑）。

鶴巻　僕もよくわかってません（笑）。不穏な空気とか不安の影みたいなことが表現できてればいい、何か意味のある表現ではない、と僕は思ってるんですけど。まあ、小倉さんには何かあったのかもしれない。

——ということは、脚本上では描かれてないわけですよね？

鶴巻　まったくないです。小倉さんは、Jホラー以前の、60年代70年代の邦画の怪奇映画も好きだったりするんで、そういう感覚はあるのかなって思いますけども。

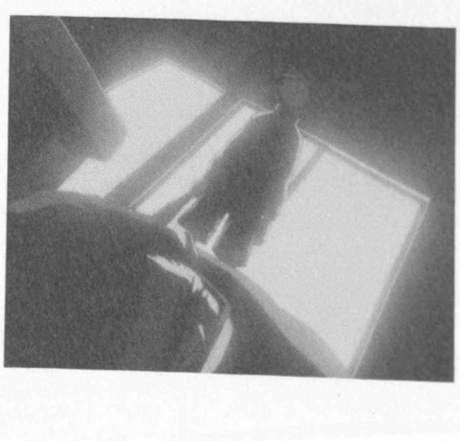
——この後、ナオ太がカモンをバットで殴る——正確には殴ってるわけじゃないんですけど、そう思わせるシーンがありますよね。時系列が前後して、ミスリードを誘うような。

鶴巻　脚本のときに、榎戸さんから抵抗されたように記憶してます。ナオ太がロボットとはいえ父親を殴っていいのか、っていうということですね。実際、ナオ太は父親がロボットだってことを知らないわけで、実際父親だと思っているものを殴って死に至らしめていいの？っていう。だから、遠まわしに、テレビを叩いたら時計が飛んで、それが当たって死んだ、みたいな話にしてるんだけども（笑）。

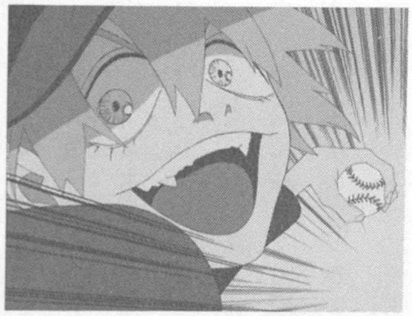
——実際に殴ってる瞬間は、カット頭でちょっと描かれてるだけで。

鶴巻　猫がハル子をいたぶってるってカットは、脚本にはなくて、小倉さんのアドリブですね。だからここも不穏な空気と、ナオ太が追い詰められてる。その感じが出せればいいな、と。

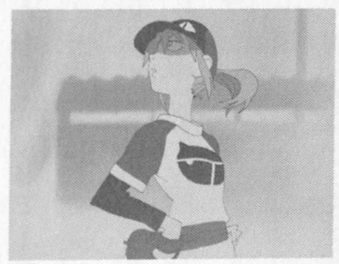
貞本　電気が使われているっていう表現も、わかんないねえ。

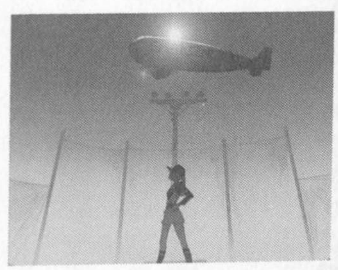


鶴巻　何度か観れば、わかりますよ。


#4-C201　11:28

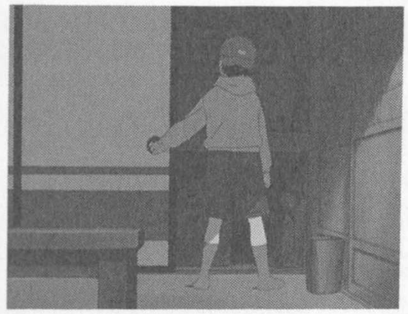

C203　11:32


C205　11:42


C206　11:43

貞本　このバファローズっぽい服はなんなの？
鶴巻　ああそれは、僕がバファローズのユニフォームが好きだから（笑）。
貞本　岡本太郎が好きなんだ（笑）。
鶴巻　しかも当時はみんな、バファローズのユニフォームがダサイと思ってるような風潮があって。で、あのニナモリのモデルになった人……。
貞本　ああ、吹石一恵。そうだ、ニナモリって吹石一恵がモデルだったんだ。今、思い出したよ（笑）。
鶴巻　彼女は、元近鉄の吹石選手の娘さんなんですよ。で、当時、デビュー間もない吹石一恵が始球式をするんで近鉄のユニフォームを着たことがあって。しかも女の子が着る用に改造されて、ホットパンツみたいなユニフォームになってて、それがすごく可愛かったので、これでお願いします！っていう（笑）。

貞本　近鉄バファローズって、今、もうないよね。
鶴巻　オリックスと合併しちゃいましたね。
貞本　そうそう。子供心に、あの岡本太郎デザインのマークがキライでねえ。
鶴巻　ああ、怖いというか気持ち悪いというか。
貞本　怖いというか、今風に言うとダサい。「牛って！」って思ったもん（笑）。
鶴巻　バッファローだからしょうがないじゃないですか（笑）。
貞本　あははは（笑）。たぶんシャープなものが好きだったんだよね。有機的な感じがイヤだったというか。
鶴巻　たしかに、広島カープとバファローズと、昔の南海ホークスはダサいっていうイメージでしたよね。
貞本　カープはいいんだよ、まだね。
鶴巻　いやいや、それは貞本さんの出身地が近いからであって、東日本では、カープはダサいです。
貞本　いや、別にいいんだけどね（笑）。濃くて暑苦しい感じは、たしかにある（笑）。
鶴巻　だって鯉じゃないですか。鯉ってカッコよくもなんともないし、強そうでもないし（笑）。
貞本　あれは太田川に鯉がいるからなんですよ。で、鯉には滝登り的なイメージもあるから。



#4-C246　14:28



C256　14:42



C260　14:49



C272　15:04

――ここもまた、えげつないシーンですよね。

鶴巻　このゴキブリ（笑）。

――これは脚本上では指示はないんですか？

鶴巻　なかったと思いますね。

貞本　うわっ、すげえリアルだな。

鶴巻　これは、テクスチャーを貼ってます。たしか小倉さんからは「ゴキブリを3DCGにできないか」っていう話をされたんですよ。でも脚本にもないし、それほど重要でもないから、わざわざ3Dはちょっと……って。それでゴキブリのテクスチャを――写真だと思うんですけど、それを貼ってます。

貞本　ここはちょっと4℃っぽい感じもあるよね。

鶴巻　オレンジの色味がそういう感じに見えるのかな。

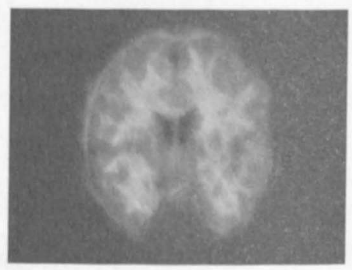
――鉄塔の感じが、そういうふうでもありますよね。

鶴巻　この場面のカモンは、濡れた髪の毛を下してて、ちょっとカッコよくなるかなと思

ってたんだけど、やっぱりカッコよくならなかった（笑）。


#4-C283　15:47


C281　15:48


C281　15:52


C281　16:06

貞本　ここらへんから、すっごくSFっぽくなってきてる。とっ散らかってるけど（笑）

鶴巻　あははは（笑）。

——この、アマラオが持ってるハル子の写真は？

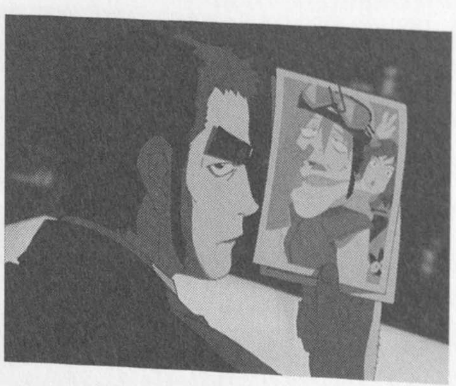
鶴巻　これはなんですかね。小倉さんのセンスだと思う（笑）。鼻くそをほじってる女の子は好きみたいですよ、小倉さん。

——全部「小倉さんのセンス」で処理しようと思ってませんか？

鶴巻　あははは（笑）。（ナオ太の頭に手を突っ込むハル子を見ながら）ここは、榎戸さんのフェチズムですね。女の子に、頭の中をグリグリされるのがいいでしょう！って、たしか榎戸さんが言ってた気がする。

——そして、鼻血が洪水のように！（笑）

鶴巻　当然これも、脚本にはないです（笑）。ただ、ジェイムズ・ティプトリー・ジュニ



ア【※7】ってSF作家がいて、彼女の小説にはよく宇宙人が出てくる。しかもその宇宙人というのはいつもメタファーになっていて、それが何のメタファーかというと、性的に優れた人のメタファーなんですよ。文中には、具体的な宇宙人の描写があまり出てこないんだけど、地球人の男であれ女であれ、極限まで性的に惹かれてしまうような存在が宇宙人である、と。それがなんとなく頭にあって、優れた宇宙的能力の持ち主は、性的にも魅力的である、と。だったら、鼻血はオッケーでいいかなと思って描いたたっていうのはありますね（笑）。

――で、ナオ太はバットを振ってしまう、と。少年の初めての第一歩になるわけですね。

鶴巻 そうですね。まあ、そういう状況に追い込まれて、っていうことですけど。ここは貞本さんが描いてますよね？

貞本 飛び込んでくるところはそうですね。

――打ち返した後の街がすごいことになってますが（笑）。

鶴巻 これも脚本にあるわけじゃないんだけど、たぶん小倉さんが、DAICONっぽいことやりたいんだろうな、と（笑）。

貞本 ここ吉成なの？　それとも、すしお【※8】？

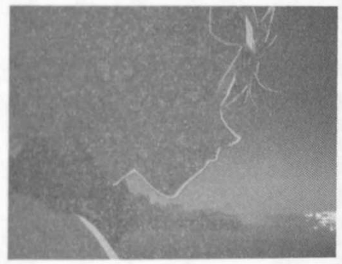
鶴巻 ここは誰だったっけなあ。吉成くんではないと思いますけど。

貞本 じゃあ、すしおかな。

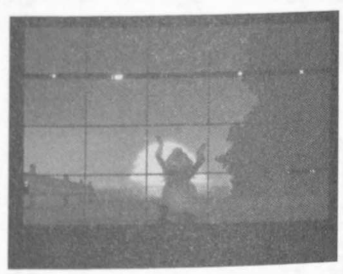
【＊7】15年生まれ、アメリカのSF作家。『愛はさだめ、さだめは死』など、骨太な作風から男性作家だと思われていたが、実は女性。作家デビューは68年。70年代を通して、数多くの傑作を世に送り出し、ジェンダーの問題を積極的に扱ったことでも知られる。

【＊8】76年、埼玉県生まれ。アニメーター。専門学校を卒業後、ガイナックスに入社。『新世紀エヴァンゲリオン』で初動画を担当し、その後もガイナックス作品を初め、『ONE PIECE』『おジャ魔女どれみ』『スチームボーイ』など、数多くの作品に参加。アクション、エフェクト作画に定評がある。


#4-C377　21:25


C378　21:29


C379　21:33


C381　21:43

鶴巻　小倉さんはバイクに乗らないから、ちょっと乗り方が後ろすぎるんですよね。そのバランスが面白い。

――で、アマラオのマユゲの海苔が落ちる、という（笑）。

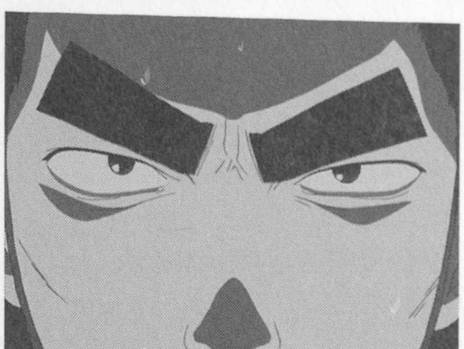
貞本　どういうオチだよ（笑）。

――ずっとみんなが思ってたことが最後に起こって、終わるという（笑）。結局、アマラオはどういう立場の人間なんですか？

鶴巻　例えば、冷戦時代の日本を舞台にしたアメリカとソ連のスパイ合戦に巻き込まれた日本警察みたいな感じでしょうか。スパイが違法行為をしても、指をくわえて見ているしかない。

――ああ、アメリカとソ連が、それぞれフラタニティとメディカルメカニカなわけですね。

鶴巻　フラタニティとメディカルメカニカは宇宙の支配を二分するような大勢力なわけですけど、このマバセがある惑星は、その二大勢力の狭間で従属して生きてるような街なわけです。で、そういう立場の弱い国家の警察官みたいのが、アマラオ。で、一方のハル子



とかメディカルメカニカは、建前上、マバセの法律や約束事を守ってくれてるんですけど、本音の部分ではどうでもいい、と思ってる。自分の利益になるのなら、ためらいなくマバセを犠牲にしちゃうでしょう。

――この第4話で、主要キャラクターはすべて出揃ったわけですけど、貞本さんから見て、お気に入りは誰なんでしょう？

貞本 どれも気に入ってますけど、アマラオとかはやっぱりいいですよね、うん。色味とか雰囲気、声も含めて、キャラクターとして面白いなと思いますね。これは今まで私が参加したアニメにいなかったでしょう、っていう。

鶴巻 この後にもいないんだけれども（笑）。たしかに珍しいキャラクターだと思います。僕は、アマラオをカッコいいキャラクターとしては描いてないんですよ。カッコつけてるキャラクターとしては描いてるけれど、カッコいいキャラだとは思ってない。恐らく榎戸さんもそうだと思うんだけれども。でも、ファンはカッコいいキャラだと思ってくれてるんですよね。そこがすごく面白くて、それは「愛されてる」ってことだと思うんですけど、こちらが意図しないところでの成功だったんだ、と思うんです。どちらかといえばダメなキャラとして描かれるべきキャラクターなんだけれど、そこも含めて愛されてるし、好きだといってくれてるし、カッコいいと思ってくれている。こういうキャラはなかなかいないよな、と思いますね。まさに『ヤンマガ』のダメ青春ものっぽい。

貞本 カモンもね、こんなダメオヤジってなかなかアニメに出てこない（笑）。気に入ってますね。

――「大人なんてロクでもない」って世界観なんですけど、みんな別にそれだけでもない。

鶴巻 そうですね。もちろんダメな大人たちなんだけど、それだけではない。そのことがナオ太にはわからなかった。子供には見えていなかった世界がある、と、最後にひっくり



って思いますね。

貞本　いい人そうなキャラクターがひとりも出てこないのが、いいんだよね（笑）。

――みんな腹に一物抱えてますからね。

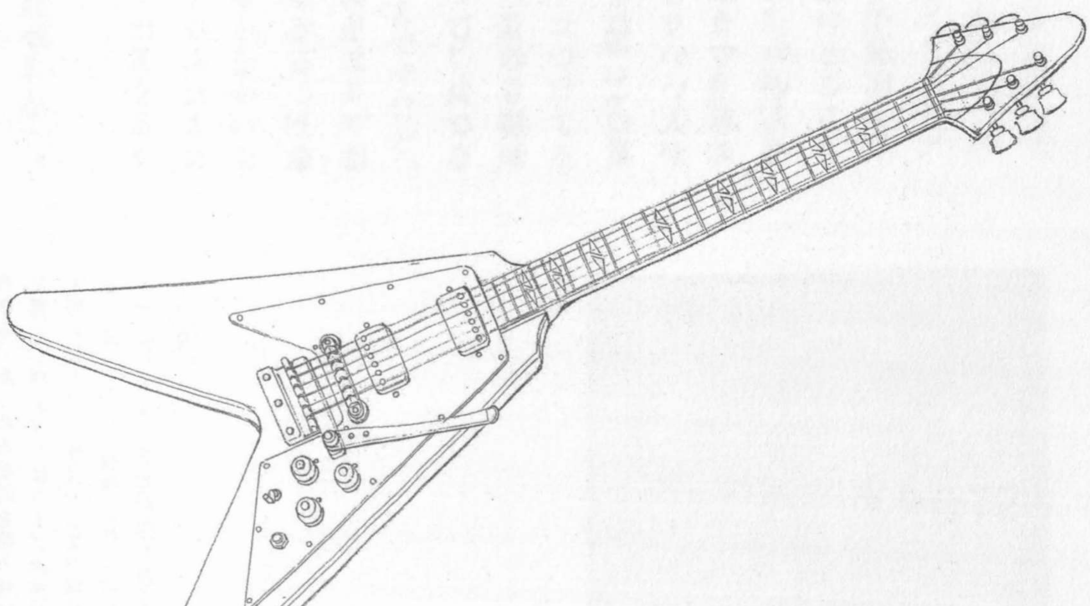
鶴巻　『ダメージ』【※9】っていうアメリカの弁護士ドラマがあるんですけど、出てくるキャラクターがもう、主人公も含めて全員ウソつきで、観てるとワクワクしちゃうんだよね（笑）。

――世の中の潮流なのかどうかはわからないですけど、やっぱりみんな、思ってることを言ったほうがいい、本音を言ったほうがいいって感じがあるんですけど、『フリクリ』はちょっとそことは違うのかな、と思ったりするんですね。

鶴巻　それこそ、普通のアニメや少年マンガの主人公の言うことは「正しい」し、少なくとも本音を言っている。でも、当時の『ヤングマガジン』では、そうじゃないものも描かれていた。『フリクリ』もまた、そういう世界観の作品ではあるのかな。

貞本　『ヤンマガ』のマンガに出てくる人も、あんまりいい人じゃないですよね。この業界に入って一番最初にやった『オネアミスの翼』も、わりと意識的に、誰ひとりいい人が出てこない作品だった。むしろダメな人が集まってて、という話で。でもこれって、考え方としてはリアルだと思うんだよね。自分の周りを見渡してみても、「この人、いい人だなあ」って人はあんまりいないじゃないですか（笑）。いいところもあれば悪いところもある、っていうのが人間だと思うし、むしろ他人から見れば、悪いところのほうが目立ったりもする。じゃあ、その中で生きていて、人生がつまんないかというとそうでもないし、っていう。そういう感じが、この『フリクリ』でも出せてるように思うんですけどね。

【※9】07年から放映中の、アメリカのテレビドラマ。裁判に勝つためなら、あらゆる手段を使う辣腕弁護士、パティ・ヒューズの活躍を描くリーガル・サスペンス。現在、すでにシーズン2まで制作されており、シーズン3の制作も決定している。



#5 ブラブレ



STORY 河川敷でサバイバルゲームに興じるナオ太とカモン。そして、そんな彼らを監視する入国管理局のアマラオたち。偶然通りかかったニナモリたちからナオ太は、自分たちが街を守っているのでは？ と噂になっていることを聞く。気分をよくしたナオ太は、ついにマミ美を連れ出すが、彼女はナオ太を拒絶。そしてナオ太の頭の撃鉄が放たれ、巨大ロボットが出現する。「俺が守ってみせる」と大見得を切るナオ太だが……。

—対談スタートから4時間近く経ってるので、若干ダラダラした感じもありますが（笑）。いよいよ問題の第5話「ブラブレ」、エピソード的にはクライマックスに向けて、ひとつ大きな事件が起きる回ですね。

鶴巻　調子に乗ってたナオ太にとって、重大な事実が明らかになる。ナオ太、大挫折！っていう回ですね。

貞本　あははは（笑）。

—まあ、ストーリーはもちろんなんですが、第5話といえばやっぱり、作画監督を担当した今石さんの、やりたい放題ぶりが印象的ですね。

鶴巻　目に余る回ではありますね。

—あははは（笑）。

鶴巻　今石くんには第2話のときに作監をお願いしたんですけど、そのときは、ちょっと堅苦しくやってたなっていう印象だったんです。それを脇で見てたから、じゃあ次はもうちょっとハジケてもらっていいです、と。それでやらせてみたら、こうなっちゃいました、という（笑）。

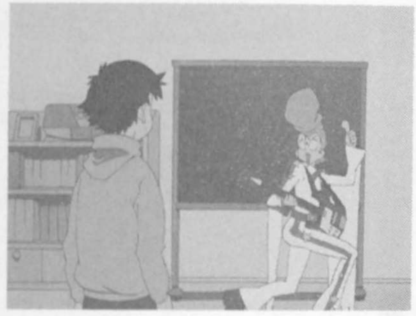
—いや、その暴れっぷりが楽しい回ではあるんですけども（笑）。

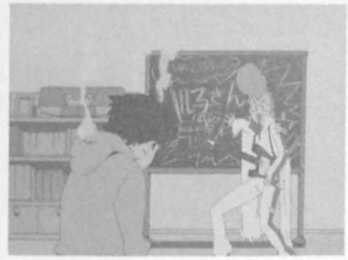
鶴巻　アイディアの面でも、今石くんに協力してもらってるエピソードなんです。第3話が猫&カレー縛りで、次の第4話が野球縛りだとしたら、この第5話は銃縛り。銃、ガンで、何か連想ゲーム的にアイディアはない？　って、今石くんと話をして、それで「じゃあサバイバルゲームで」とか「ルパン三世で」みたいな感じでアイディアを出してもらったんです。

—じゃあ、プロット段階から今石さんに入ってもらって？

鶴巻　そうですね。プロット段階で一度、今石くんにアイディアを出してほしい

って話をして、そこで出てきたものを脚本に活かす、っていうやり方をしてますね。


#5-C021　02:04


C022　02:15


C023　02:23


C025　02:30

——このエルヴィス・プレスリーは、貞本さんがデザインを？（笑）

貞本　いや、違います（笑）。

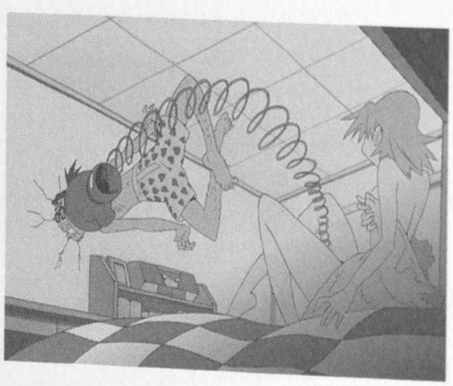
鶴巻　ここは全然、こうなるつもりじゃないシーンだったんだけれども、結果的にこんなシーンになってしまった（笑）。本来、ここはなんていうか、良いシーンになるはずだったんですよ。

——ナオ太がハル子とキスをするわけですからね。

鶴巻　さっきまでのドタバタが一転して、いいムードになる……っていうシーンのハズだったんですけども、今石くんの手にかかると、こうなってしまう、という（笑）。

貞本　カモンの歯に虫歯がいる（笑）。

鶴巻　あははは（笑）。これは、松尾スズキさんの舞台を見たときに、ルパン三世のモノマネしてるシーンがあったんですよ。で、じゃあやってもらいたいな、って（笑）。



——ドタバタ回にしようっていう意図はあったんですか？

鶴巻　いや、脚本上は他の回とそれほど違ってないと思うんですよ。でもそれをどう、コンテで表現するか、作画的にどう表現していくかっていうときに、こういう方向をチョイスすることになったんだろうな、と。それはそれで自由にしていいよ、というか、ヘンに窮屈にならないほうがいいよ、って話は今石くんともしてて。だから、ある程度こうなるだろうな、と想定はしていたんですけどね。

——貞本さんは、ここまでキャラクターを崩されるとは思ってないわけですよね（笑）。

貞本　そうですね。僕はやっぱり、第1話とか第2話の、あのメロウな感じが続くもんだと思ってましたからね。まあ、ここまで来たら、自由にやってくれ、とも思いましたけど。


#5-C038　04:05


C038　04:06


C041　04:22


C041　04:23

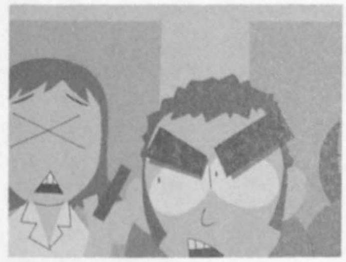
鶴巻　ここは大塚（伸治）さんですね。あいかわらず上手いですけど、やっぱり一番やりすぎてるのは大塚さんだな（笑）。

——大塚さんも、あんなお芝居ばっかりやってる人じゃないわけですよね（笑）。

鶴巻　ジブリで作監もしてる方ですからね。むしろ、他ではできないからやってくれたんだろうなって思いますけど。「『フリクリ』なら許される！」って（笑）。



#5-C049　04:54



C049　05:10



C051　05:16



C051　05:18

――あははは、ここで一旦、止めましょうか（笑）。これ、いいんですかね？

鶴巻　わからない、僕もいいか悪いかわからないいままやっています（笑）。

――これは、もともと今石さんのコンテの時点から入ってたんですよね？

鶴巻　そうです。

――わからない人もいるかもしれませんが、これはアメリカの切り絵アニメというか……。

鶴巻　これはCGで作ってるんですけれども。

――『サウスパーク』【※1】。そのパロディですね。一応、第4話で、ミヤジュンの車が壊れるシーンで、この『サウスパーク』のキーホルダーが一瞬、映るんですけども。

鶴巻　まあ、みんな、大好きってことですよ（笑）。僕も好きだったし、今石くんも好き

【＊1】　97年から放映中の、アメリカのテレビアニメ。トレイ・パーカーとマット・ストーンの2人が原作を務め、キュートな絵柄とは裏腹な、ブラックかつ風刺色の強いストーリーが展開。99年には劇場版も制作されている。

だったし。まあ、ここまでやるとは思ってなかったけれども。

貞本　この前のカットのアマラオも、ちょっとアメコミというかカートゥーンっぽい感じになってるんだよね。輪郭が太くて、髪の毛がホウキですっていう（笑）。

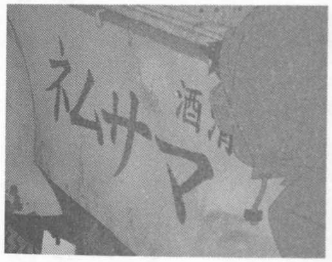
——でもこれがホントに起こってることがどこにも示されないんで、イメージシーンかと思っちゃったんですよね、最初。で、後から「ホントにアマラオは髪切ってたんだ」ってわかる（笑）。

鶴巻　まあ、投げっぱなしバックドロップです。（カンチを狙うキツルバミを見ながら）ここもヒドくて、「サバゲー」って言葉の音から「鯖」を連想して、さらに「サバゲルゲ」に繋げるっていう。もう何の意味もない、ただの連想ゲーム（笑）。でも、ここの台詞をひねり出すために、榎戸さんと僕は徹夜してますからね。

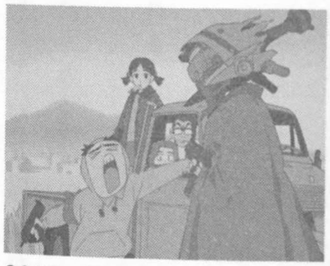
——DVDだと、何が起こってるのか、よくわかんないですね。

鶴巻　そうですね。アクションの激しいところは圧縮の関係でノイズっぽくなっちゃってるんですけど、ブルーレイではキレイになってると思います。


#5-C091　07:11



C092　07:23


C096　07:40


C098　07:56



——このマサムネっていうのは？

鶴巻　えっと、車の運転をしてる同級生の苗字がマサムネなんですよ。で、こいつの家は酒屋をやってて、小学生なんだけれど、配達のバイトをしている、しかも車を乗りこなしてるっていう設定で。これは榎戸さんのアイディアなのかな。ナオ太たちがサバゲーみたいな子供の遊びをしてるときに、同級生は車を運転して大人の仕事をしてるんだよ、っていう。そういう対比ではあるんですけど。

——自分の子供っぽさを自覚させられる、っていう。

鶴巻　このあたりは平松さんが原画ですね。最初、同級生たちが乗ってる車はただの軽トラックだったんです。でも、平松さんが三輪車にしよう、って言ったのかな。

貞本　たしかに好きそうだよね。

鶴巻　まあ、ヘンな世界観になればいいなあって。ここはちょっとね、マサムネとガクがニナモリのことが好きかもしれない、っていうのが脚本でも入ってるんですよ。で、河川敷を走ってる分には、法律的には違反でもないか、みたいな（笑）。



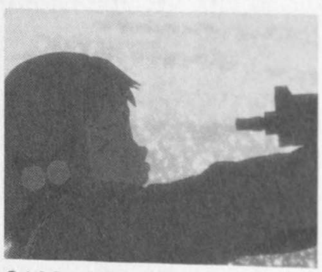
#5-C125　09:41



C126　09:44



C127　09:45



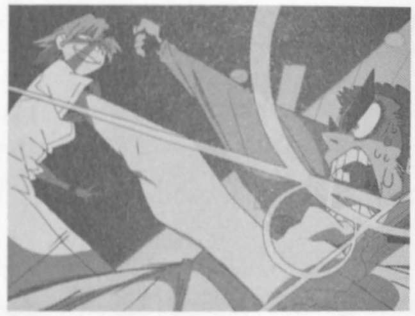
C128　09:55

鶴巻　今見ると、水面のキラキラ感がすごいね。
貞本　ね、今までみたことない。
鶴巻　当時は、結構デジタル（撮影）の初期の頃だったんで、どうすればこういうことができるか、何を使ってこういう表現をするか、みたいなことが、わりとまだ試行錯誤の段階なんですよ。だから、同じ水面の表現でも、第1話のときのキラキラとこのキラキラは全然違う。
貞本　違うね。
鶴巻　で、ここ！（服が破れたキツルバミを見ながら）。これが第2話のときに話してた、問題のシーン。おそらく、脚本上では半裸になってる表現はなかったと思うんだよね。
貞本　キツルバミが。
鶴巻　そう、キツルバミが。だから、ここはコンテを描いた今石くんなりのサービスシーンなんだろうなって思うんだけれど（笑）、サービスシーンのわりにはそんなにサービスになってない。むしろ、濡れてる表現をもっと積極的に使ったほうがエロくなるんじゃないの？と思うんだけれども（笑）。
貞本　そこが、今石チョイスだよね（笑）。
鶴巻　今石くんのセンスですね。
貞本　声は誰がやってんだっけ？
――千葉千恵巳さん【※2】ですね。
鶴巻　『おジャ魔女どれみ』好きだったので（笑）。で、ここでようやく、アマラオはホントに床屋にいたってことが明らかになる（笑）。
貞本　『サウスパーク』のシーンは嘘じゃなかったんだ、と（笑）。
――（再び河川敷のナオ太を見ながら）で、もう1回『サウスパーク』が戻ってくる（笑）。



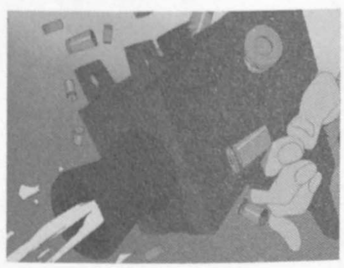
【＊2】埼玉県出身。声優。もともとはモデル・舞台女優として活動していたが、声優に転身。99年から放映された『おジャ魔女どれみ』の主人公・春風どれみ役でブレイクを果たす。

鶴巻　ホントに好きなんだな。


#5-C150　11:30


C151　11:35


C152　11:36


C158　11:49

鶴巻　ここは、今石くんがすごいやりたがったシーンなんですよね。
貞本　床屋で銃撃戦。
鶴巻　ジョン・ウー【※3】っぽいというか。
――この第5話の冒頭には、ハトも飛んでますからね。このあたりは、もう完全に今石さんにお任せ？
鶴巻　そうですね。ほぼ任せっきりです。ここ（スローモーションで飛んでくる銃弾をすり抜けるハル子）は、ちょっと考えてたのと違って、半分、身体が物質ではなくなってエネルギー体のようになったハル子が、弾を避けつつ前に進んでくる。本来は、SF設定的な意味のアクションだったんだけど、実際の絵を見ると、単に金田的なエフェクトにしか見えない（笑）。
貞本　完全にエフェクトだよ（笑）。

【＊3】46年、中国広州市生まれ。映画監督。86年に制作した『男たちの挽歌』で、香港の裏社会に生きる男たちの物語をハードボイルドタッチに描き、一躍注目の的に。90年代からは活動拠点をアメリカに移し、『ミッション：インポッシブル2』（00年）などを監督。バイオレンスシーンをスローモーションを使って撮影するなど、独特な作風で知られる。また作中に飛んでいる鳩を登場させることでも知られ、『フリクリ』第5話の冒頭に鳩が登場するのも、ジョン・ウーへのオマージュ。

鶴巻　手癖で描いてるみたいな感じになっちゃってて「アレー？」って（笑）。もうちょっとシリアスな、生っぽいシーンになるとよかったんですけどね。こういうタイミングとかフォルムの描き方をすると、生っぽさとは離れてしまうな。

――（ナオ太とマミ美が入っていく喫茶店を指して）この「カフェブルー」というのは、どこから来てるんですか？

鶴巻　これは榎戸さんですね。スタイルカウンシル【※4】からです。榎戸さんのプランでは、ナオ太がマミ美をラブホテルに連れて行くっていうイメージだったんだけど、さすがに小学生がラブホテルはヘンだろう、と。なので、ラブホテルっぽく見える喫茶店に連れて行くっていう仕掛けになってて、絵はラブホテルなんだけど、実はカフェっていう。……でも、全然伝わらねえなあ（笑）。

――あははは（笑）。

鶴巻　小学生が、女子高校生を喫茶店に連れて行くだけでもすごいでしょう？　みたいなことではあるんだけれど。

貞本　一応「ご休憩」って書いてあるから、わかるとは思うんだけどもね（笑）。

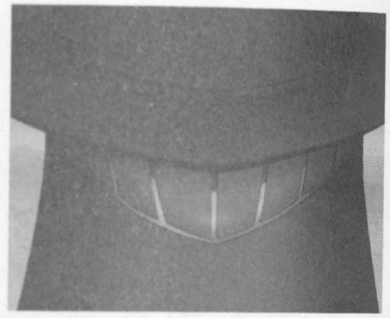
鶴巻　（再びハル子とアマラオの対決シーンに戻って）ギターを、魔法の変身ステッキみたいに使ってるっていう描写なんだけど、まあ絵として描いてないから、よくわかんない（笑）。

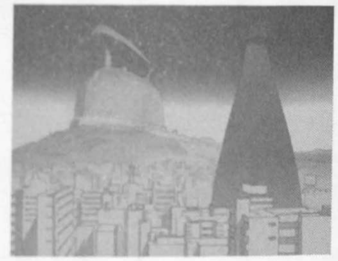
――もともとハル子とアマラオは、知り合い同士だったということなんですよね。

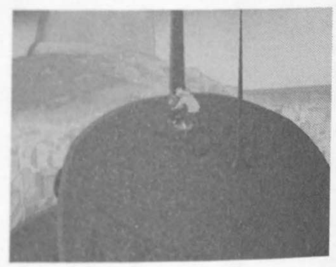
鶴巻　そうです。たぶん、アマラオがナオ太くらいの歳のときに2人は出会ってて、そのときもやっぱり、アマラオはハル子にいいように使われて、捨てられたんだろうなあ、と。アマラオはナオ太の未来の姿かもしれない、そういう関係です。



【＊4】元ザ・ジャムのギター＆ボーカリスト、ポール・ウェラーが中心となって、83年に結成されたソウル／ポップス・ユニット（90年に解散）。劇中で、ナオ太とマミ美が入ろうとする喫茶店「Ｃａｆｅ　Ｂｌｅｕ」は、彼らのファーストアルバム『カフェ・ブリュ』から。


#5-C249　16:11


C250　16:12


C251　16:16


C251　16:19

――このロボットのデザインは……。

貞本　いづな（よしつね）さん？

鶴巻　ですね。アイディアとしては、テンガロンハットで、マントを羽織っていて、ウィンチェスターのレバーアクション持ってる。

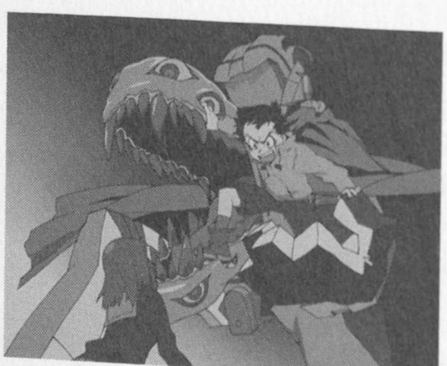
貞本　ああ、銃撃戦。

鶴巻　そう、西部劇に出てくる流れ者みたいなデザインがいいな、って話をして。

――で、ここ（マミ美がナオ太の兄の名前を呼ぶ）で、マミ美はやっぱりお兄ちゃんのことが好きだというのが明らかになる。

貞本　カッコいいね。

鶴巻　このカッコよさは、実は勘違いなんですよ、と後でわかるんだけど。だから、過剰すぎるほどにカッコよく描いているわけで。ほんとは、逆意味なんですけどね。ここ（爆煙を潜り抜けながら突進してくるハル子）はやっぱりうまいね、吉成くん。この爆発は、ほかのアニメでもよく真似されてますよね。



――（映画の看板にぶつかる、弾化したナオ太）これは？

鶴巻　これはまあ、ヤクザ映画の鉄砲玉と、実はナオ太がカンチを操縦してるわけじゃなくて、単に弾として使われてた、というのをかけてるんですけど……（苦笑）。

――ギャグを無理やり解説させちゃいましたね（笑）。

鶴巻　あははは（笑）。でもこのあたりは、アクションも構図もダイナミックで、好きですね。

――（戦いを見守るアマラオたち）キツルバミがすごいことになってんなあ。

鶴巻　ヒドイなあ。

貞本　あっはっは（笑）。顔がわかんない。

――（アトムスクの武器が出現）これはなぜギブソン【※5】なんですか？

鶴巻　カッコいい形のギターがないかなあって、いろいろ探してたんですけど、ＥＢ0って、ちょっとバットマンっぽくて、カッコよかったんですよね。ただ名前が「ＥＢ0」なのが、ちょっとなっていう（笑）。例えば「スティングレイ」とか「スペクター」とかだったら、必殺技っぽいけど「ＥＢ0」は、叫んでもあんまり必殺技っぽくない（笑）。

――まあ、記号みたいなもんですよね。

鶴巻　なんだけど「61年型」ってつけちゃえば、ネタにできるかなっていう。必殺技なのに「61年型」ってなんだよ、みたいにできるかな、と。そういうギャグです。またギャグ解説しちゃいましたけど（笑）。

――まあ、第5話はギャグ回なので、ギャグの解説をする以外に手がないのかな、と思ったりするんですけども（笑）。

鶴巻　いや、アイデアやテーマ性を考えると、シリアスに展開させたって十分面白い回だったと思うんですよ（笑）。でも、そこをギャグにすることで、一歩ズラしている。

【＊5】ＥＳ－１５０やレスポール、フライングＶなど、数多くの名機を生み出した、アメリカのギターメーカー。



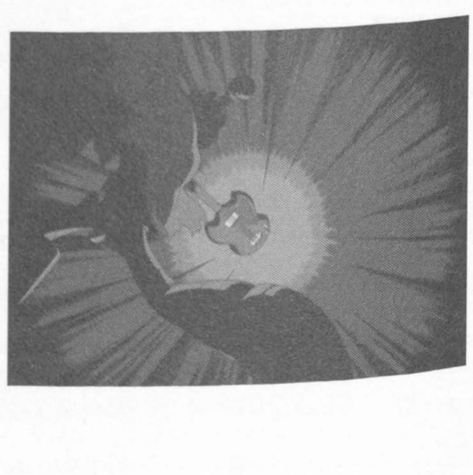
――あえてズラすほうを選んだ？

鶴巻　そういうわけでもないんですけど、今石くんの得意分野で勝負したい。ズラすことでそれができるなら、それでもいい。しかも、それで面白くなくなるなら問題だと思うけれど、表現したいことは表現できてて、さらに面白くなってるんなら、それで構わないかなって。全編、叙情的なしっとりしたテイストでまとめることだって、不可能ではなかっただろうけど、そして、それは僕にとっても好ましいことだったのかもしれないけど、だからこそ、それでは物足りない。それは、「いいアニメ」だったかもしれないけれど、10年経っても好きだと思ってもらえるような力強さは持たなかったでしょうね。

――当時のガイナックスの状況としても、こういうアニメートの方向にシフトしていくような状況にあったんでしょうか？

鶴巻　うん、『エヴァンゲリオン』の後に、アニメーターの陣容はかなり替わったんですね。世代交代せざるを得なかった。一方で、『エヴァ』は、アニメーターに対してガチガチに制約を設けていた作品だったんです。スタイルを強要する演出方法だったし、その上、クオリティも求めたので、若い人を育てる環境とはいえなかった。その後の『カレカノ』は、佐伯昭志くん【※6】だったり今石くんに、もっとフリーにやらせようっていう作品だったんだけど、その結果として若手が相当伸びたし、今石くんよりもさらに若いアニメーターたちが、そういう自由な作風に憧れを持って参加してくれたり、ということがあった。だから僕自身も、作画を縛って窮屈に作るよりも、そういう自由さの中でパワーを解放したい、と思ってたんですよね。まあ、ここまで自由じゃなくてもいいんじゃないか、とも思うんだけど（笑）。

貞本　あははは（笑）。



【＊6】71年、神奈川県生まれ。大学時代からアニメーションの自主制作に携わり、ガイナックスに入社後は『彼氏彼女の事情』『まほろまてぃっく』といった作品に、絵コンテ・演出として参加。『フリクリ』では、第3話のコンテと演出、また第5話では演出を担当。04年に発表された『この醜くも美しい世界』では、初めてテレビシリーズの監督を手がけた。



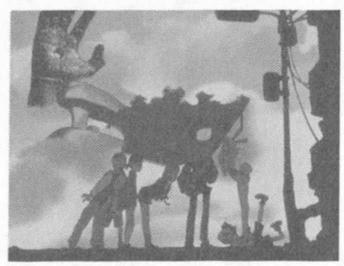
#5-C352　20:27



C353　20:29



C355　20:37



C356　20:40

——というわけで第5話だったんですけど……貞本さん、疲れてますか？（笑）

貞本　いや、あんまり喋ることとねえなあって（笑）。

——貞本さんからすると、この第5話っていうのはちょっとマンガっぽすぎるっていう印象なんでしょうか？

貞本　いや、観るのは好きなんだけど……。

鶴巻　例えば『ど根性ガエル』とかは、どうなんですか？

貞本　『ど根性ガエル』はすごい好きだよ。でも『旧（72年版）』よりも『新（81年版）』のほうが好きですね。

鶴巻　ああ、僕もどちらかというと『新』のほうが好きですね。

貞本　でも、参加してるアニメーターだと『旧』のほうが好きなんですよね。僕は、小林治さん【※7】が本当に好きで、だから『旧』がすごく好きなんだけど、でも『新』もいいでしょ？って思うんだよね。その『新』もいいでしょ？っていうのは、トータルで見て美術がいいとか、動きのデフォルメがいいとか、そういうことなんですけど。小林さんの

【＊7】45年、東京都生まれ。アニメーター・演出家。『ルパン三世』や『アタックNo.1』『ど根性ガエル』など、東京ムービー作品を中心にアニメーターとして参加。78年には、芝山努らとともに亜細亜堂を設立し、『燃える！お兄さん』『ノンタンといっしょ』などの監督を務める。

動き（アニメート）っていうのは、もう芸の域まで達してるんで、絵そのものはたしかに『旧』のほうがいい。でも、エピソード自体、『旧』はギャグが主体なんだけど、『新』はちょっと泣ける人情話がいくつもあって、回によってはメチャクチャ泣ける。『新』はあまり注目されないけど、すごくいいんですよ。

――そういえば、その関連で思い出したんですけど、第5話には『ルパン三世』のジャケットの話題がネタとして出てきますよね。

貞本　あははは、赤ジャケか緑ジャケか【※8】（笑）。

――以前、『コンティニュー』で貞本さんを取材させていただいたときに【※9】、鶴巻さんと最終的にわかりあえない例として出てきたのが、ルパンのジャケットの色だったんですけども（笑）。

鶴巻　あはははは（爆笑）。

貞本　最初に会ったとき、鶴巻に言われたんだよね。「赤ジャケのほうが好きです」って。でも今石は、たぶん緑ジャケのほうが好きでしょ？

鶴巻　まあ、そうでしょうね。

貞本　だってAプロファンだもん。

鶴巻　いや、単純にリアルタイムでは『ルパン』の第1期（緑ジャケ）って観てないんですよ。むしろリアルタイムで観てたのは第2期（赤ジャケ）のほうで、そういう意味では、第2期のほうが「僕の『ルパン三世』だ」って感じがする。もちろん、第2期にも、どうでもいいダメな回もたくさんあるんだけど、いくつか好きな回があって、それだけ観てる分には第2期だって十分面白いよなあ、って。

貞本　そっかそっか、自分の青春時代を引っくるめていい、と（笑）。

鶴巻　そうそう。そういうことはあるんですけど、例えば『ルパン三世』の最終回――問

【＊8】テレビアニメ『ルパン三世』は、71年に放映された第1期（通称旧ルパン）と77年より放映された第2期（通称新ルパン）で、ルパンの着ているジャケットの色が変わっている。また、大人向けジャンルという新たな作品を模索した第1期と、再放送人気に応え、メジャー性を意識して制作された第2期では、作品の方向性も違っており、5話ではその作品性の違いを「ジャケット」に即してネタにしている。

【＊9】『コンティニュー』第50号（太田出版）にて掲載。

題の最終回で、宮崎さんの仕掛け方は、やっぱり面白いと思うんですよ。第1期のスタッフが第2期に対して、一種の全面否定みたいなことをやっている。しかも最終回だから、もう反論のしようもない。そういうことに、後で気付くとと、「おお、すごい！」とか思って。第1期と第2期を、決定的な対立軸かなと思って観ると、また面白いと思うんですよね。

貞本　また『マモー（『ルパン三世　ルパンVS複製人間』）』があるじゃない。第1期と第2期、両方に参加してた小林治さんと芝山（努）さんがやられてるヤツ。あれって「モンキー・パンチの『ルパン』はこうだ！」って、すごい意気込みで作ったらしいんですよ。だから、シリーズを通して観ても、一番、モンキー・パンチの『ルパン』に近いのは『マモー』だな、と思うし。

――第5話って、世代間対立の話でもあって、そこで『ルパン』を引っ張ってきたのは、どこまで意図したものなんだろうって、ちょっと疑問に思ったんです。

鶴巻　あと『フリクリ』では、赤と青っていうのを、重要な対立として使ってるんですよ。ハル子側は赤や暖色系なんですけど、対するナオ太側はいつも青で。

貞本　じゃあ、ナオ太の青はあれか。『ルパン』なのか。

鶴巻　いや、違いますけども（笑）。

貞本　だってカンチも、青から赤に変わるし（笑）。

鶴巻　まあ、そういうこともできるかなあ、と。あと第1話のときの「富野的なアレ」みたいのがみんなにウケたので、そういうネタをもう1回引っ張ってこれないかな、と思ったのはありますね。じゃあ、今度は宮崎さんしかない、って（笑）。

#6 フリクラ



STORY 巨大ロボットは手の形のまま動きを止めた。一見、平穏を取り戻したかのように見える疎瀬市。ナオ太は、学校にも行かず、ハル子と家出中。一方、前回の騒動で壊れた破片のひとつと出会ったマミ美は、その機械を「タックん」と名付け、復讐を始めるのだった。だが彼女は知らなかった、タックんが巨大な手を動かすターミナルコアだということを。暴走を始めたタックんが巨大な手と合体したとき、クライマックスが訪れる。

―さて、いよいよ第6話「フリクラ」ですが、ミヤジュン先生がいい感じですね（笑）。

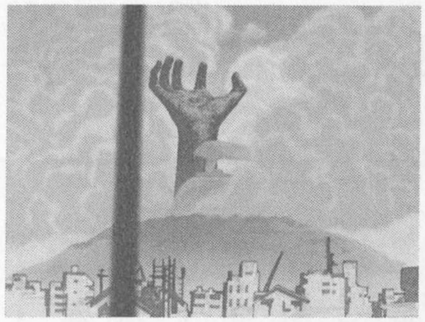
鶴巻　ミヤジュンのキャラを、平松さんがすごく頑張って膨らませてくれたんですね（笑）。

貞本　（ガクの「先割れ」発言を聞きながら）これはやっぱりエロワードなんですか？

鶴巻　まあ、そうですね。ここはもう榎戸さんお得意の（笑）。

貞本　微妙なエロ（笑）。

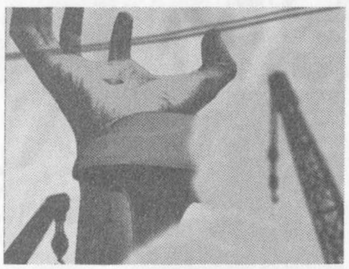
鶴巻　言葉だけ聞いてると、エロいこと言ってるのかな？っていう。先っぽがどうこう、みたいなね（笑）。



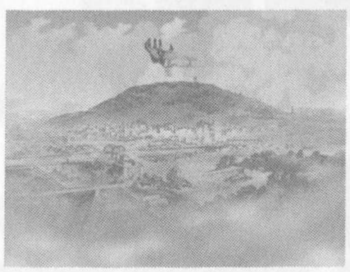
#6-C020　01:13



C021　01:19



C025　01:32



C026　01:36

―この手は誰なんですか？

鶴巻　これは……。

貞本　自分で撮ったんじゃなかったっけ？

鶴巻　えっと、第5話のときは高村くんの手だったんですけど、第6話は僕ですね。最初は、これまで高村くんには顔も出してもらってるし、「写真でアニメに参加するアクター」

として（笑）、高村くんにお願いしてたんですよ。でも、どうも僕が思ってる手になってくれなくて（笑）。「こうだよ、指の付け根をそらすんだよ！」とか。

――あははは（笑）。

貞本　手タレ失格だったわけですね。

鶴巻　撮影現場で「これくらい、できるでしょ！」「できません」って、結局、僕がやることになったんです。

――（アマラオにキツルバミがドリンクを渡される）ここは何を飲んでるんですか？

鶴巻　これは単にスポーツドリンクですよ。

――ああ、キツルバミは間接キスにビビってるのか。

鶴巻　まああアマラオのことだからものすごく甘い、甘すぎるくらいのスポーツドリンクだったのかもしれないけど。



#6-C044　03:03



C045　03:04



C046　03:09



C048　03:12

鶴巻　これは、スズキの蘭っていうスクーターです。



貞本　でも、音はベスパなんだよ（笑）。同じ音入れちゃいかんだろうって。

鶴巻　まあまあ（笑）。蘭って、俺の中ではヤンキーが乗ってるバイクなんだけど、これを作ってるときにはもう売ってなくて。誰だっけな、制作の人の近所に停まってるっていう話があって、その写真を撮ってきて、資料にしたんですよね。

貞本　漢字で「蘭」って描いてあるんだよね。

鶴巻　ここ（橋下のマミ美と小さなメカ）も大塚さんですね、うまいなあ。タッくんが出てくるところとか、すっごく可愛い。

貞本　（下校途中のナオ太とアマラオ）この、土管の上にいるっつうのがすごいな（笑）。

鶴巻　ここのコンテは平松さんですね。

貞本　なんで（アマラオは）上にいるんだろ？（笑）

鶴巻　しかも土管がピンクっていう。美術がわりと勝手にやってることですね。ピンクの土管って何だよと思うけれども（笑）。

――コンテは、鶴巻さんと平松さんが分担して？

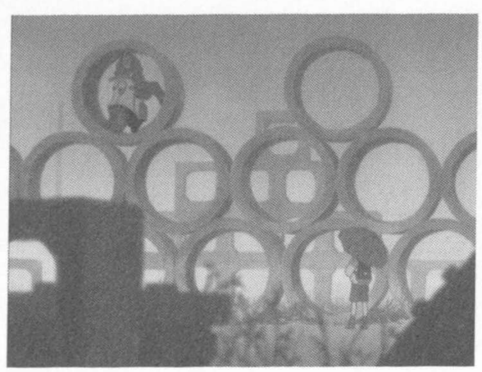
鶴巻　そうですね。最初は僕が全部やる予定だったんだけれども、脚本が遅れてたんで、完成していた前半部分は、平松さんにも手伝ってもらったんです。冒頭のお箸のところと、今のシーンを平松さんにお願いして――このへん（陸橋の下のマミ美とタッくん）もそうかな。結果的には1／3ぐらい、平松さんがコンテやっています。

――マミ美って暗いですよね、いうまでもないことですけど（笑）。

鶴巻　まあ暗いですね。

貞本　メチャ暗いですよ。

鶴巻　吾妻ひでおさん【※1】のマンガに『海から来た機械』っていう作品があるんですけど、主人公の女の子の欲望――自分では意識してない無意識の欲望まで、機械が見透かし



【＊1】50年、北海道生まれ。マンガ家。60年に『まんが王』でデビュー。ときにシュールとも評される作風とSFガジェットを盛り込んだ内容を得意とし、『週刊少年チャンピオン』に連載された『ふたりと5人』（72年）がヒット。不条理マンガと呼ばれるジャンルの生みの親でもある。一時期絶筆状態にあったが、自身の失踪、アルコール依存症の体験を描いた『失踪日記』（95年）で再び注目を集めた。

て行動を起こしてしまう。で、主人公の女の子はそれで困ってしまうんだけど、でもそれは、女の子が無意識に考えてたことだった、みたいな作品で。ああいう感じにならないかな、っていうのは考えましたね。最初、マミ美は、自分をいじめてた相手に仕返しができれば、それでよかったんだけど、その欲望がどんどん肥大化して、街を壊すところまで行ってしまう。



#6　07:38


08:45



08:50


C108　09:00

——ここも、第1話と同様に……。

鶴巻　今石くんですね。ここはもう、今石くんにお任せです。コンテも描いてないから、完全にお任せですね。

——で、途中で息切れする、という（笑）。

鶴巻　「疲れてきたので、間に合わなくなってしまいました」という演出です（笑）。

——自己言及が極まってますよね。

貞本　ここ（顔を近付けて睨み合うナオ太とカモン）、すごいね。



鶴巻　いいですよね。たぶん、CGでこう、ちょっと湾曲したものに、貼りつけて動かしてるんだと思うんですけど。

――えー、ちょっといいですかね。

鶴巻　はい。

――急に話をまとめに入ってる気がしなくもないんですけども（笑）。このシーン（自室でハル子に抱きつくナオ太）まで気付かなかったんですけど、ナンダバ家っていうのは、いわゆる父子家庭なわけですよね。で、ナオ太はハル子に母親のイメージを投影してる。

鶴巻　いや、そこははっきりと違いますね。ハル子に母親を投影しているという描写なのなら、母親の不在をもっと描きますよ。

――う〜ん……。

鶴巻　逆に、母親もいる家庭にハル子が入ってくる、っていう状況を描けばいいのかもしれないんだけれども、それは難しかったんですよね。そういう構図としては、なかなか描けなかった。おそらく『うる星やつら』が、ちょっと特殊なんだろうなって思うんですよ。あたるには母親も父親もいて、そこにラムちゃんがやってくる。あれはあれで、上手くいってるんだけれども、おそらく他の作品で、こういう状況――突然、女の子が自分の家に押しかけてきて、ひとつ屋根の下に住むことになります、って状況が描かれるときは、たぶんひとり暮らしをしてたり、母親がいなかったりっていう仕掛けになってると思うんです。だから『フリクリ』も、母親を最初から排除する。母親には一切触れない話として描こうと思っていた。

――うん、だからこそ、このシーンが重要だなと思うんですよね。これまでハル子は、ナオ太にとって恋愛の対象だったと思うんですけど、この第6話から一気に身近な存在になってる。それは、一度別れたからだっていう原因があると思うんですけど、これまでの見



え方から一歩踏み込んだ感じがあるんです。

鶴巻　最後に、ナオ太はハル子に「好きです」って言っちゃうわけだから、この段階でもナオ太はハル子のことを母親代わりだなんて思ってない。もちろん、前話とくらべて、ナオ太の気持ちに変化はあります。それは、より素直になり始めた、というか、自分でも隠していることに気付いていなかった、本当の気持ちに、気付き始めている、ということです。

貞本　逆に、ハル子はナオ太のことをどう思ってたの？　最後には「まだ子供だから」って言ってるわけだけど、このシーンの段階だとどうなの？

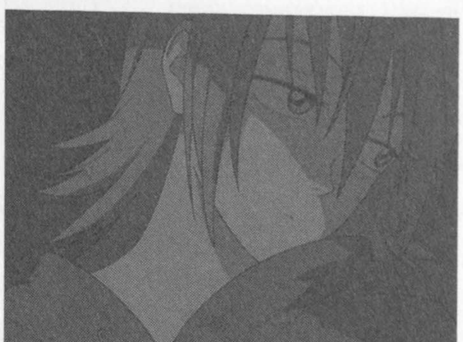
鶴巻　少なくとも好意は持ってると思うんですよ。ただし、あくまで彼女にとってナオ太は道具であって、自分がアトムスクを手に入れるためのツールなんですよね。

――で、このシーンの最後に、醒めた顔が入る。

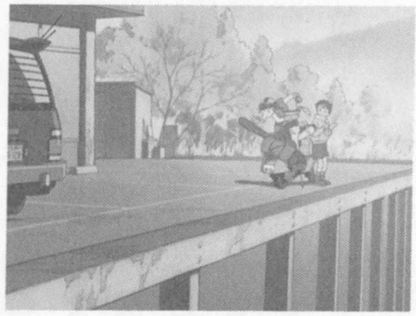
鶴巻　だから、ここでちょっと優しいことを言って、ナオ太を手懐けてはいるんだけれども、一方で、彼女は醒めている。ナオ太は抱きついてハル子の顔を見てないんだけど、そのときハル子は、すごく醒めてるっていう描写になるんだけれども。彼女にとってはアトムスクを手に入れることが何より重要なんですよ。優しさや情けのために、もっというならヒューマニズムのために、自分の欲望を犠牲にすることはありえない。それは、より過酷にナオ太を利用しない限り、アトムスクは手に入らない、ということでもある。

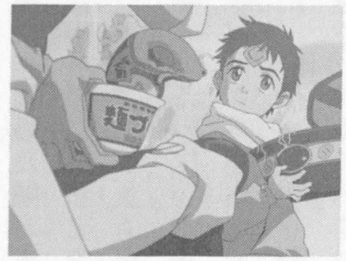
――それが、第5話の一件でわかったわけですね。

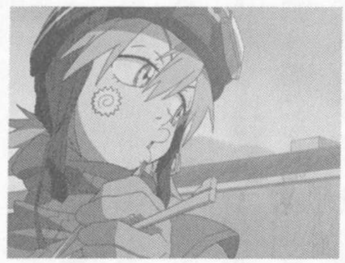
鶴巻　ハル子の本音がどこにあるのかっていうのは、僕もハッキリと決めずに描いてるんです。ナオ太がどう理解しているかっていうレベルでしか、わからない、僕自身もハッキリとは決めてないっていう。だからハル子はわりと、フリーハンドのままというか、ナオ太がわからないところは、僕もなんとなくしか決めてない。それでいいや、と思って描い



てるところはあるんですけどね。だからといって、ハル子が陰謀めいた悪巧みをしているとは、考えていません。おそらく、彼女は誰かを騙そうなんて考えないし、その必要もないんでしょう。


#6-C183　14:29


C184　14:38


C185　14:41


C186　14:44

貞本　麺づくり。

——あははは（笑）。

貞本　麺づくり食いながら、マズいラーメンの話してる（笑）。

鶴巻　いやいや、麺づくりは美味しいほうだから！

貞本　そうかそうか、美味しいほうか（笑）。

——ウィダーinゼリーはタイアップでしたっけ？

鶴巻　ウィダーinゼリーも、結果的にはタイアップにならなかったんです。というか、ベスパだってリッケンバッカーだって全然タイアップでもなんでもないですし。

貞本　小物をね、わりと有り物を出そうっていうのが最初コンセプトとしてあったんだよ

ね。

鶴巻 カメラも、そうだし。

貞本 しかも趣味性を出していこうと。好きなものしか描かないっていうね（笑）。（タッくんと街を徘徊するマミ美の様子を観て）マミ美が、どんどん黒くなっていくのは計画通りなの？

鶴巻 心が黒くなってるってわけではないですけど、イヤな記憶を復讐メモにつけて、1個ずつ実行しようとする……みたいなところは、もともとそうですね。

――（翌朝のシーン）すごい、顔が悪くなってる（笑）。

鶴巻 あははは、これは悪くなってるっていうより、疲れてるって表現なんだけど、なんかヤサグレて見えるよね（笑）。寝ずに一晩中復讐を続けてたんだ、って。

貞本 ここ（ガクたちに見つかるマミ美と暴走するタッくん）、マミ美の表情の変化がいいなあ。

鶴巻 一瞬、悔しそうな顔をするんですよね、クッて。

貞本 クッとなった後にハッとなる。ここは、すしお？

鶴巻 芳垣かなあ……。ちょっとわかんない。

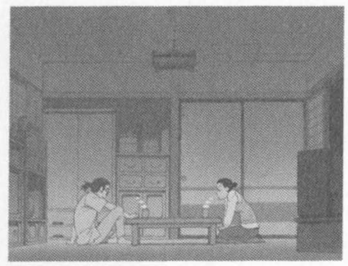
貞本 すしおか芳垣の絵だよね。





#6-C234　18:22


C235　18:27


C236　18:32


C237　18:50

―ここの車のナンバーは？

鶴巻　これはなんだっけな……。全然、覚えてない。

―あ、福井だ。291で福井だ。

貞本　福井（裕佳梨）さん【※2】か。

鶴巻　そうだったのか！（笑）。平松さんの仕業かな。（応対するカモンを見ながら）『エヴァ』の碇ゲンドウのせいで、メガネといえばオレンジって、もう凝り固まってるなあ（笑）。

―で、巨大化したタックんと遭遇するという。

鶴巻　全部、セリフで説明しちゃってるな（笑）。しかも、カンチはどこにいるんだと思ったら、こんなところにいたっていう。

貞本　緑のおばさんになってる。

鶴巻　都合よく、全部一瞬で説明しちゃうんだもんな。

貞本　引っかかって取れないっていうの、すごく好きだよね。

鶴巻　好きですね。しょっちゅう使いますよね。



【＊2】神奈川県出身。タレント・声優。デビュー当初はグラビアアイドルとして活躍し、00年には「日テレジェニック」に選出。それと前後して、98年には『彼氏彼女の事情』で声優としてデビュー。『フリクリ』に続いて『トップをねらえ2!』では、主役のノノを演じるなど、鶴巻監督作品の常連でもある。

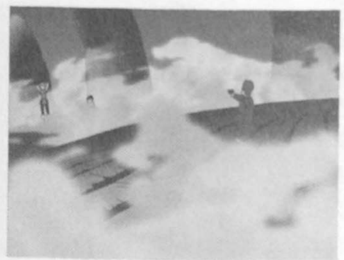
貞本　『トップ2!』の第1話でもやってたし、これの第1話でもやってたしね。

——自分の意図じゃなく、巻き込まれてるってところがいいんでしょうね。

鶴巻　そうかもなあ。自分からは動かないから、何かに巻き込まれたいっていう（笑）。


#6-C279　20:50


C280　20:55


C281　20:57


C284　21:22

貞本　これはカッコいいです。いいなあ。

——で、ターミナルコアがスポッとハマるっていう。

鶴巻　ここもワケわかんないな（笑）。

貞本　ホントに説明しないよね。「ワケがわかんないから宇宙人なんだ」っていう。

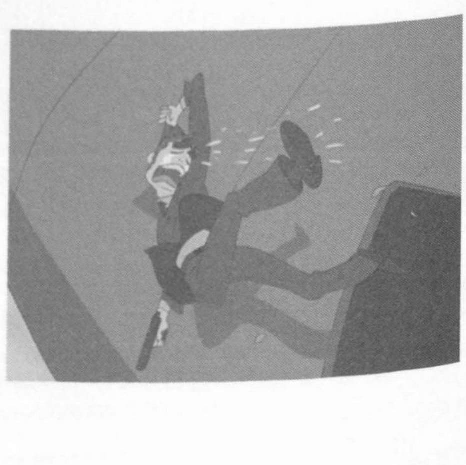
鶴巻　そういう宇宙人が好きです。人間に理解できる程度なら、宇宙人でなくていい。

——アトムスクの設定というのは貞本さんなんですか？

貞本　変身した後はそうですね。

鶴巻　変身というか、最後に出てくるアトムスクの正体は、貞本さんのデザインですね。

貞本　前半の、アマラオのイメージの中に出てくるのは、僕じゃないですね。後半の、鳥



人間みたいなヤツは僕です。

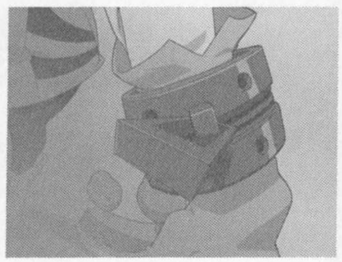
鶴巻　あれは、あくまでアマラオの想像上のアトムスクであって、彼は資料や噂話としてしか、アトムスクを知らない。



#6-C319　23:26



C322　23:37



C323　23:38



C324　23:39

貞本　カッコいい！　気持ちよさだけでいくっていう感じですね。ちょっと顔がナルトっぽいけど（笑）。

鶴巻　ここは、誰だったっけな。

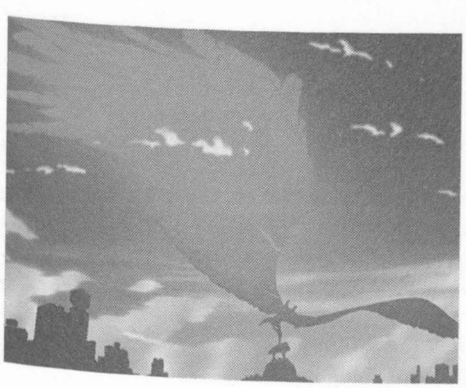
――アトムスクが鳥になったのは、鶴巻さんからのオーダー？

貞本　とんでもない力の鳥人ということだよね。

鶴巻　そうですね。宇宙人で、とんでもない力の持ち主みたいな感じのイメージで。あまり、普通の人間にしたくなかったんですよね。

貞本　人間じゃ、つまんないから。

鶴巻　ハル子はずっとアトムスクを求めてる。でも、それが単純な恋愛関係になっちゃう



のはダメなんだ、とはずっと思っていて。もちろん、そういうふうに見えるフェイクをかけてるわけですけど。

貞本　でも最初に設定を聞いたときはカンチ――ってことは、つまり『東京ラブストーリー』なわけですよね。だから、アトムスクは男で、昔は相棒だったんじゃないか、みたいな話もしたよね。

鶴巻　そうですね。最初はそういうつもりで進めてました。要するに、ナオ太はハル子のことが好きになるんだけれど、ハル子には最初から想い人がいる。そういう展開で考えてたんだけど、途中から、単純に男女関係にしちゃうと、ハル子のキャラが小さくまとまっちゃうな、と思うようになって。そこからもう少しズラして、ハル子はアトムスクを欲している、それは、同時にアトムスクの力を手に入れる、自分のモノにしてしまうということで。だからアトムスクは、あんまり男女の仲に見えないようなデザインにできないかなって思ってましたね。

貞本　あれは、どういう形で手に入れるの？

鶴巻　ハル子のセリフに「あいつを食うのは私なんだから」ってセリフがあるんですけど、「食う」っていうのはセックスの隠語でもあるけど、ホントにアトムスクを食べて、その能力を自分のものにしてしまえるんだ、と。未開部族のカニバリズムには、敵戦士の能力を自分のものにする目的がある、みたいのもあるので。宇宙人のハル子は実際に食っちゃうんだろう、と考えてます。

貞本　あんなデカいものを（笑）。

鶴巻　いやわかんないですけど（笑）。ほら今だと、沙村広明さん【※3】のマンガに『ハルシオン・ランチ』ってあるじゃないですか。ああいうことを考えてたんですけど。神林長平【※4】の『敵は海賊』に、アプロっていうネコ型の宇宙人が出てくるんですよ。で、

【＊3】70年、千葉県生まれ。マンガ家。94年、雑誌『アフタヌーン』の四季賞を受賞した『無限の住人』でデビュー。剣客集団に両親を殺された少女・凛と彼女の用心棒に雇われた不死身の男・万次の旅を描くこの作品は、現在まで続く人気連載となった。また対談中に登場する『ハルシオン・ランチ』とは、沙村が現在『good！アフタヌーン』で連載中の作品。

【＊4】53年、新潟県生まれ。SF作家。79年、『狐と踊れ』がハヤカワ・SFコンテストに入賞し、作家活動を開始。思弁的かつ独特のセンスを持った物語世界を展開し、大きな注目を集める。対談中に登場する『敵は海賊』は、シリーズ物の少ない神林作品の中では珍しい長期シリーズ。宇宙犯罪者たちを取り締まる海賊課の刑事、ラウル・ラテル・サトルとアプロのコンビの活躍を描く。

アプロは人を食うんですけど、そのときの食べ方っていうのが、ヒュッと吸い取るように食べちゃう。

——丸呑みにするわけですね。

鶴巻　生命体をエクトプラズムみたいに変化させて、それを喰らう、って描写があって。『フリクリ』は神林長平リスペクトアニメなので（笑）、ハル子もそうするもんだと思ってました。

貞本　なるほどね。

——ちょっと話を戻すと、もともとのオーダーが鳥だったんですね。

貞本　うん、人じゃないほうがいい、っていう。

鶴巻　神様っぽいイメージもあったんですよね。例えば『グイン・サーガ』【※5】みたいに、人じゃなくてもいいやっていう。なんかこう、エジプトの神様みたいなイメージもあったかな。

貞本　ああ、エンキ・ビラル【※6】だ。そういうイメージもありますね。

——誰の手にも届かない存在、っていう。アマラオのイメージの中では、すごくマッチョな男の人なんだけど、実際にはもっと超然とした存在だっていう。

貞本　ハル子は当然、知ってたんだよね。

鶴巻　うん。ハル子は一度、捕まえたことがあるんですよ。で、その後、逃げられたか、メディカルメカニカに奪われた。だから、ハル子が手首にしてる鎖と、アトムスクの鼻のところにある鎖は、繋がってたんだっていうことなんですよね。だから、ハル子の腕輪は、アトムスクに反応するんです。

【＊5】79年から刊行が開始された、栗本薫によるファンタジー小説シリーズ。刊行当初から全100巻という壮大なスケールで構想、執筆が進められていたが、100巻では物語が完結せず、現在のところ正伝が130巻、外伝が21巻という長大なシリーズになっている。また、作者の栗本が09年に死去。未完結作品となった。

【＊6】51年生まれ、フランスを代表するコミック（バンド・デシネ）作家・映画監督。ファンタジックな内容としっかりしたデッサン力に支えられた作風で、一世を風靡。対談中で触れられているのは、彼の代表作のひとつである『ニコポル三部作』のこと。

EPILOGUE



――というわけで全6話、休憩も含めて5時間以上の取材になったわけですけども……。

貞本　聞いても、やっぱりわからなかった？（笑）

――いや、スッキリはしてるんですけど。

鶴巻　まあ、ここで謎解きをしてもしょうがないよね。

――謎解きをしてどうなる話でもないよな、と改めて思ったんですけども、久しぶりに観直してみて、いかがでしたか？

貞本　いやあ、やっぱり面白いですよね。こんなアニメはなかったと思います。もっといっぱい観たいですよね、この手のやつを。

――どういうところがよかったんでしょう？

貞本　理屈がありそうで、なくて、やっぱりある、みたいな感じですよね。裏の裏の裏みたいな感じで。それでいながら、やっぱり青春モノでもあって。受け取る人によっていろんな受け取り方があるっていう意味では『エヴァ』と同じなんだろうけど……。ガイナックスにいると、庵野さんだったり山下（いくと）くん【※1】だったり、ロボットが好きな人が多いんで、なかなかメカデザインってできないんですよ。そういう意味では、初めてロボットのデザインをやれて、そこも気に入ってます。なんていうんですかね、小物に現実にあるものを使うとか、そういう趣味性の部分も含めて、好きだなあって。

鶴巻　そういうところも、『ルパン』の第1期っぽいところがありますよね。

貞本　出てくる車は「車」じゃなくて、アルファ・ロメオとかルノーだったりする。実在しているモノには銘柄がある、それをちゃんとやろう、っていう。『フリクリ』も、そういう部分をちゃんとやりたいっていうのがあった。

鶴巻　どこまで伝わるかはわからないんだけれども、やっぱりアルファ・ロメオに乗ってる人とカローラに乗ってる人では、キャラクターが違うよな、と思うわけですよ。この人

【＊1】65年生まれ。マンガ家・デザイナー。『新世紀エヴァンゲリオン』や『ふしぎの海のナディア』のメカデザインで知られる。また、05年に制作されたOVA作品『戦闘妖精雪風』では、メカニカルデザインのほか、演出・脚本も担当している。

はクラウンじゃなくて、やっぱりアルファ・ロメオだよね、みたいな。
貞本 ただのギターじゃなくて、リッケンバッカーじゃなきゃダメだよね、とかね。
鶴巻 それは『ルパン』もそうで、宮崎駿さんはたぶん、貧乏車に乗ってる泥棒じゃなきゃダメだったんですよ。だから、ルパンはフィアット500に乗ってる。原作通りに泥棒がベンツに乗ってたら、宮崎さんはルパンのことを愛せないんだろうなって。
貞本 なんでも盗める人は、きっとお金に興味がなくなっていくんじゃないかって考え方らしいんですよね。なんでも盗める人は、高級車には乗らないんじゃないの、っていう。むしろイタリアの、誰でも手に入れることのできる大衆車——だけど、屋根が開いて自由な感じもある車で、っていう。『フリクリ』って、時代による影響ってあるのかな？　当時だからこそ描けた、みたいな。
鶴巻 マミ美のキャラクターなんかには、明らかにあると思いますね。マミ美を今描いても、理解されないかもなって。
貞本 ああ、イジメっていう言葉自体が……。
鶴巻 それもあるし、女子高校生の魅力みたいなが、今はもうちょっと相容れなくなってるかなって。当時、庵野さんも『ラブ&ポップ』【※2】を作ってるわけだけど、ああいう感じはもうないかなあ、と。
——今の女子高校生を描くとしたら、もうちょっとタフになるかなあ、とは思います。
鶴巻 まあ、あんまり「無国籍！」ってものでもないしね（笑）。
貞本 でも、俺はこれ、去年作られたって言われても、別に不思議はないなあって思っちゃいますけどね。
鶴巻 アニメーターの技術力が高かったり、色のセンスが今でも古びていない、みたいなことは重要かな、と思いますけどね。画面を観てても、古いとは思わない。携帯電話くら

【※2】96年に刊行された、作家・村上龍の小説。当時、社会問題化していた援助交際を題材に、女子高生たちの生の問題を描いた。庵野秀明監督により、98年実写映画化もされている。

いかな。まあ、もともとベスパだったり、三輪車が出てきたりして、時代性がよくわからないっていうのはあるけど（笑）。特に三輪車が出てくると、もはやレトロSFにしか見えないっていう。

貞本　そもそも、地球に見えないもんね（笑）。だから当時「いつの時代なの？　ここどこなの？」って聞いたら、たしか「火星だ」って話を聞いた気がする。それは、制作をしてて最初に思い浮かぶ疑問だったから。でもさ、だとしたら、地球はどうなってるの？

鶴巻　地球は、ナオ太の妄想の中に出てきてますけど、アイロンで平らにされちゃってるんですよ。だから、もう人も住めなくなってる。で、これは火星の物語で、火星はまだ自治権を持ってて、メディカルメカニカとフラタニティの間で、なんとか生き残ろうとしてる。そういうのを設定としては用意してて、最終的にはそこを描こうかなと思ってたんですけど、「まあ、いいか」って諦めちゃった（笑）。

——諦めちゃったんですか（笑）。あ、野球チームのユニフォームに「火星」って書いてあるのは、そこから来てるのか。

貞本　空が黄色いしね。だから『トップ2！』を観たときに、鶴巻はなんとか火星であることに意味付けしたいんだな、って思ったんだよね。またフラタニティを出したりとか（笑）。

鶴巻　まあ、それは考えてやってたことじゃないですけどね。神林長平の小説に『あなたの魂に安らぎあれ』【※3】って作品があるんですけど、舞台が火星として書かれているんだけど、実はそれが地球だった、というオチで。だから多少、村上春樹【※4】っぽいというか。村上春樹の世界も、普通の日本の街のように見えるんだけど、でもリトルピープルみたいのが出てきたり、月がふたつあったりする。そういう感じですね。

貞本　『花男』【※5】もそうだよね。昔の、レトロな日本が舞台なんだけど、なんだかよく

【＊3】83年、書き下ろしで刊行された、神林長平の初長編小説。核戦争後の放射能汚染により、地下に閉じ込められた火星の人間たち。一方、地上はアンドロイドたちによって、華やかな都市が築き上げられていた。だが、アンドロイドたちの間にはまことしやかな神話が伝えられていて……。「私とは何か」を徹底して問い続ける、神林を代表する一作。



わからないペンギンがいたり。

鶴巻 あとクジラが空を飛んでたり。なんかそういう、ちょっと絵本というか童話、寓話っぽい世界みたいな感じが、僕も榎戸さんも好きなんですよ。リアリティを追究して、これは渋谷です、みたいな感じにしちゃうと、寓話の感じはなくなるな、って。むしろ観た人がみんな「これは自分の街だ」と思ってくれたほうがいい気はしますね。名古屋の人でも、秋田の人でも。

貞本 川の感じとかは、すごく名古屋っぽいんだけど。

鶴巻 そうですね。これは、平松さんの田舎である豊橋の感じもあるし、僕の田舎の新潟っぽい感じもあるし。それこそ『王立宇宙軍』を見たときに、あの街はすごく新潟っぽいと思ったんですよ。

貞本 まあ、日本海が遡っていってたからね。

鶴巻 うん、それもあるし、なんかね、街の感じもそう。シロツグたちがアーケード街みたいなところを歩くじゃないですか。あそこの雰囲気とかも。

貞本 あれはディズニーランドだよ。

鶴巻 えっ、そうなんですか？　すごい新潟の街っぽいと思った。商店街としては大きいんだけど、新宿とか渋谷とかほど栄えてもいない感じ。

――抽象度が高いと、人は自分が知ってる風景なり経験なりを当てはめやすい、というのはありますよね。

鶴巻 でも、とはいえ『アンパンマン』まで、抽象的にはしたくないっていうのがあって（笑）。コンビニとか橋みたいなところには、すごいリアリティがほしいんだけど、全体の組み合わせとしては、新潟にも豊橋にも埼玉にも見える、ぐらいの感じというか。だから、ランドマーク的なものは、もっと描きたいみたいな話をしてましたね。堤防の用水路とか、

【＊4】49年、京都府生まれ。小説家。79年、群像新人賞を受賞した『風の歌を聴け』でデビュー。アメリカ文学からの影響を多分に受けた作風で、当時デビューしたばかりの村上龍と並んで、新世代を代表する作家と目される。87年には『ノルウェイの森』がベストセラーとなり、以降、新作を発表するたびに注目を集めるように。

【＊5】松本大洋が01年に発表したマンガ作品。長嶋茂雄に憧れる30歳の"野球小僧"花田花男と、彼の息子・茂雄、まったく正反対な2人の絆を描いた作品。

メディカルメカニカのデカい工場とか。そういうランドマーク的な建物をどうするかは、結構考えました。

——鶴巻さんは、観直してみていかがでしたか?

鶴巻　一番表現したかったのは、この雰囲気なんだよね。空気感というか、「こういうアニメ」なんですよね、やっぱり。だから、具体的にテーマはどうこうとか、キャラクターがどうこう、みたいな話をされると、どこか抜け落ちてしまうというか。それは表現したいことの一部分なのであって、っていう。

——作品全体が持ってる、ある「感じ」ですよね。

鶴巻　こういうアニメはないなあと思って、だからこそ作ってみたかった、というのはありましたね。最初に話したように『ヤンマガ』的な青春のネガティブさも含めて描くような青春アニメはあんまりなかったかなと思うし、シリアスなカットの次で、突然ギャグになっても、まだシリアス感情は残ってる、みたいな演出だし。あるいは音楽にしても、ボーカル曲はセリフが上に乗らない——人間の声同士が被っちゃうからダメ、っていうのはセオリーとしてある。でも、普通のドラマではわりとやってることなわけで、それは全然やってもいいんじゃない?とか。別にドラマに限らず、『機動戦士ガンダムⅡ 哀・戦士編』【※6】でも、クライマックスシーンではボーカル曲の上で、ドラマというか散文的なセリフが普通に乗ってて、それでも全然カッコいいシーンとして成立してるし。

貞本　音楽の使い方も独特で、なかなかないなあと思いましたね。ひとりのミュージシャンをフィーチャーしてね。

鶴巻　最初は、カッコいいイメージとカッコいい音楽に乗っけて、戦闘シーンをやればそれでいいんじゃないか、って思ってたんですよ。でも途中からだんだん主旨が変わって、わりとピロウズの曲自体、青春のネガティブさみたいなことを描きながら、それが日常で

【＊7】演出家。大阪芸術大学を卒業後、実写映画でキャリアを積み、スタジオジブリに入社。『平成狸合戦ぽんぽこ』(94年)、『耳をすませば』(95年)では監督助手を務める。その後、『新世紀エヴァンゲリオン』に演出として参加。以降、ガイナックスを中心に活動を続ける。『フリクリ』では、第1・4・6話の演出を担当。

あるし、僕自身なんだ……みたいな歌詞で。その歌詞と、劇中のマミ美のドラマとか感情みたいなものが、相乗効果でさらに一個レベルが上がる、というかね。

――今回、改めて観て思ったのは、普通の作品は明快に目標があると思うんですよね。ここをクリアすればＯＫ、みたいな基準がある。でも『フリクリ』は、それがない感じがあるんですよね。だから、過剰なところはすごく過剰だし、語ってない部分に関しては、まったく語られていない。

鶴巻　そうですね、スタッフとしてはそうやるしかなかったかもな、とは思います。これはたしか、演出をやってくれた大塚（雅彦）さん【※7】に言われたんですけど、「『フリクリ』は何をしたいんですか」と。「何をどこまでやればいいんですか」って聞かれたんですけど、例えば『エヴァ』は直球勝負をしてるんですよ。要するに、コースはど真ん中の誰も打ち返せないような豪速球を投げ込んで、勝つ、っていうのが『エヴァンゲリオン』というか、庵野さんのやってることなんです。でも『フリクリ』は、球は遅くてもいいから、あのコースに球を投げたい。「外角低めじゃなきゃダメなんだ！」っていうのが『フリクリ』だったのかな、って。１７０キロの豪速球が投げられるんなら、ど真ん中でも三振が取れるっていうのが、『エヴァンゲリオン』のやり方だとすれば、僕がやりたかったのは、外角低めの一角に擦るようにチェンジアップ、そこに投げられれば僕の勝ちだ、っていう（笑）。

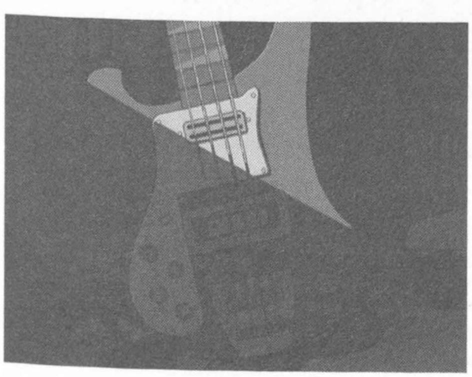
――ああ、なるほど。わかる気がします。

鶴巻　だから、それが１５０キロだろうと90キロだろうと、僕にとってはどちらでもいいんですよ。遅い球でもあの一角にボールを放り込めたら、バッターは手が出ない。それが『フリクリ』だった。僕のアニメの作り方だったってところはあると思う（笑）。

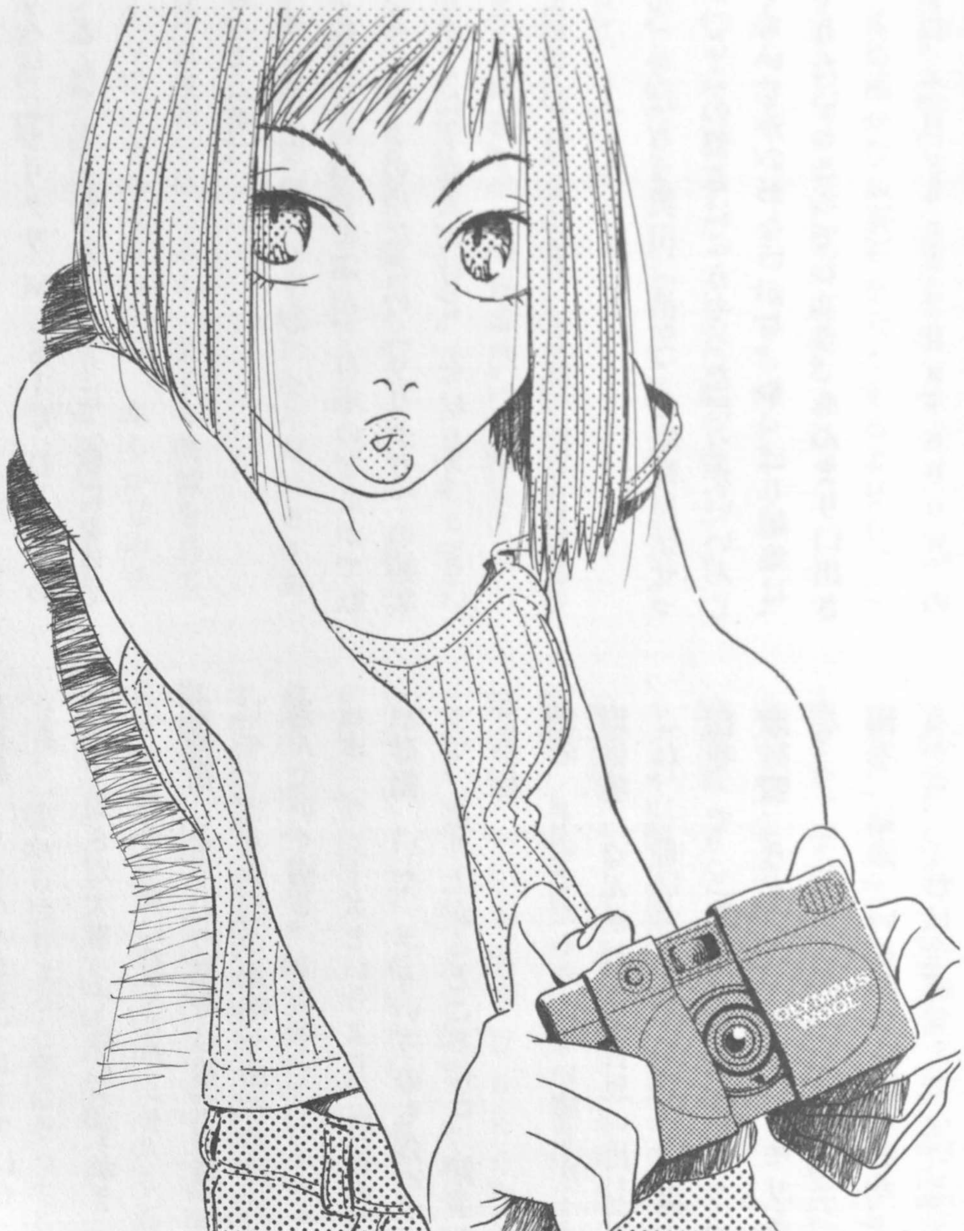
貞本　ああ、じゃあストーリーでもテーマでもなくて、この雰囲気がすべてだったってこと？

【＊7】演出家。大阪芸術大学を卒業後、実写映画でキャリアを積み、スタジオジブリに入社。『平成狸合戦ぽんぽこ』（94年）、『耳をすませば』（95年）では監督助手を務める。その後、『新世紀エヴァンゲリオン』に演出として参加。以降、ガイナックスを中心に活動を続ける。『フリクリ』では、第１・４・６話の演出を担当。

鶴巻　うん、ホントにこの雰囲気だったんですよね。だから、この雰囲気さえ出せていれば、もっとシリアスな描かれ方をしていてもよかったし、もっと全体的にドタバタしててもよかった、っていう。色も、場合によっては、もっと別の色使いでもよかった。でもまあ、全部が揃って、あの雰囲気を出してるっていうのはありますよね。
貞本　その雰囲気を一言でいうと何なの？
鶴巻　それが一言で伝えられなかったから、こうなったとしかいえない（笑）。
貞本　それは難しいな（笑）。
——もし、同じことができるとしたら、もう一度やってみたいと思いますか？
鶴巻　もう、やりたくてもできないだろうと思いますけどね。このワケのわからなさみたいなものを、当時の僕がどれくらい自覚してたかを考えると、今だったらもう少し、なんとかしようとするだろうなって思う。その結果として、普通のアニメになっちゃう可能性はあるよな、と。
貞本　もうちょっと客を見ちゃうかもしれない？
鶴巻　もっとわかりやすくしようとして、結果的に丸くなっちゃう、のかも。それを気にしていないから『フリクリ』はある種、突き抜けてたというか、そういうことだったんだろうな、と。言葉にはできない、簡単には伝えられない何事かを、なんとか表現してやろうとしてたんだ、って思います。



BONUS TRACK



特別ゲスト：摩砂雪

──1961年、長野県生まれ。スタジオジャイアンツに入社。その後『王立宇宙軍』よりガイナックス作品に参加。『ふしぎの海のナディア』『新世紀エヴァンゲリオン』『フリクリ』、さらには『ヱヴァンゲリヲン新劇場版』など数多くの作品で鶴巻・貞本両氏とタッグを組む。対談中にもあるように『フリクリ』では絵コンテ（第2話）、原画、エンディング、さらには『MUSIC DVD』の編集などを担当している。

――ここからはボーナストラックということで、ゲストに摩砂雪さんをお迎えして、お話をうかがいたいと思います。摩砂雪さんは、『フリクリ MUSIC DVD』の編集をやられてるんですよね。久しぶりにご覧になっていかがですか?

摩砂雪 ……若いねえ。

鶴巻 若いねえって(笑)。

貞本 仕上げた後は観てない?

摩砂雪 うん、観てないね。たぶん、自宅のどこかで転がってるハードディスクの中にこの『フリクリ』の編集プロジェクトがあるはずなんだけど。今はもう、こういう仕事もやらなくなっちゃったからなあ。

鶴巻 若いっていうのは、今はもっとゆったりしてるってことですか?

摩砂雪 うーん、今はもう奥田(浩史)と庵野に任せっきりだからね。「ここの繋ぎはこうやったほうがいいんじゃないの?」ぐらいしかいわないから。やっぱり編集は、総監督の一番やりたいところでしょう。あんまり口出さないほうがいいよなあって(笑)。

鶴巻 そうですね。(『Hybrid Rainbow』のPVを観ながら)一応、理屈はあるんですか? カットを選んでる理屈は。絵的なものだけなのか、それとも色とかを基準に選んでるのか。

摩砂雪 うーん、まずフレーズに合った動きを選ぶのかなあ。

鶴巻 動きが大事って感じですか? 右から左に動くとか、手前から奥に動くとか……。

摩砂雪 そういう部分は後で調整してくんだけど、まずはやっぱり歌詞の意味や曲の雰囲気に合わせてカットを選んでいく感じ。

貞本 フレーズというより、音符の進行具合ってこと?

摩砂雪 いや、そういうのも含めて全部。詞だけじゃなくて、盛り上がるところには、派手な画を当ててみようとかね。

鶴巻 そのこだわりのない感じが……(笑)。

摩砂雪 なんか観てると思い出してくるね(笑)。あっ、これ、一番はナオ太とマミ美で構成したんだよね。

鶴巻 で、二番はニナモリ縛り。

摩砂雪 うん、こっちはニナモリとなんかだった気がする。

鶴巻 結構、いろんな話数からカットを引っ張ってきてるから、これは全部覚えてないとできないな、って思いました。

摩砂雪 いや、だから全話観たよ、俺! 音だけ抜いた

やつ（映像のみ）をバーッて全部並べて。

鶴巻 観ただけじゃなくて、おそらくカットを全部覚えてないと、これはできない。大変だなあって。

摩砂雪 まあ、PVだからルールを云々するよりも、カッコよきゃいいんでしょっていうのはあるよね。

鶴巻 まあそうなんですけど、それでも何かしらのルールがないと大変じゃないですか。どんな絵を使ってもいいじゃん、ってことになると、かえって迷ってしまってできなくなるんじゃないですか。

摩砂雪 ああ、だから、まず最初に取り敢えず1回繋いでみるんだよ。そうすると、さっきみたいな感じに「一番はマミ美かなあ」とか見えてくる。で、そのキャラクターに関連しそうなカットを各話から引っ張って、挟み込んでみて、また確認しての繰り返しで。

鶴巻 全体が、少しづつできていく感じなんだ。とりあえず繋いでみて。

摩砂雪 あと、サビの部分はたぶん、派手な映像を当てたほうがいいよなっていうのはあるから、あらかじめチョイスしておいて。で、最後はやっぱり……あのハル子の彼氏の名前はなんだっけ？

鶴巻 アトムスク。

摩砂雪 そう、アトムスクが去って行くシーンを使おう、とかね。

鶴巻 庵野さんが『エヴァ』の予告編を作ってるのを見てたりすると、わりと「ここはエヴァンゲリオンのブロック」「ここはキャラクターを見せるブロック」みたいな感じで、ブロックごとに構成していきますよね。それに近いんですかね。

摩砂雪 うん、だから俺も総動員するよ。

——この制作期間って、どれくらいかかってるんですか？

摩砂雪 うーん……。かかったねえ、1ヶ月とか。

鶴巻 1曲で？

摩砂雪 『Come Down』と『Hybrid Rainbow』の2曲で、それぞれ2週間ずつくらいかかってるんじゃないかな。まあ、加工時のレンダリングも込みでね。

貞本 なんとなく絵を並べていって、あとはタイミングで何秒切る、みたいな感じで詰めていくの？

摩砂雪 いや、たいがいはまず一番を作るんだよね。まず一番を作って、サビにはこういう素材を使って、こういう繋ぎをかませばいいんだなって。それさえ見えてくれば、二番からはちょっと楽になってくる。

鶴巻 同じ仕掛けで。

摩砂雪 うん。まあ、まったく同じにしちゃうとつまん

ないから、さっきみたいに黒みを動かしたり、ギターのフレーズに合わせて波紋エフェクトを加工したり、中抜きやコマ数を変えてみたり、どんどん遊びを入れてくんだけど。でも、たしか当初、自分は「6曲分も無理だ」って言ったんだよね、素材が6話分しかないし。だから2曲だけにしてもらった（笑）。

鶴巻　そうですよねえ。

摩砂雪　奥田が編集したパートだって、被ってるところがいっぱいあるでしょう？　彼、大変だったと思うよ。

鶴巻　たしかに、しょうがないです。

摩砂雪　で、いいところの絵ってのは決まってるんだよね、ここところを使いたいっていうのは。しかし、もう10年前になるのかあ。

貞本　日本よりも、ヨーロッパの人気がすごいんですよ。ヨーロッパとかアメリカに行くと、『エヴァ』と並んで、サインを書いてくれって言われることが多い。

――アメリカは深夜のテレビでかなりのヘビーローテーションされてたんですよね。

貞本　ヨーロッパだと、『ナディア』と『フリクリ』がほぼ同じくらいで、あとはちょっと『エヴァ』がある感じ。

摩砂雪　『エヴァ』って、海外では人気がないんでしょう？

貞本　いや、イタリアは人気があるんですよ、なぜか。

摩砂雪　そうなんだ？

貞本　たぶんプロモーション的な問題だと思うんだけど。フランスに行ったときに、イタリア人がやってる店に入ったんだけど、「日本から来た絵描きだ」って言ったら「どんな絵を描くの？」って。そんで、エヴァンゲリオンの横顔描いて渡したんだけど、しばらくしたら、コックとかが3～4人ズラズラっと出てきて（笑）。「ホントに『エヴァ』やってんのか！」って（笑）。

――あははは（笑）。

貞本　「いや、僕、キャラクターデザインやってるんです」って言ったら「皿にサインしてくれ！」って。

摩砂雪　若いコックだったの？

貞本　うん、カッコいい兄ちゃんだったよ。最初に来た人は、そのお母さんだったみたいなんだけど。

摩砂雪　ああ、だからわからなかったんだ。

――摩砂雪さんは『MUSIC DVD』だけじゃなくて、『フリクリ』本編にも参加されてますよね。

摩砂雪　えっと……。原画も手伝ってるんだよね。第3話と、あと第5話もやってるよね。

鶴巻　あの街中で、スローモーションで銃撃戦してるところ。

摩砂雪　ああ、あそこ、あんまりよくないってところだ

って（笑）。それはそうだよ、ずっと外出てるんだもんね。

鶴巻 いや、ホントもう実写の制作は、アニメと違って、肉体労働だなと思いますよ。

摩砂雪 カメラに人が入らないようにするのが、こんなに大変なんだって。普通に歩いてる人が入ってもいいんだったらいいんだけど、コマ撮りじゃないですか。今だったらCGで消しちゃうけど。

鶴巻 確か、2話目か3話目から、消してるんですよね。スタンドが見えてるのを消してもらってる。

摩砂雪 そうそう。このベスパはまだあるの？ あの黄色いの。

鶴巻 ないですね。

摩砂雪 売っちゃったの？

鶴巻 売ってはいないですけど、ないです。

貞本 バイク屋に預けてそのままになってる（笑）。

摩砂雪 えっ、でも白いベスパにも乗ってるよね。あの黄色いのは何？ あの1台しかなかったの？

鶴巻 そうですね、もともとあの黄色はちょっと特殊な色で、あのバイクのためだけに塗られた色なんですけど。

摩砂雪 作ってもらったの？

鶴巻 いや、もともとあったやつを買ったんです。

貞本 180SSってすごい珍しいモデルなんですよ。

よね。

――いやいや、そんなことないですよ（笑）。

鶴巻 第2話のコンテもお願いしてるし。

摩砂雪 ほとんど直されてるんでしょ？

鶴巻 いやそんなことないですよ。結構残ってると思うけどな。

摩砂雪 いやいやいや。バリバリ、マッキー作品だよね。

鶴巻 あとエンディングも摩砂雪さんだし。そうだ、エンディングの撮影が大変だった話をしましょうよ。

摩砂雪 あははは（笑）、なんか延々撮ってたんだよね。

鶴巻 しかも寒かったんですよ、まだ春先の寒い時期で。

摩砂雪 でも、やってるうちに暑くなるんだよね。

鶴巻 肉体労働ですもんね（笑）。

摩砂雪 もうホント肉体労働だったね（笑）。ベスパ動かして、撮って、また動かして撮って……って。制作の2人に手伝ってもらって、人が来るとか来ないとか気にしながら、3人でやってたからね。あと、あのときは日焼けした記憶があるなあ。2月なのに。

――あははは（笑）。

摩砂雪 ずーっと外で、1日中やってたからね。だから、ガイナに帰ると店長（佐藤裕紀）に言われた気がする「酒でも呑んでるんですかー？ なんか顔が赤いですよ！」

だから鶴巻に「すぐ買え！」っていって（笑）。
鶴巻　あははは（笑）。
貞本　俺が乗ってるのは150を改造して、これに近付けてるヤツで。前のオーナーがドゥカティの黄色に塗っちゃったんです（笑）。
摩砂雪　でもこれって、普通のベスパより高いよね。
貞本　高いというか、もう型がない。国内にたぶん、30台とかそんなもんじゃないかな。
——それが撮影でドタドタ倒され、ボロボロに（笑）。
鶴巻　横浜で1回撮影したんだけれど、そのときは天気が良くなかったんですよね。
摩砂雪　途中から曇ってきちゃったんだよね。しかも、なんか国土交通省が文句言いに来るし。
——国土交通省？（笑）
摩砂雪　河川敷で撮ってたら、向こうからオッサンが来て怒られて（笑）。で、佐藤が怒られてる間にも撮ってた（笑）。
鶴巻　結局、太陽が欠けると途端に色が綺麗に出なくなるし。
摩砂雪　まあ、雲は常に移動してるからね。ずっと晴れてるわけじゃないから。
鶴巻　だから「もう1回撮らせて」っていって、三鷹の元ガイナの近くで撮り直したっていう。
——両方とも1日仕事だったんですか？
鶴巻　いや、最初は相当な長時間、何日もやってたと思う。
摩砂雪　横浜とか、河川敷のそばの遊歩道みたいなところとか。あと、多摩川の公園とかも行って。
鶴巻　2日ずつじゃ足りないでしょう。
摩砂雪　それであれだよ、多摩川のときも佐藤と2人っきりでやってたら、公園の管理人が来たんだよ。
鶴巻　また（笑）。
摩砂雪　テストで撮影してて、「今度来て、本番を撮ろう」っていってたんだけど、文句をいわれて。鶴巻に「コレしか撮れなかったけどどう？」って、一応使われてるんだけどね。でも、やっぱり雲の流れで色がどんどん変わっていって、まいったなあって。
——じゃあ、かなり時間がかかってるっていうことですね？
鶴巻　かかってますよ。1週間ぐらいやってんじゃないですか？
摩砂雪　それ以上やってたような気がする。
鶴巻　寒いし、風で吹きさらしのところでやってるから。
摩砂雪　天気待ちでアウトだったときにも結構あったしね。

――では最後に摩砂雪さんに、振り返ってみて感想を。

摩砂雪　いや、なんなんでしょうねえ……まあ、鶴巻くんの青春時代がここに詰まってるんだなって（笑）。

――（一同爆笑）

鶴巻　もう30歳を超えてたから、青春っていうのはははかられますけどね（笑）。

摩砂雪　でも、これがキッカケで奥さんと出会ったんじゃないの？

鶴巻　そうでしたっけ（笑）。

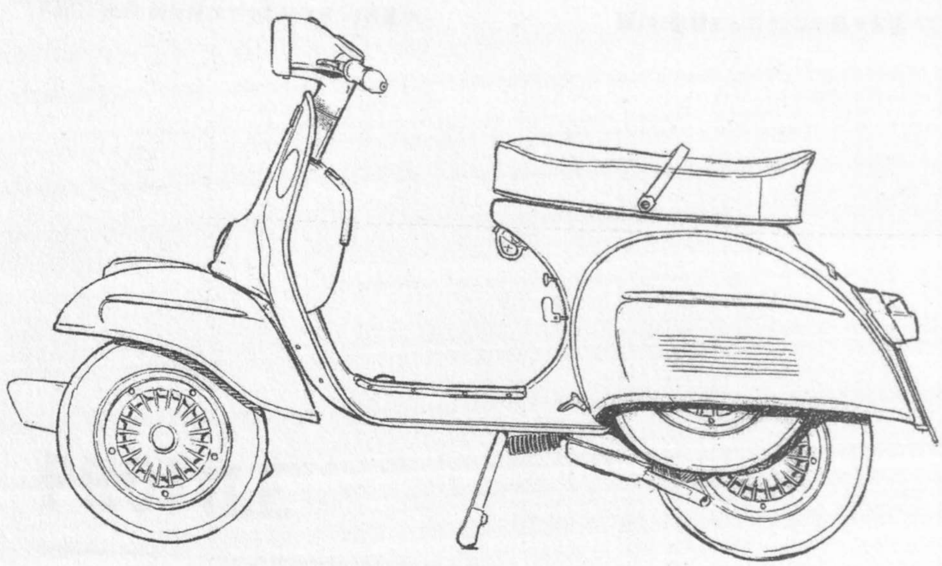
貞本　うん、そうだよ。そういえばそういうビッグイベントがあったもんね。

摩砂雪　一番楽しい時期だったんじゃない？（笑）

鶴巻　いやまあ、それは『フリクリ』の終わった後の話ですけど……。

――っていうか、そんな感想でいいんですか（笑）。

摩砂雪　でもホント、今日ここで観返すまで全然忘れてたなあ（笑）。





貞本義行

──1962年、山口県生まれ。大学卒業後、テレコム・アニメーションフィルムへ入社。その後、ガイナックス設立とともに移籍し『王立宇宙軍〜オネアミスの翼』に参加する。『新世紀エヴァンゲリオン』『フリクリ』『トップをねらえ2！』など、数多くのヒット作でキャラクターデザインを担当。現在『ヤングエース』にて漫画『新世紀エヴァンゲリオン』連載中。

鶴巻和哉

──1966年、新潟県生まれ。高校卒業後、専門学校を経て、スタジオジャイアンツに入社。その後、ガイナックスに移籍し『ふしぎの海のナディア』や『新世紀エヴァンゲリオン』などの作品に参加する。『フリクリ』『トップをねらえ2！』を監督し、独特の作風で注目を集めた。現在は『ヱヴァンゲリヲン新劇場版』の監督として、忙しい日々を送っている。

PROFILE

#01 フリクリ

演出：大塚雅彦 ／ 絵コンテ：鶴巻和哉、今石洋之、吉成 曜 ／ 作画監督：平松禎史

原画：大塚伸治、西尾鉄也、清水恵子、山口賢一、今石洋之、高村和宏、牛来隆行、高橋タクロウ、末冨慎治、吉成 曜、菊池聡延、石崎寿夫、芳垣祐介

#02 ファイスタ

演出：安藤 健 ／ 絵コンテ：摩砂雪 ／ 作画監督：今石洋之

原画：大塚伸治、西尾鉄也、末冨慎治、石崎寿夫、清積紀文、中山勝一、高橋タクロウ、高村和宏、小村方宏治、芳垣祐介、荒川真嗣、中原久文、江面 久、大平晋也、小倉陳利、山口賢一

#03 マルラバ

演出・絵コンテ：佐伯昭志 ／ 作画監督：平松禎史

原画：大塚伸治、西尾鉄也、清水恵子、末冨慎治、高村和宏、山口賢一、井上 鋭、清水 洋、摩砂雪、高橋タクロウ、吉成 曜、中原久文、石崎寿夫、芳垣祐介、大平晋也、嶋田俊彦、福世孝明、石浜真史

#04 フリキリ

演出：大塚雅彦 ／ 絵コンテ・作画監督：小倉陳利 ／ 友情メカニック作画監督：庵野秀明

原画：清水恵子、鈴木俊二、山口賢一、摩砂雪、新井浩一、芳垣祐介、高村和宏、清積紀文、久保まさひこ、平松禎史、石崎寿夫、小村方宏治、小倉陳利、鈴木 勤、今石洋之、高橋タクロウ、中原久文、佐藤 陵、大塚伸治、永島明子、三浦和也、鶴巻和哉、貞本義行、吉成 曜、北久保弘之、関野昌弘

#05 ブラブレ

演出：佐伯昭志 ／ 絵コンテ・作画監督：今石洋之

原画：大塚伸治、西尾鉄也、石崎寿夫、平松禎史、山口賢一、今石洋之、芳垣祐介、渡部圭祐、中山勝一、摩砂雪、小村方宏治、鈴木俊二、清積紀文、高村和宏、小倉陳利、高橋タクロウ、佐伯昭志、吉成 曜、庵野秀明

#06 フリクラ

演出：大塚雅彦 ／ 絵コンテ：鶴巻和哉、平松禎史、今石洋之 ／ 作画監督：平松禎史

原画：大塚伸治、西尾鉄也、山口賢一、井上 鋭、鈴木俊二、中山勝一、小西賢一、摩砂雪、小村方宏治、今石洋之、新井浩一、清水 洋、清水恵子、佐伯昭志、磯 光雄、小倉陳利、鈴木 勤、中原久文、高橋タクロウ、芳垣祐介、平松禎史、高村和宏、鶴巻和哉

CAST

ナンダバ・ナオ太：水樹 洵

ハルハラ・ハル子：新谷真弓

サメジマ・マミ美：笠木 泉

ナンダバ・カモン：松尾スズキ

ナンダバ・シゲクニ：糸 博

ニナモリ・エリ：伊藤実華

マナベ・ガク：宮島 章

マサムネ・マサシ：鈴木和人

ミユミユ：？

アマラオ：大倉孝二

キツルバミ：千葉千恵巳

ミヤジ・ジュンコ：福井裕佳梨

STAFF

企画・原作：GAINAX

原案・監督：鶴巻和哉

脚本：榎戸洋司

キャラクターデザイン・ビジュアルコンセプト：貞本義行

作画監督：平松禎史、今石洋之、小倉陳利

美術監督：小倉宏昌

色彩設計：高星晴美

編集：浅野真樹子

音楽：光宗信吉、the pillows

主題歌：the pillows『Ride on shooting star』

プロデューサー：佐藤雅信、西沢正智、佐藤裕紀

制作：Production I.G、GAINAX

製作：フリクリ製作委員会

発売・販売元：キングレコード

STAFF & CAST

illustration：KAZUYA TSURUMAKI



フリクリックノイズ

2010年8月14日　印刷
2010年8月20日　第一刷発行

著者　鶴巻和哉
　　　貞本義行

特別ゲスト　摩砂雪

取材・文　宮昌太朗

写真　辺見真也

ブックデザイン　大橋一毅［DK］

協力　株式会社ガイナックス
　　　株式会社キングレコード

編集協力　村井克成

編集　林 和弘

発行人　落合美砂

発行所
株式会社太田出版
東京都新宿区荒木町22 エプコットビル1F
TEL：03-3359-6262
振替口座：00120-6-162166
太田出版HP　http://www.ohtabooks.com/

印刷・製本　中央精版印刷株式会社

ISBN978-4-7783-1222-0 C0095



9784778312220
1920095009506
定価（本体950円＋税）
太田出版
ISBN978-4-7783-1222-0
C0095 ¥950E